芹生谷遺跡Ⅳ

大阪府埋蔵文化財調査報告2014－1

芹生谷遺跡Ⅳ

平成26年12月

大阪府教育委員会

芹生谷遺跡Ⅳ

大阪府埋蔵文化財調査報告二〇一四―一

大阪府教育委員会

芹生谷遺跡Ⅳ

大阪府教育委員会

序　　文

芹生谷遺跡は大阪府の南東部、南河内郡河南町芹生谷、中に所在する古墳時代から中世に至る集落遺跡です。遺跡の周辺は東に葛城山系が広がり、宅地化が進む府内にあって田園が広がるのどかな風景が今なお残されています。

近年、このような田園を東西に貫く国道309号が開通し、これに取り付く南北道路として、国道309号河南赤阪バイパス道路の整備工事が始まりました。

工事に先立ち、本府教育委員会では平成19年から継続的に埋蔵文化財の発掘調査を実施し、古墳時代後期の竪穴住居や中世の掘立柱建物などを検出しました。

今回の調査では古墳時代後期の竪穴住居が四棟確認され、あらたに飛鳥時代初頭の大規模な水路もみつかりました。竪穴住居の発見は集落の一端を示すばかりでなく、発見された土器の時期などから、隣接する国史跡金山古墳の造墓集団との関連が示唆され、この地を拠点とする豪族の実態を知る手がかりになるでしょう。

また、飛鳥時代初頭の水路は、河南台地を広域に灌漑するための用水路の一部と考えられ、現在まで連綿と続く水田開発の起源を知る上で重要な資料になるものと思われます。

本調査の実施にあたっては、地元の方々をはじめ、大阪府都市整備部をはじめとする関係各位に、多大なご協力を賜りました。深く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政に一層のご協力とご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年12月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　荒井　大作

例　　言

1．本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受けて実施した一般国道309号河南赤阪バイパス道路整備工事に伴う、河南町芹生谷、中所在、芹生谷遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査の調査番号は、１３０１４である。

3．現地調査は、文化財保護課調査第二グループ副主査西川寿勝を担当者とし、平成25年７月１日から平成26年２月14日まで実施し、引き続き遺物整理作業を調査管理グループ主査小浜成、副主査藤田道子を担当者とし、実施した。

4．現地調査にあたり、河南町教育委員会赤井毅彦氏・向井妙氏、千早赤阪村教育委員会吉光貴裕氏、大阪大谷大学名誉教授中村浩氏のご協力を得た。

5．出土遺物・記録資料などは、本府教育委員会において保存・管理している。

6．検出遺構の写真撮影および、本書の執筆・編集は、西川寿勝が担当した。

7．本調査の基準点測量・写真測量は、株式会社南紀航測センター大阪支店に委託して実施した。撮影フィルムは同社で保管している。

8．出土遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。

9．発掘調査・遺物整理および、本書の作成に要した費用は、大阪府都市整備部が負担した。

10．本書は、300部作成し、一部あたりの印刷単価は、550円である。

本文目次

序文
例言
本文目次　挿図目次　図版目次

第Ⅰ章　位置と環境 …… 1

第１節　歴史的環境
第２節　調査経緯
第３節　調査方法
第４節　層序

第Ⅱ章　調査成果 …… 13

第１節　25－１区・25－７区の調査
第２節　25－２区・25－６区の調査
第３節　25－４区・25－５区の調査
第４節　25－３区の調査
第５節　出土遺物

第Ⅲ章　まとめ …… 37

第１節　今回調査の成果
第２節　金山古墳の被葬者像

図版

報告書抄録・奥付

挿図目次

図１　周辺遺跡分布図 …… 2
図２　調査区位置図 …… 4
図３　調査区地区割図 …… 6
図４　調査進捗図 …… 8
図５　調査区南半全体図 …… ９～10
図６　調査区北半全体図 …… 11～12
図７　25－１・25－７区全体図 …… 14
図８　25－７区遺構 …… 15
図９　25－２区南端の遺構 …… 15
図10　25－２・25－６区全体図 …… 17
図11　25－２区の遺構 …… 18
図12　溝２－１・溝２－２ …… 19
図13　溝２－１出土陶磁器 …… 20
図14　24－２・25－４・25－５区全体図 …… 22
図15　24－２・25－４区掘立柱建物 …… 23
図16　竪穴住居４－１～４－４ …… 24
図17　竪穴住居４－１・竪穴住居４－２ …… 25
図18　竪穴住居４－３・竪穴住居４－４ …… 26
図19　24－２区竪穴住居 …… 27
図20　金属製品 …… 28
図21　24－１・25－３区全体図 …… 30
図22　24－１・25－３区掘立柱建物 …… 31
図23　サヌカイト剥片 …… 33
図24　古墳～飛鳥時代の土器 …… 33
図25　中世の土器 …… 34
図26　実測遺物対照表 …… 36
図27　河南台地の現行水路と灌漑模式図 …… 40
図28　武内宿禰系譜と蘇我氏関連系譜 …… 40

図版目次

巻頭図版　金山古墳と調査区周辺
図版１　全景１
図版２　全景２
図版３　25-１区全景
図版４　25-２区全景
図版５　25-３区全景
図版６　25-４区全景
図版７　25-５区全景
図版８　25-６区全景
図版９　25-７区全景
図版10　25-１区・25-７区遺構
図版11　25-２区溝２-１・溝２-２
図版12　25-２区溝２-２
図版13　25-２区・25-６区遺構
図版14　25-３区・25-４区遺構
図版15　25-４区掘立柱建物４-３柱穴
図版16　25-４区掘立柱建物４-１～４-３
図版17　25-４区掘立柱建物４-１柱穴
図版18　25-４区竪穴住居４-１・４-２
図版19　25-４区竪穴住居４-１・４-２柱穴
図版20　25-４区竪穴住居４-３・４-４
図版21　25-４区竪穴住居４-３・４-４柱穴
図版22　石器・古墳～飛鳥時代の土器・中世の遺物１
図版23　中世の遺物２
図版24　竪穴住居出土土器
図版25　溝２-２出土土器
図版26　溝２-１出土陶磁器

第Ⅰ章　位置と環境

第１節　歴史的環境

河南町は、大阪府の南東部に位置する。昭和31年に町制が始まって以来、町の人口は約一万人で推移している。現在の大阪の中心部から25km圏に位置する立地の良さにも関係する。古代においても難波宮や平城宮とは直線で約26km、飛鳥古宮や藤原宮とは約17kmの距離にある。したがって、古代には交通の要衝として栄えてきた。現在は、主な交通機関がバスで、近鉄長野線の富田林駅と喜志駅に連絡するのみである。近年、国道309号が町域を東西に貫通し、これが重要な幹線道路となっている。交通網の整備は町政の大きな課題となっていた。

河南町域は、東西6.7km、南北7.5kmにひろがり、面積は約25㎢である。北は太子町、西は富田林市、南は千早赤阪村と接し、東は金剛山地の稜線で奈良県葛城市と御所市に接する。葛城・金剛に連なる山地部とその前面に広がる河南台地からなり、町域の１/３は山地で、土地開発は限られてきた。河南町の産業は都市部への近郊農業が大きな比重を占め、ナス・キュウリや庭木などの観賞用樹の栽培が有名である。土地利用は、面積の過半が山林で、農地・ため池を加えた緑地系が３/４を占める。

河南台地で土地開発がはじまる時期は明瞭でない。河南町寛弘寺遺跡・神山遺跡や千早赤阪村誕生地遺跡などの発掘調査で、縄紋土器や打製石器が確認されており、ふるくは葛城・金剛の山麓を移動しながら縄紋人が活動していたことがうかがえる。芹生谷遺跡でも、縄紋時代のものと思われる石槍・石鏃が発見されている。

寛弘寺古墳群の東側低地部にあたる神山遺跡では、弥生時代末と古墳時代中期の集落が発見されている。なかでも、古墳時代中期集落は西側丘陵上の寛弘寺古墳群（ツギノ木山支群）を出現させた集団に関わるものと推測される。初期須恵器・韓式系土器・製塩土器なども発見されており、須恵器生産に関わる渡来人をも含む可能性もある。

奈良時代に成立したとされる『住吉大社神代記』には仁徳天皇の御世に天皇が大神にさとされ、「大鳥守をもって紺口の溝を掘らしめよ」とあり、上鈴鹿・下鈴鹿・上豊浦・下豊浦の四か所の原の四万頃(しろ)の田を開墾した、と伝承する。『日本書紀』仁徳十四年条にもほぼ同様の記述があり、これによってこの地の水田は豊かに実り、百姓も豊かににぎわい、凶年の心配がなかった、という。さらに『住吉大社神代記』は石川や針魚川の水を屯倉の田畑に受水しているのはこの開発が起源、とする。

芹生谷遺跡周辺には六世紀後半から七世紀初頭にかけての古墳が散在していることが知られる（図１）。上流部の千早赤阪村には御旅所古墳・御旅所西古墳・浄心寺古墳・森屋古墳群などがある。御旅所北古墳には二上山凝灰岩製の組合式家形石棺が二基おさめられていた。森屋古墳群は詳細が不明だが、六世紀後半の須恵器が採集され、浄心寺古墳でも同時期の須恵器が見つかっている。

芹生谷遺跡の南東には全長86ｍを測る双円墳の金山古墳があり、六世紀後半から末の近畿においては群を抜く規模の墳丘をもつ古墳である。さらに、金山古墳の北側で同時期頃の４基の小規模古墳が発見され、石塚古墳群と命名された(図２)。

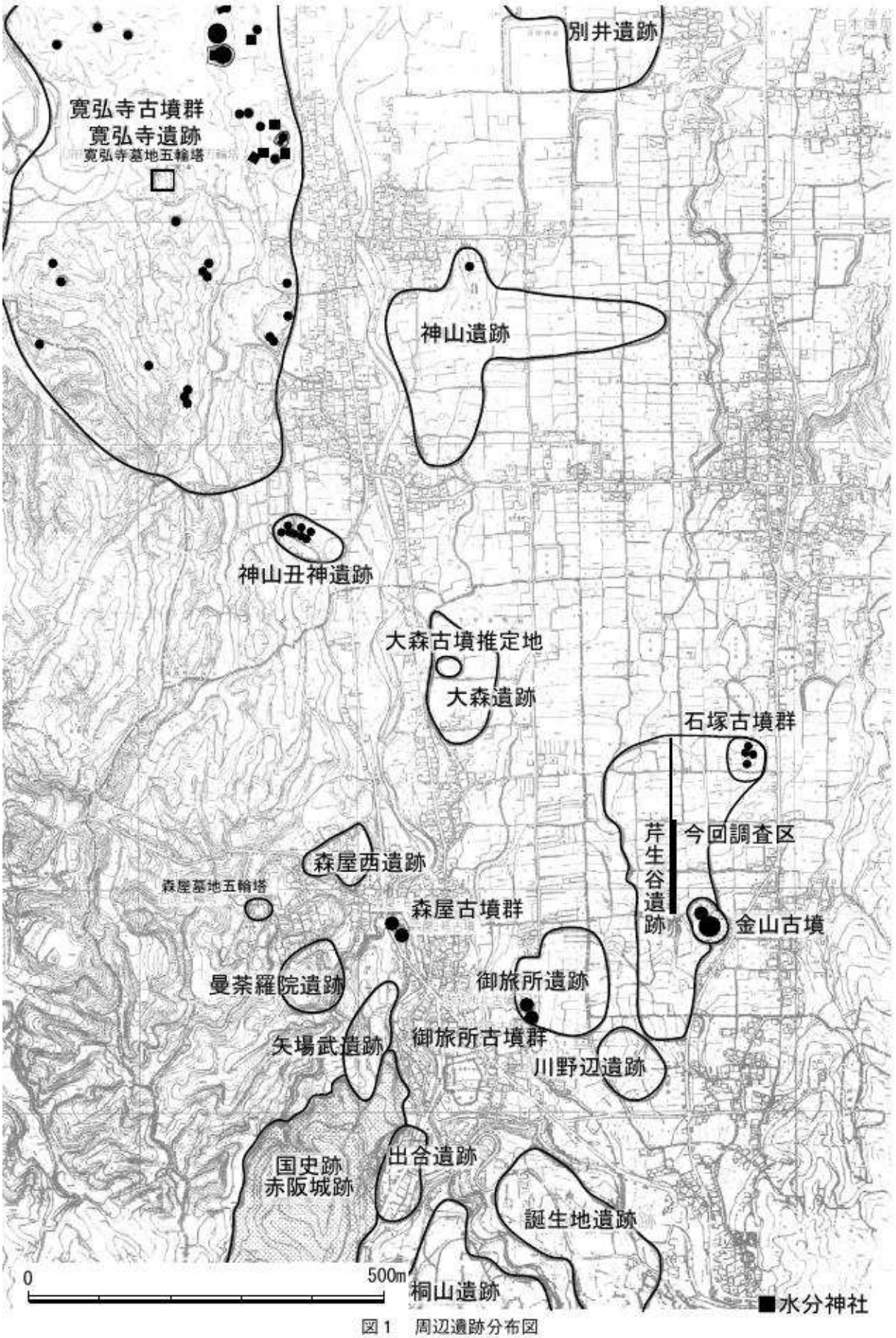

別井遺跡
寛弘寺古墳群
寛弘寺遺跡
寛弘寺墓地五輪塔
神山遺跡
神山丑神遺跡
大森古墳推定地
大森遺跡
石塚古墳群
芹生谷遺跡
今回調査区
森屋西遺跡
森屋墓地五輪塔
森屋古墳群
金山古墳
曼荼羅院遺跡
御旅所遺跡
矢場武遺跡
御旅所古墳群
川野辺遺跡
国史跡
赤阪城跡
出合遺跡
誕生地遺跡
桐山遺跡
0
500m
■水分神社

図１　周辺遺跡分布図

河南台地下流部は西の丘陵に寛弘寺古墳群・神山丑神古墳群が、東の丘陵に一須賀古墳群・平石古墳群がある。東西あわせて200基以上の横穴式石室墳からなる大型群集墳である。これらは六世紀から七世紀にかけて築かれたものである。一須賀古墳群の被葬者集団は蘇我系氏族とも推定されており、これらの群集墳は河南台地のみを基盤とする集団によるものではないようだ。

金山古墳は今回調査区の南東約50mに位置する双円墳で、南丘の径55m、高９m、北丘の径39m・高７mを測る。北丘は二段築成、南丘は三段築成で周濠がめぐる。南丘の石室は不明だが、北丘の横穴式石室内は開口しており、二上凝灰岩製のくり抜き式家形石棺が二基おさめられている。石室長は16m、玄室長は3.8m・幅2.5m・高さ2.8m、羨道長６m・幅1.7m・高さ２mである。

古くから知られた二つの家形石棺は後期古墳の基準資料とされ、奥が六世紀後半、手前が六世紀末とされる。手前の石棺は奈良県藤の木古墳と同じ二上山から産出される凝灰岩製で、同型式とされ、藤ノ木古墳の被葬者が蘇我馬子によって殺された穴穂部皇子・安宅皇子墓とすれば、587年前後の造営である。

開口する北丘石室は盗掘にあっており、1946年の発掘調査では石室から、銀環２、瑠璃玉１、鉄製帯金具３、鉄刀２振り分の破片、鉄刀子１、鉄鏃十数本、馬具、土師器坏、須恵器高坏、壺などが出土した。また、1993年の発掘調査では、北丘石室前庭部で須恵器子持ち器台、壺などが出土している。

奈良県春日大社に残された『春日大社文書』の「河内龍泉寺坪付帳案文」によると、龍泉寺は蘇我馬子の創建で、鎌倉時代に興福寺の末寺となる以前は、蘇我氏の旧領として石川郡の南部をひろく領域する大寺院だったと伝える。文書は承和十一年（844）に焼失した記録の仔細を、天喜五年（1057）に訴えた時までに成立した文書の写しなどと伝える。寺域や伽藍・水田坪数・山地と「科長郷」の範囲などが記される。文書にある「科長郷」が『倭名類従抄』などの史料に登場しないなどの不審な点があるものの、この地域の地名や龍泉寺伽藍の規模などを知る上で貴重な史料である。そして、芹生谷に該当する地名が「薦生谷」と記されており、この頃に遡る水田開発の一端がうかがえる。

中世以降、遺跡周辺は条里水田となり、家屋が散在する状況だったと思われる。先に示したようにもともと龍泉寺の所領であったものが、龍泉寺が興福寺の末寺となったことから、興福寺の所領とされたのかもしれない。

その一方、元慶七年（883）に成立した『観心寺勘録縁起資材帳』によると石川郡に「中村荘」や「杜屋荘」の記述がある。中村は芹生谷の北側に現在も地名が残る村落であり、杜屋は芹生谷の南側に現在も地名が残る森屋の村落である。この頃に条里区画が成立していたとすれば、調査区周辺もいずれかの範疇にはいる。この地域が龍泉寺や興福寺の管理下で条里水田の開発があったのか、もともと観心寺の管理による荘園開発だったのかはさらなる検討が必要だろう。

そして、現在に残る条里水田の区画が中世の景観を伝えるものなのか、改変が加えられたものなのかについても、検討を要する。これまでの調査で、水田畦畔中に17世紀初頭にくだる唐津焼陶器などがみられることから、太閤検地時や、それ以降に土地改変された可能性もあると思われる。

調査年度（平成）	調査番号	種類	調査区総面積（㎡）	報告書
14	02023	試掘調査		①
19	07007	試掘調査	1160	②
20	08021	本調査	610	③
21	09030	本調査	970	③
22	10050	本調査	320	③
24	12007	本調査	2100	④
25	13014	本調査	5084	本書
26	14008	本調査	500	

①『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』7　2004
②『芹生谷遺跡』　2011
③『芹生谷遺跡』Ⅱ　2012
④『芹生谷遺跡』Ⅲ　2013

図２　調査区位置図

第２節　調査経緯

一般国道309号の延伸が河南台地に及び、本府教育委員会で平成14年に試掘調査を実施した。このときは芹生谷遺跡の北側部分で大きな谷状の落ち込みがみられ、遺構・遺物の確認はできなかった。平成17年、遺跡地周辺で暫定的に二車線のみ309号が開通すると、その南側で南北800ｍにわたり、幅員21ｍの河南赤阪バイパス整備事業が計画された。

これをうけて、平成19年に試掘調査を実施し、全域で遺物の広がりを確認、一部に遺構が残されていることもわかった。その結果、道路予定地を含む地域をあらたに芹生谷遺跡と命名して本調査の対応をすることとなった。ところが、その後の国・府などの行政改革や公共事業の見直しによって用地買収や道路整備事業は遅滞した。その間の平成20年・21年・22年は部分的な調査を実施、古代から中世にいたる集落の一端が確認された(図２)。

平成24年になって道路整備事業が再開された。道路計画地北半の約165ｍ、2100㎡に及ぶ地域である。そして、平成25年度は平成24年度の南側と、西側の仮設道路部分など、あわせて5084㎡を調査した。調査区は平成22年度に調査した22－Ａ区・22－Ｂ区を含みこむ。今回は遺構の続きが四周に確認されることが予想されたため、この部分についても埋め戻し土を除去して遺構のつながりを確認した。

平成19年度の試掘調査は開発対象地全域に27か所の試掘トレンチを実施して行った。基本的に遺構掘削はせずに埋め戻しているものの今回調査区では遺構面より深く掘削され、大半で遺構は失われていた。

平成20年度の調査は今回調査２区・５区の東側に幅約２ｍ、長さ約300ｍで行われている。調査地は現在農業用水路が敷設されている。この部分でも溝・柱穴などが確認され、遺構や遺物がひろく分布することが判明した。

平成21年度の調査は金山古墳の南側で６か所に分けて行われた。掘立柱建物や溝などが多数発見され、平安時代後期から南北朝時代にかけての居住域の広がりが確認された。

平成22年度の調査は金山古墳の西北で二か所に分けて行われた。遺構の削平が激しく、古墳時代後期の須恵器や土師器・鎌倉時代の瓦器などが発見されている。この調査区は今回調査区25－１区に含みこまれる。

平成24年度の調査は国道309号との取り付き部で行われた。古墳時代後期の掘立柱建物・竪穴住居、中世の掘立柱建物が検出された。出土遺物は須恵器、土師器、瓦器などである。

今回の現地調査（平成25年度）は平成25年７月１日より実施、翌年２月14日に終了した。調査区は七ヶ所に分かれ、調査順に地区番号をつけた（図３・４)。25－１区と25－７区は東西で重なる。25－２区と25－６区も同様である。仮設道路部分を切り替えて調査したためである。25－４区と25－５区も東西で重なるが、仮設水路を地元と調整して調査したためである。

遺物整理作業と本書の作成は現地調査と併行して開始し、平成26年11月末に終了した。現地調査の結果、古墳時代後期の竪穴住居４棟、掘立柱建物３棟、飛鳥時代初頭の溝などが発見された。平成25年11月２日には調査成果の一部を現地説明会で公開した。

なお、平成26年度は、今回調査区の南側の水路部分で、その切り替えに伴う約430㎡の本調査が予定されている。

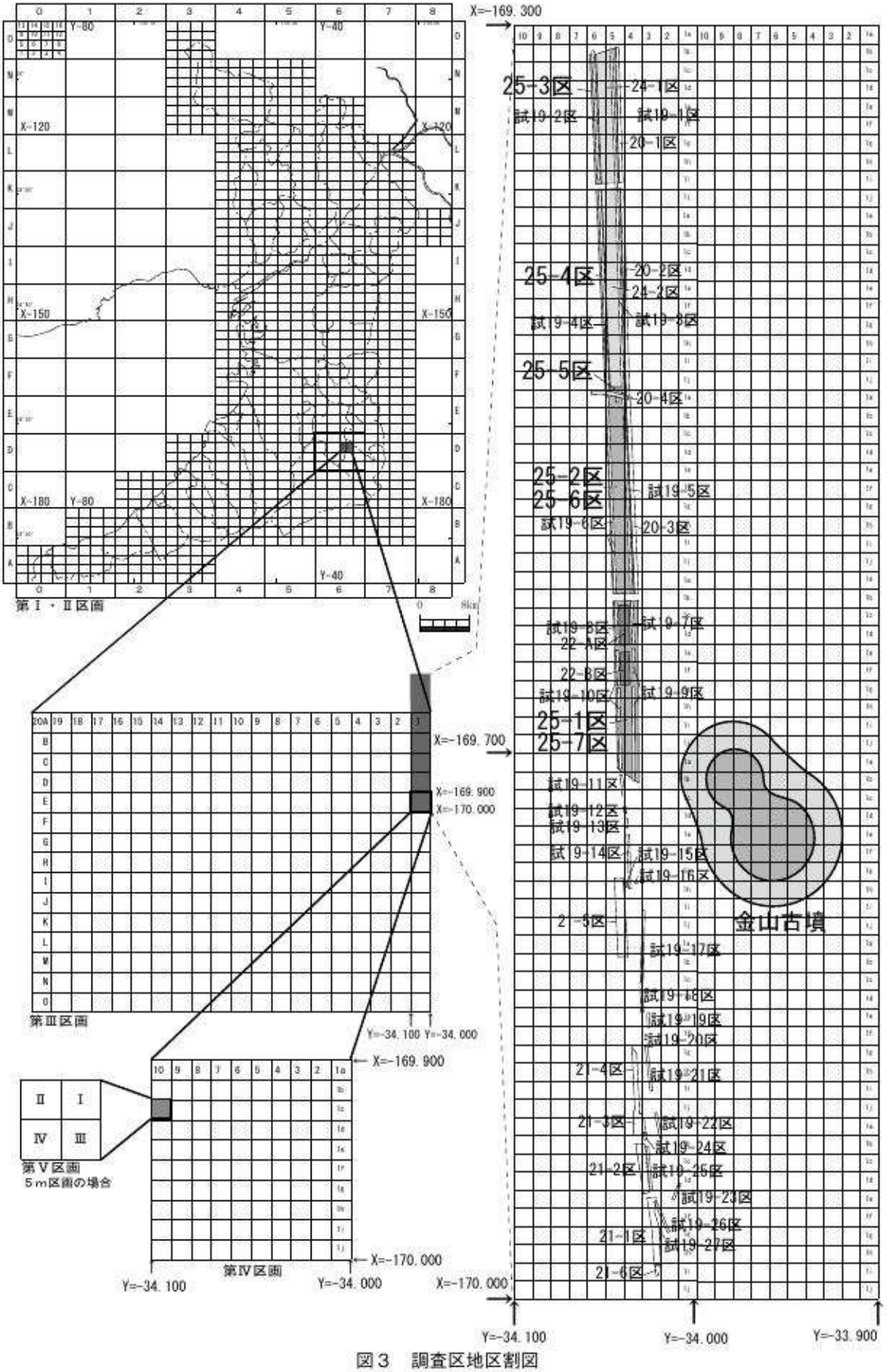

X=-169.300
Y-80
Y-40
X-120
X-150
X-180
第Ⅰ・Ⅱ区画
0 8km
25-3区
24-1区
試19-2区
試19-1区
20-1区
25-4区
20-2区
24-2区
試19-4区
試19-3区
25-5区
20-4区
25-2区
25-6区
試19-5区
試19-6区
20-3区
試19-8区
試19-7区
22-A区
22-B区
試19-10区
試19-9区
25-1区
25-7区
X=-169.700
X=-169.900
X=-170.000
試19-11区
試19-12区
試19-13区
試19-14区
試19-15区
試19-16区
金山古墳
21-5区
試19-17区
試19-18区
試19-19区
試19-20区
21-4区
試19-21区
21-3区
試19-22区
試19-24区
21-2区
試19-25区
試19-23区
試19-26区
21-1区
試19-27区
21-6区
第Ⅲ区画
Y=-34.100
Y=-34.000
X=-169.900
Ⅱ
Ⅰ
Ⅳ
Ⅲ
第Ⅴ区画
5m区画の場合
X=-170.000
第Ⅳ区画
Y=-34.100
Y=-34.000
X=-170.000
Y=-34.100
Y=-34.000
Y=-33.900

図３　調査区地区割図

第３節　調査方法

大阪府教育委員会・大阪府文化財センターの発掘調査は調査区の位置を共通して表現できるよう、大阪府発行１／10000地形図を基準として４段階の区分による地区割を実施している（図３）。
第Ⅰ区画は南西隅を基準として縦軸をＡ～Ｏ、横軸を０～８に区画する。芹生谷遺跡は河南町の南端に位置するＤ６区内にある。

第Ⅱ区画は第Ⅰ区画の南西隅を基準として16等分したもので縦1500ｍ、横2000ｍの範囲である。今回調査地は15区・11区にあたる。

第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100ｍ方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸を１～20、横軸をＡ～Ｏに区分したものである。今回調査地は１Ｎ区・１Ｏ区・１Ａ区・１Ｂ区・１Ｃ区内にある。

第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を10ｍ方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸をａ～ｊ、横軸を１～10に区分したものである。今回調査区の北端はＤ６－15－１Ｎ－６ｂ、南端はＤ６－11－１Ｃ－５ｂである。さらに細かく調査区を分けて緻密に遺構・遺物を分析する場合もあるが、今回は遺構・遺物の密度が低かったので、さらなる地区設定は行っていない。

本文中の北は座標北を示す。水準は東京湾平均海水面（Ｔ．Ｐ.）を使用した。遺構面の標高は最も高いところで130ｍ前後、最も低いところで117.5ｍ前後である。概して、北が低く、南ほど高くなる。

調査地は里道やこれまでの調査区を挟み、７か所に分かれるため、調査の順に１区～７区とした。１・２・３・５区はクレーン撮影による写真測量、４・６・７区はヘリコプター撮影による写真測量をそれぞれ委託で行い、１/20・１/100の遺構図・等高線図を作成した。写真測量によって得られたデータは三次元で遺構断面が表現できるようにデータ処理している。基準点はＧＰＳ測量による。三級電子基準点から調査区各所に四級基準点を設けて実施した。

発掘調査は地表面の旧耕作土を重機で除去し、水田床土を人力掘削、地山面で遺構検出した。地山は水田化に伴い、地山面まで切り土され、低地部に客土、ひな壇造成されていた。遺構検出できたのは切り土のない地山部分のみである。

出土遺物の総量は少なく、遺存状況もよくない。コンテナ10箱の須恵器・土師器・土師質土器・瓦質土器など、在地の土器類が大半である。その他、中世の中国製磁器と、北宋の銅銭、鉄釘などが出土している。出土遺物は現地調査と併行して洗浄・注記・実測・復元などをおこなった。その後、出土遺物は委託写真撮影を行った。

また、本書を刊行するにあたり、遺構・遺物図面の浄書をデジタル図化し、省力化をはかった。アドビシステムのイラストレータＣＳ４による。

第４節　層序

芹生谷遺跡周辺はもともと水田が広がっていた。今回調査区も深さ約0.2ｍの水田耕作土を除去すると、遺物を包含する水田床土があり、その直下が地山であることが確認できていた。水田は永年の耕作によって、徐々に小規模な区画が統合されていったようで、水田床土が２、３層に分けられる部分もある。

地山は花崗岩や安山岩などの礫や砂利を含む茶褐色の粘質土で、洪積段丘の上面にあたる。試掘調査を含むこれまでの調査では、この中から旧石器時代の遺物などは確認されていない。

遺構は、地山に掘削されたものを検出した。したがって、古い遺構の上面は永年の耕作で削平の激しいところが多い。水田床土に含まれる須恵器・土師器などの遺物も、粉砕されたものが多く、磨滅が激しく、遺存状況は悪い。また、多くの地区でサヌカイト剥片・古墳時代の土器片・中～近世の土器片が混在して発見された。大半の遺物は二次堆積で、遺構に伴う遺物はわずかだった。

基本層序は、水田耕土が黒褐粘土、遺物包含層である水田床土が暗褐土・灰褐土・茶褐土など、地山が礫混じりの茶褐土である。これまでの試掘調査などでおおよそ、土層の堆積状況は確認されており、層序は先の調査に倣った。各区とも水田耕土は５YR2/1黒褐色(①)で、地山は10YR7/8黄橙色(③)に対応する。遺物包含層である水田床土は10YR6/1・10YR4/1などの褐灰色である（図７・10・14・21)。

地山は概して南が高く、北が低い。さらに、調査区の南端は深い谷となる。ひな壇状の水田は緩やかに傾斜する斜面地の北側を削って南側に客土し、平坦面をつくりだす。したがって、地山を削った部分は、包含層がなく、遺構も削平されている。逆に、客土された部分は遺構が残され、遺物包含層が0.3～0.8ｍ程度ある。

遺物包含層である水田床土はいくつかに分層でき、層境で遺構面の有無を確かめながら人力掘削したが、層境に顕著な遺構はなかった。詳細については各区に記すが、これまでの調査報告でも細かく検討されており、準拠した。

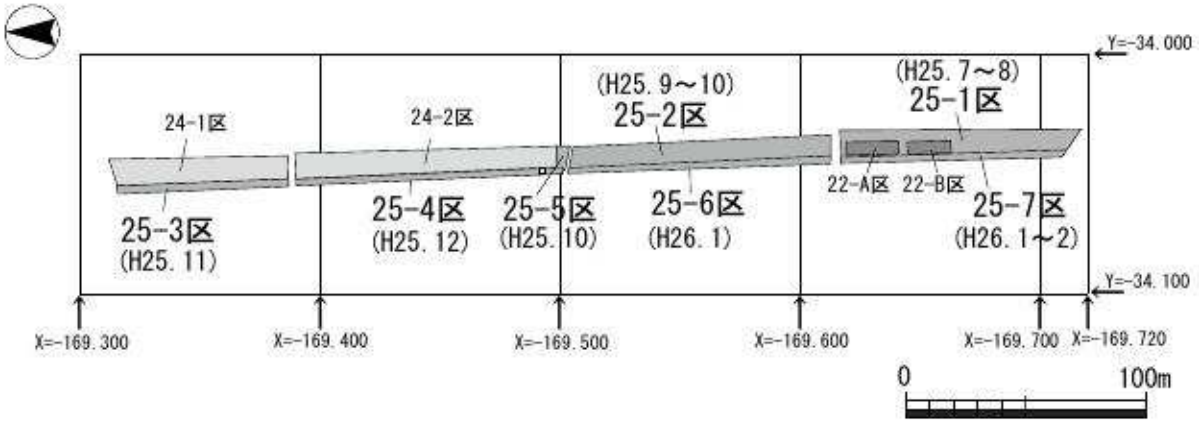


図４　調査進捗図

第Ⅱ章　調査成果

第１節　25－１区・25－７区の調査

25－１区・25－７区は一連の調査区であるが、仮設道路を切り替えるため、東西に分けて調査した。東側を25－１区、西側を25－７区と呼ぶ。この地区は南北に長く、南北約95m、幅約20mを測る(図７・図版３・９)。北側には25－２区・25－６区がある。平成19年試掘調査の試19－７区～試19－10区と、平成22年調査のA区・B区を含みこむ。南北が里道で、条里水田の坪境とされる。

現地調査は水田耕土を機械掘削で除去したのち、人力掘削で遺物包含層を一層ずつ掘削、遺構面を確かめながら実施した。約0.2mの深さの旧水田耕土を除去すると、水田床土が残る部分、地山となる部分がある。遺構面の標高（T．P.）は北端が128.5m前後、南端が129m前後、その間に数段の水田面がひな壇造成されていた。水田造成の際、傾斜地の高いところを削り、削った土を低いところに盛り上げて平坦面とする。削られた地山部分にはほとんど遺構は残されていなかった。逆に、客土された部分は0.5mちかくの遺物包含層が形成されたところもあった。サヌカイト剥片も数多く含まれていた。

発見された遺構はすべて地山を切り込んだもので、土坑・耕作溝などである。なお、調査区の南端は谷となり、２m以上の自然地形による落ち込みだった。

溝１－１～溝１－３は調査区南側で発見された。溝１－１は長さ約2.4m、幅約0.2m、深さ0.1mを測る斜行溝である。溝１－２は長さ約1.3m、幅約0.2m、深さ0.1mを測る南北溝である。溝１－３は長さ約2.8m、幅約0.2m、深さ0.1mを測る斜行溝である。周辺は遺跡内でもっとも高い場所にあたる。出土遺物はないが、付近から白磁碗と土師質土器皿三枚が発見された（図７・図25－40～42・57・図版10)。溝７－４は調査区の北西で発見された斜行溝である。長さ9.8m以上、幅約0.2m、深さ0.1mを測る。出土遺物はない。その他、溝群が調査区の北側や22－A区・22－B区で発見されている。いずれも、水田床土が浅く、地山まで削れた耕作痕跡と推定する。牛馬耕による鋤溝だろう。

土坑１－１・土坑１－２は、調査区の北端で近接して発見された。土坑１－１は長辺約0.3m、短辺約0.2m、深さ0.1mを測る楕円形土坑である。土坑１－２は直径約0.25m、深さ0.15mを測る。いずれも、埋め土は暗茶褐粘土で、出土遺物はない。

土坑７－１は直径約0.8m、深さ0.2mを測る。埋め土は炭混じりの淡褐粘土で、上面と底が黒褐色の炭で覆われ、掘り底は焼けて赤変する。火が焚かれた跡である。出土遺物はない(図８・図版10)。

土坑７－２は長辺約4.0m以上、短辺約1.8m、深さ0.3mを測る。土坑７－３は長辺約3.0m、短辺約1.8m、深さ0.2mを測る。土坑７－４は長辺約1.9m以上、短辺約1.3m、深さ0.1mを測る。土坑７－５は長辺約1.4m、短辺約0.6m、深さ0.15mを測る。土坑７－６は直径約0.8m、深さ0.5mを測る。いずれも、不定形土坑で、埋め土は暗茶褐粘土に礫が混じり、出土遺物はない。倒木などを処理した痕跡だろう(図８・図版10)。土坑７－５北側の包含層から鉄釘が出土している（図20－76)

その他、小穴が遺構面の各所で発見されている。いずれも上層の暗褐土で埋められる。遺物の出土はない。地山に大量の礫が含まれることから、おおかたはこれらの礫を抜き取った痕跡と考える。

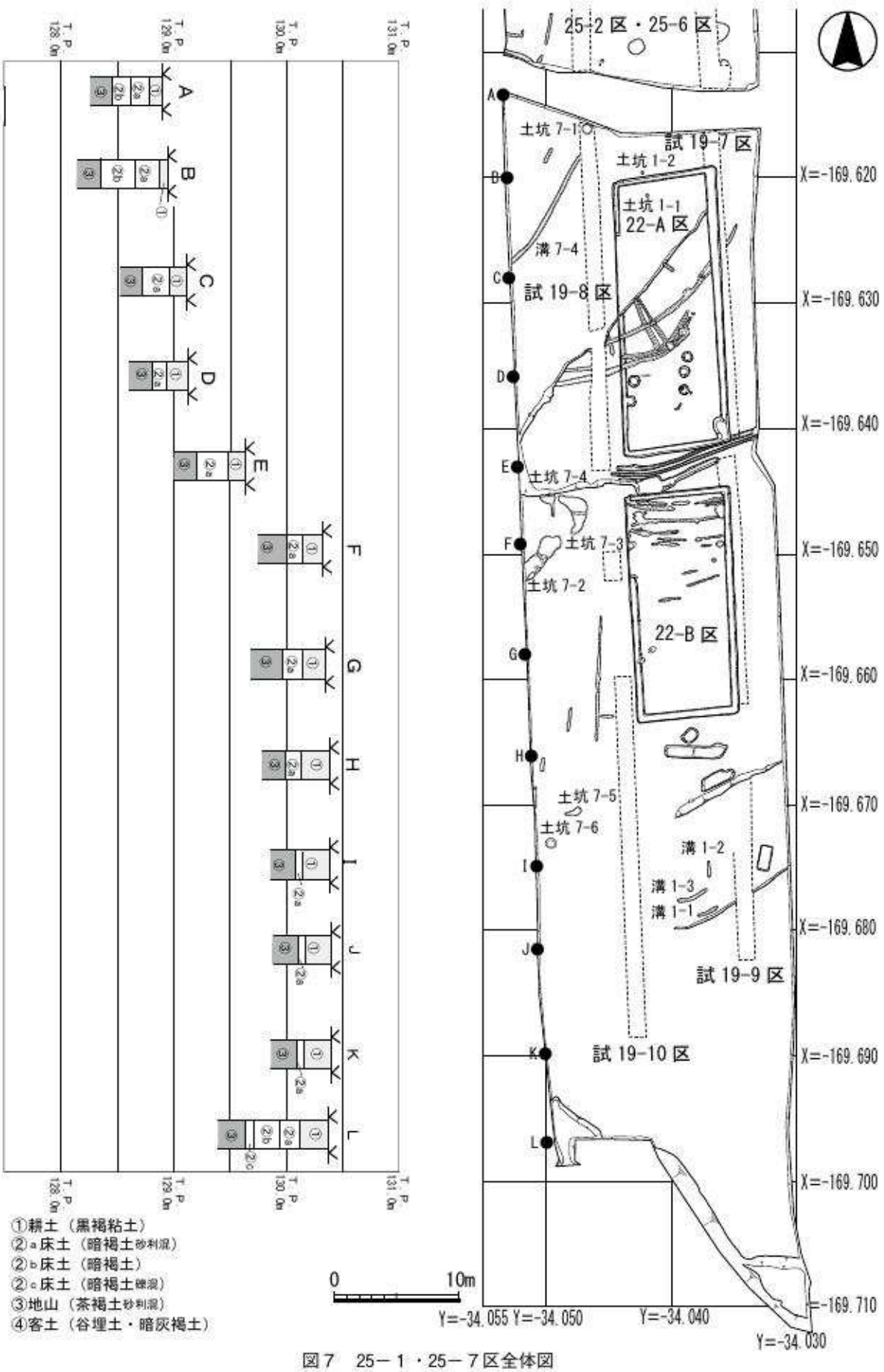


図7　25－1・25－7区全体図

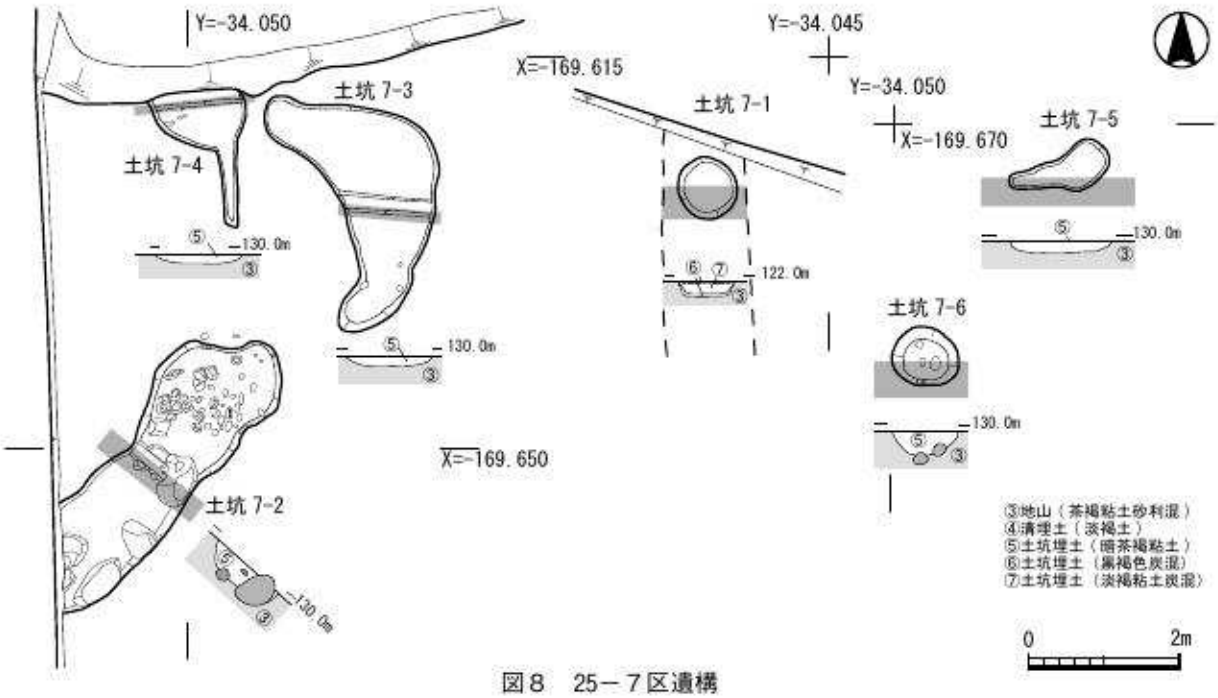


図８　25－７区遺構

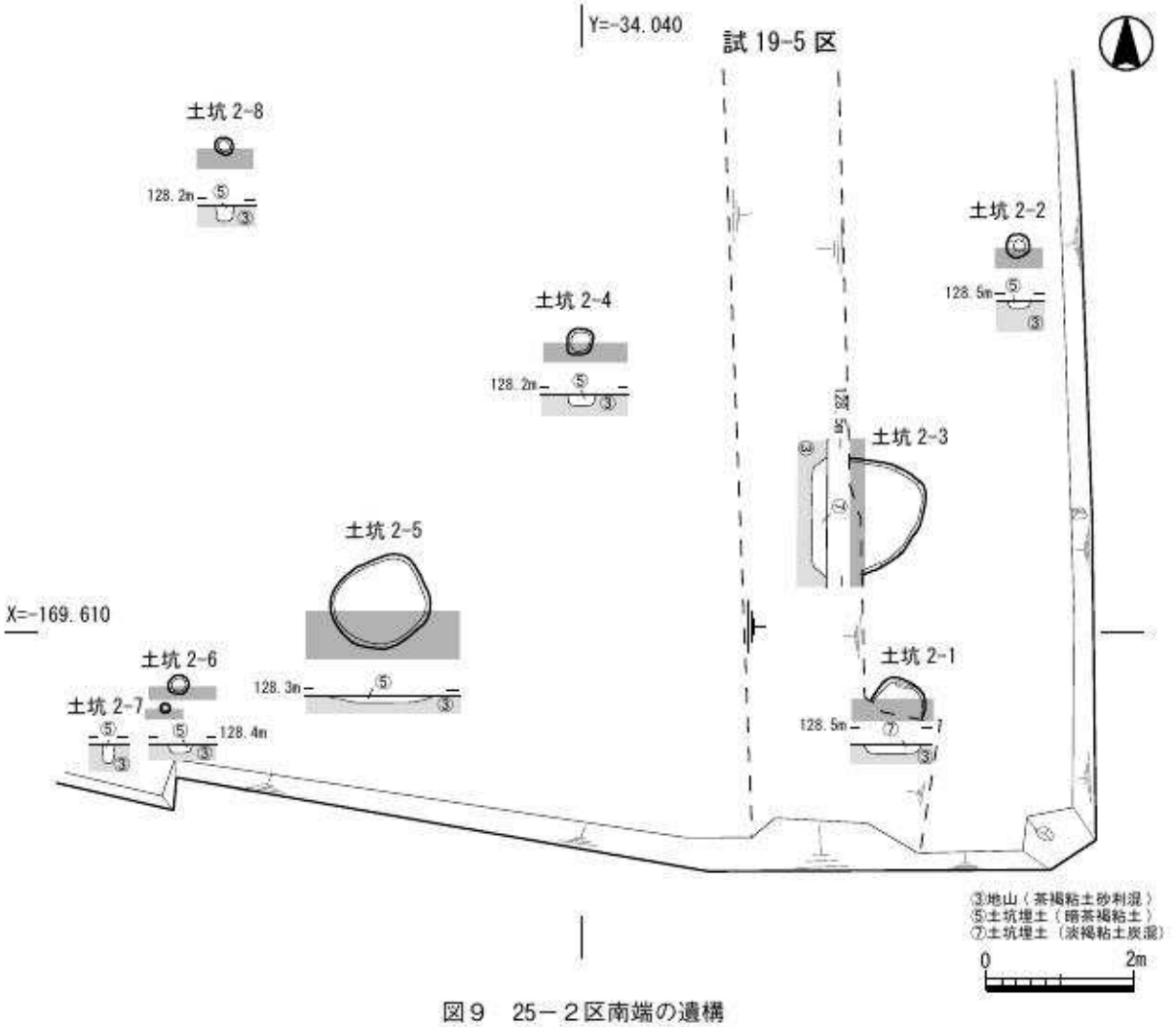


図９　25－２区南端の遺構

第２節　25－２区・25－６区の調査

25－２区・25－６区も一連の調査区であるが、仮設道路を切り替えるため、東西に分けて調査した。東側を25－２区、西側を25－６区と呼ぶ。南北約108m、幅約20mを測る（図10・図版４・８）。北側には25－４区・25－５区がある。平成19年試掘調査の試19－５区・試19－６区を含みこむ。南北に里道があり、これは条里水田の坪境とされる。調査区は一反四方の条里水田のほぼ中央を南北に貫く形状である。現地調査は他の調査区同様、水田耕土を機械掘削で除去したのち、人力掘削で遺物包含層を一層ずつ掘削、遺構面を確かめながら実施した。約0.2m程度の旧水田耕土を除去すると、水田床土が残る部分、地山となる部分がある。遺構面の標高（T．P．）は北端が125.5m前後、南端が127.5m前後、その間に四段の水田面がひな壇造成されていた。約３ｍの比高差の傾斜地にほぼ均等に26m間隔で四段の水田を造成する際、各水田の北側を削り、削った土を南側に盛り上げて平坦面としたようだ。削られた地山部分に遺構はほとんど残っていなかった。逆に、客土部分は0.8mちかく遺物包含層が形成されたところもあった。

発見された遺構はすべて地山を切り込んだもので土坑・溝などがある（図９・11・12・図版11～13）。土坑２－１～土坑２－８は調査区の南端で発見された。土坑２－３は直径約1.2m、深さ0.2mを測る円形土坑で、西側は削られている。土坑２－５は直径約1.25m、深さ0.1mを測る。他の土坑は直径と深さともに0.2m前後である。いずれの土坑も埋め土は暗茶褐粘土、出土遺物はない。ただし、遺構群北側の包含層から北宋銭「元豊通宝」が出土している（図20－77）。

土坑２－11～土坑２－15は調査区の中央で発見された。土坑２－11は直径約1.3m、深さ0.7mを測り、井戸の可能性がある。埋め土は炭や砂利混じりの淡褐粘土で、近世の陶磁器が含まれていた。他の土坑は直径と深さともに0.2m前後である。いずれの土坑も埋め土は暗茶褐粘土、出土遺物はない。

土坑２－16～土坑２－19は調査区の東北で発見された。土坑２－17は長辺0.9m、短辺0.6m、深さ0.1mを測る。東側は溝２－１によって削られている。他は直径と深さともに0.3m前後である。いずれの土坑も埋め土は暗茶褐粘土、出土遺物はない。

土坑６－１～土坑６－６は調査区の西南で発見された。土坑６－２は長辺約1.2m、短辺0.9m、深さ0.3mを測る楕円形土坑である。土坑６－６は長辺約1.0m、短辺約0.5m、深さ0.3mを測る。他の土坑はいずれも楕円形か不定形で、長辺約１m前後、深さ0.3m前後、埋め土は礫が混じる暗茶褐粘土で、出土遺物はない。

溝２－１は調査区の東端で検出された長さ75m以上つづく条里に沿った南北溝である。東の肩は平成20年度の20－１区で調査されているが、この時は新しい時期のかく乱としている。溝の幅は約２ｍに及ぶと思われる。埋め土は灰褐強粘土で、砂利が混じる流水堆積を示す。流水と滞水を繰り返したようなレンズ堆積を見せる部分もみられ、排水溝の機能とともに、周辺の水田へ配水するための灌漑用水路と考える（図12・図版11）。

上面にはコンクリートのU字ブロックによる水路があり、近年まで同じ場所に水路があったようだ。北端でも、木杭の痕跡が見られるなど、何度も改修やしゅん渫が行われていたと考える。そして、現在もほぼ同じ場所にコンクリート製の水路がある。常時水が流れ、堰を設けて付近の水田に入・排水する。

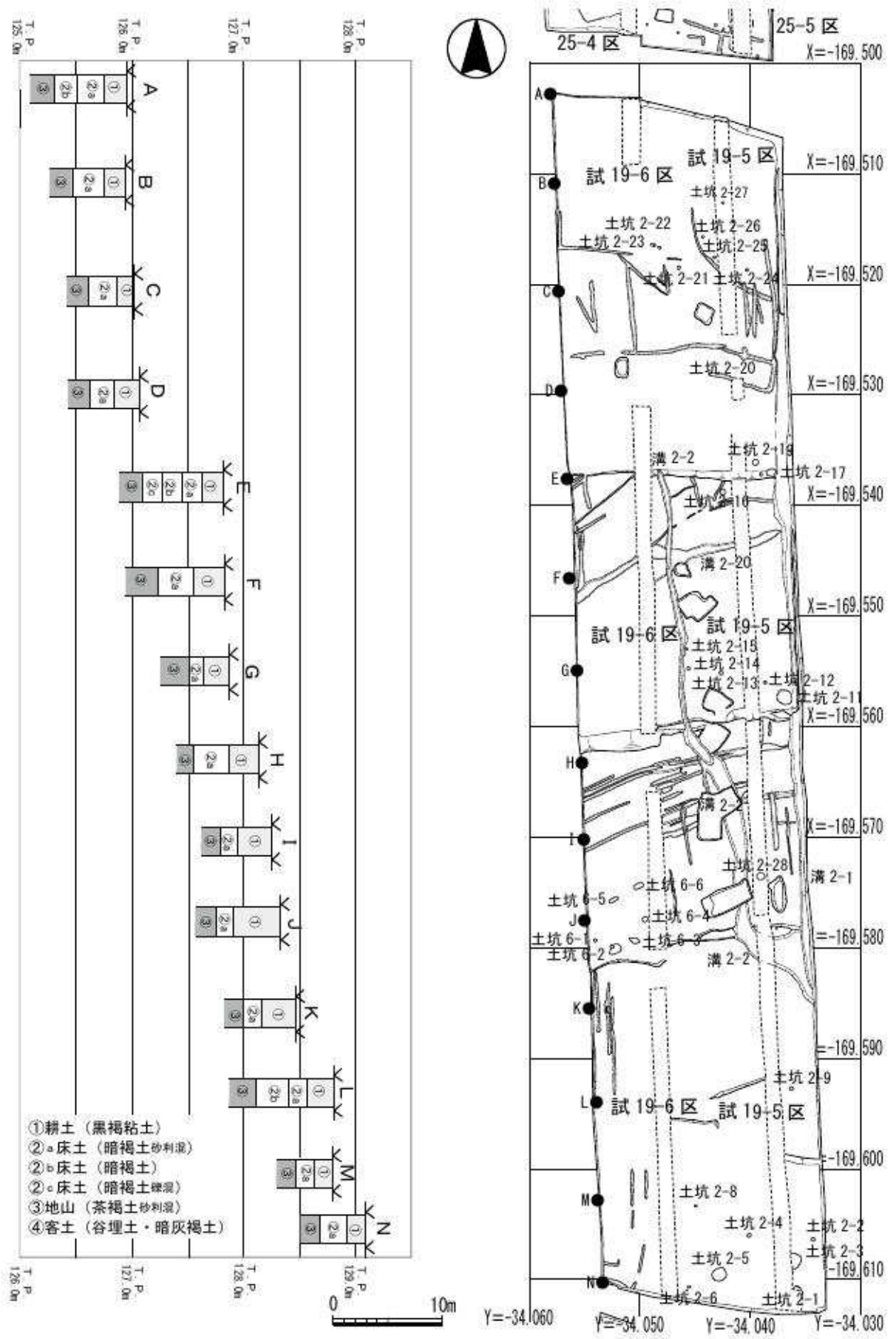


図10　25－２・25－６区全体図

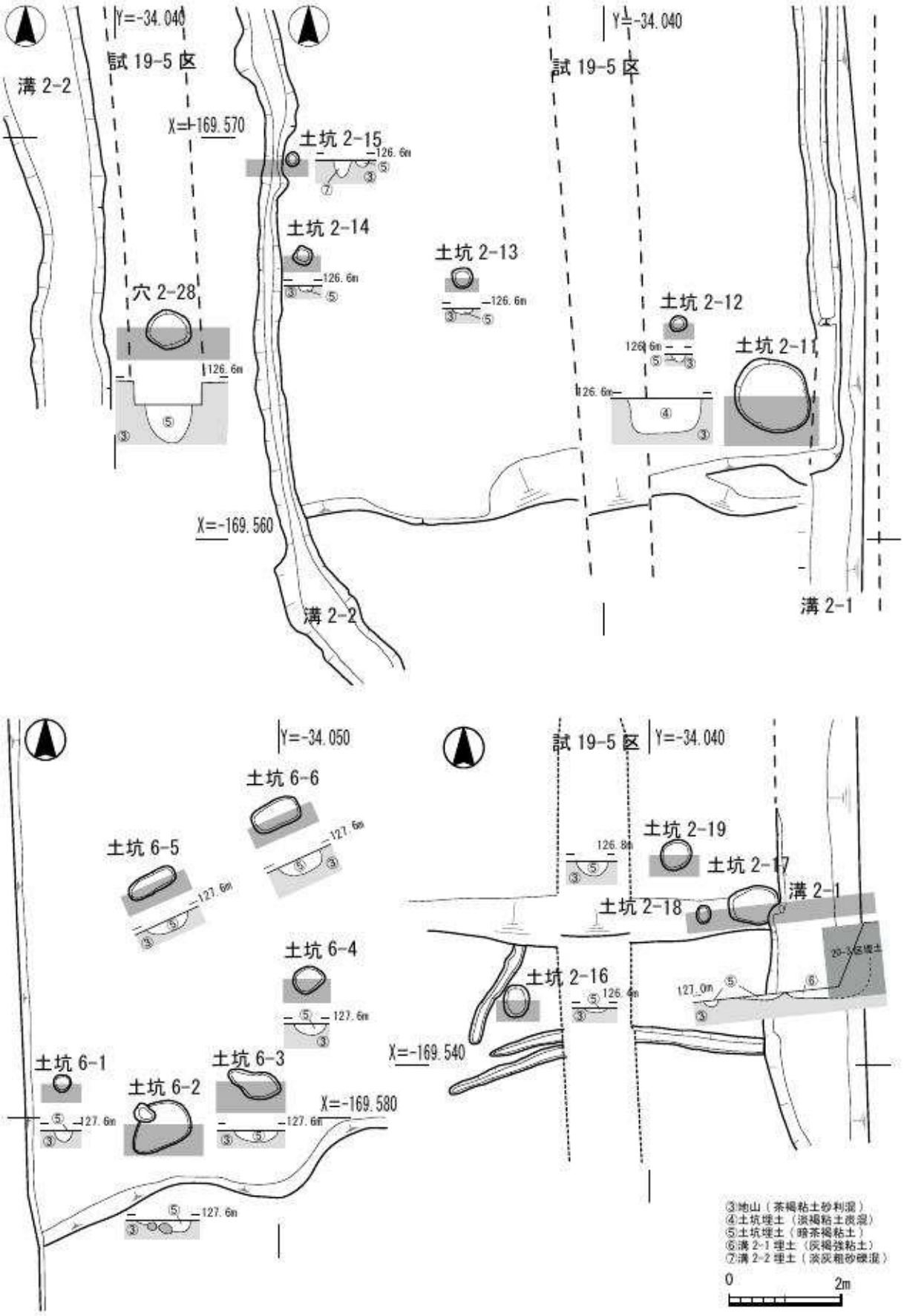

Y=-34.040
試 19-5 区
溝 2-2
X=-169.570
土坑 2-15
126.6m
土坑 2-14
126.6m
穴 2-28
126.6m
X=-169.560
溝 2-2
Y=-34.040
試 19-5 区
土坑 2-13
126.6m
土坑 2-12
126.6m
土坑 2-11
126.6m
溝 2-1
Y=-34.050
土坑 6-6
127.6m
土坑 6-5
127.6m
土坑 6-4
127.6m
土坑 6-1
127.6m
土坑 6-2
土坑 6-3
127.6m
X=-169.580
127.6m
試 19-5 区
Y=-34.040
土坑 2-19
126.8m
土坑 2-17
溝 2-1
土坑 2-18
土坑 2-16
126.4m
127.0m
X=-169.540
③地山（茶褐粘土砂利混）
④土坑埋土（淡褐粘土炭混）
⑤土坑埋土（暗茶褐粘土）
⑥溝 2-1 埋土（灰褐強粘土）
⑦溝 2-2 埋土（淡灰粗砂礫混）
0
2m

図11　25－２区の遺構

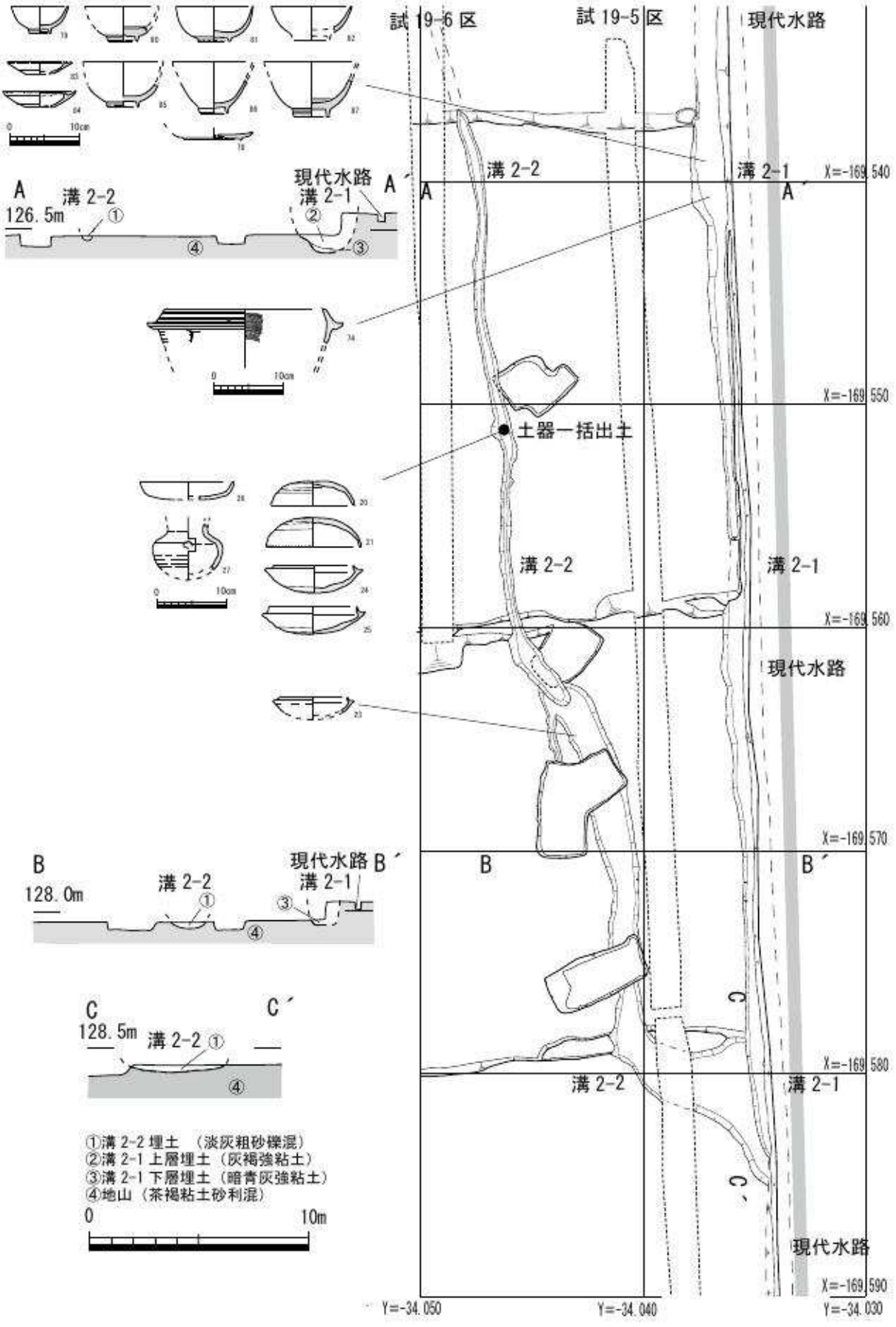

試 19-6 区
試 19-5 区
現代水路
溝 2-2
溝 2-1
X=-169,540
X=-169,550
X=-169,560
X=-169,570
X=-169,580
X=-169,590
Y=-34,050
Y=-34,040
Y=-34,030
土器一括出土
A
A´
126.5m
B
B´
128.0m
C
C´
128.5m
①溝 2-2 埋土　（淡灰粗砂礫混）
②溝 2-1 上層埋土（灰褐強粘土）
③溝 2-1 下層埋土（暗青灰強粘土）
④地山（茶褐粘土砂利混）
0
10m

図12　溝２－１・溝２－２

溝２－１からは鎌倉時代の瓦器碗・羽釜などとともに、近世の陶磁器、近・現代の陶磁器が混在して発見された。中世の遺物は二次的な混入の可能性もあるが、磨滅は少なく、中世より近年に至るまで連綿と続いた水路と考える（図13・図版26）。

溝２－１はその上流に、調査区南端で坪境里道があり、道にそって東に直角に折れるようだ。里道に沿って、現在も民家があり、生活排水や雑廃などが混入している。さらに上流部は、現在も金山古墳の東側を周溝にそって流れる水路がある。上層は灰褐強粘土、下層は暗青灰強粘土で流水によるレンズ堆積の痕跡が見られる。

溝２－１の下流も、やはり坪境の里道で東に折れるようだ。現在も里道の北東の水田に水を落とす水路がある（図12・図版11）。

溝２－２は溝２－１と南端が重なる形で見つかった。ほぼ南北に約48mが検出され、地形に沿って直線状に伸び、北側は条里水田の造成によって削平される。南側は調査区の東に逃げ、直線ならば上流は金山古墳の方向になる溝である。溝２－１にさかのぼる条里水田以前の溝である（図12・図版11・12）。

溝２－２の形状は南端で幅約6.2m、深さ約0.2mを測り、浅くて広い。対して20mほど下流では幅約2.2m、深さ0.4mとなり、北端では幅0.4m、深さ0.3mとなる。北半分は上面が激しく削平され、溝の底部のみしか残存していないものの、掘り底は凸凹している。

埋め土は暦の混じる淡灰粗砂による。滞水による粘土堆積はほとんどない。検出された48mのうち、溝底の比高は約２mを測る。付近の水田に引水する水路と考えた場合、やや急峻の感がある。また、溝２－１のように、埋め土にはよどみからなる粘土層のレンズ堆積がほとんどなく、粗砂にのみ覆われる。この粗砂は溝２－２の南端（上流）と北端（下流）でほとんど粒度や色調が変わらず、広範囲に一気に埋もれたようだ。溝２－２と軸を同じくするような、自然地形に沿った水田遺構はこれまでに発見されなかった。したがって、溝２－１が周辺水田の灌漑水路であることに対し、溝２－２は灌漑用としても、かなり下流の水田に向けたもので、発見された部分は水を通過させることだけを目的としたもののようだ。

溝２－１からの出土遺物はほとんどない。溝の北側で底部がえぐれ、引っかかったように飛鳥時代初頭（TK209新段階）の須恵器蓋杯４点とハソウ・土師器碗の破片が発見された（図12　図版25）。比較的完形に近い個体が多く、埋没時期はこの頃と考える。ただし、何度かしゅん渫されたように溝底部の段差が認められることから長期に及ぶ可能性がある。

そのほか、南北溝や東西溝が土坑群と重なるように発見されている。大半は中世以降の耕作溝と考える。溝２－20は調査区の中央で発見された東西溝で、溝２－２を切る。埋め土は上層の暗褐土による。瓦器椀の破片が含まれていた（図25－49）。

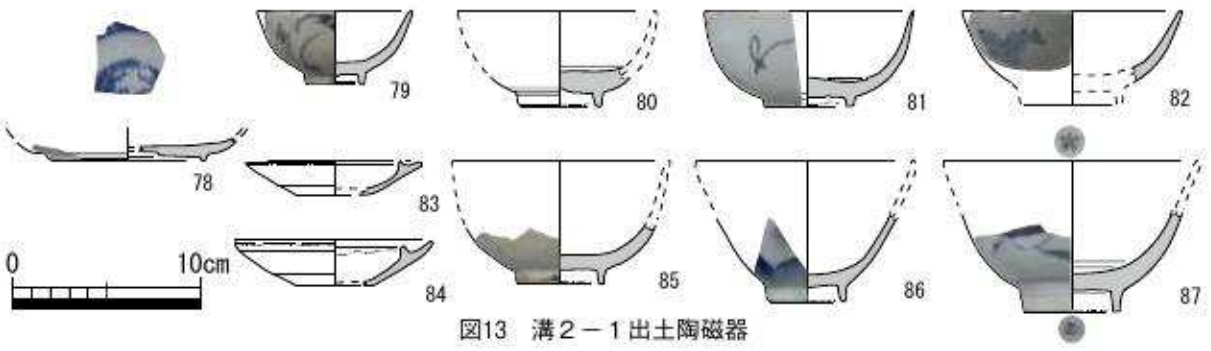


図13　溝２－１出土陶磁器

第３節　25－４区・25－５区の調査

24－２区・25－４区・25－５区は一連の調査区であるが、仮設道路の切り替えなどのため、東側の幅約12mのみを平成24年に調査し、今回は西側の幅８ｍと南端の幅５ｍを調査した。以上の調査地は南北約108m、幅約20mを測る(図14・図版６・７)。北側には24－２区・25－３区がある。平成19年試掘調査の試19－３区・試19－４区を含みこむ。南北に里道があり、これは条里水田の坪境とされる。調査区は一反四方の条里水田のほぼ中央を南北に貫く形状である。

現地調査は他の調査区同様、水田耕土を機械掘削で除去したのち、人力掘削で遺物包含層を一層ずつ掘削、遺構面を確かめながら実施した。約0.2m程度の旧水田耕土を除去すると、水田床土が残る部分、地山となる部分がある。遺構面の標高（T．P．）は北端が120.4m前後、南端が125.8m前後、その間に六段の水田面がひな壇造成されていた。約３ｍの比高差の傾斜地にほぼ均等に26m間隔で六段の水田を造成する際、各水田の北側を削り、削った土を南側に盛り上げて平坦面としたようだ。削られた地山部分に遺構はほとんど残されていなかった。逆に、客土された部分は0.8mちかく遺物包含層が形成されたところもあった。概して、古墳時代後期の遺物が目立つ。

発見された遺構はすべて地山を切り込んだもので、掘立柱建物・竪穴住居・土坑・溝などがある（図15～19・図版14～21)。

掘立柱建物４－１は調査区の北西で発見された４×２間以上の建物である(図15・図版16・17)。長辺5.6m以上、短辺2.7mを測る。地形に沿って、南北の軸線を北側でやや西に振る。建物の上面から須恵器杯身が出土した（図24－13)。

掘立柱建物４－２は掘立柱建物４－１の南で発見された２×２間以上の建物である（図15・図版14・16)。長辺３m、短辺1.8m以上を測る。掘立柱建物４－１・４－３と軸線が共通し、同時期と思われる。長辺東側の柱埋め土から須恵器杯身片が、建物の上面から須恵器杯身が出土した(図24－11・12)。また、建物北側の土坑４－32からは土師器甕が出土した（図24－29)。

掘立柱建物４－３は掘立柱建物４－２の東で発見された３×２間の建物である（図15・図版15・16)。長辺3.7m、短辺3.1mを測る。掘立柱建物４－１・４－２と軸線が共通し、同時期と思われる。建物の東側柱穴は平成24年度調査の24－２区で確認されているが一部はかく乱などで失われていた。南端の妻柱埋め土から須恵器杯蓋片が出土した（図24－８)。

４区北側の掘立柱建物４－２の南で、一辺約3.8m、深さ約0.1mの隅丸方形の竪穴住居４－１が同形状で一辺約4.5m、深さ約0.1mの竪穴住居４－２が、ほぼ重なるようにして発見された(図16・17・図版18・19)。竪穴住居は25－４区の掘立柱建物４－１～４－３・と軸線がほぼ共通し、約300ｍ南に位置する金山古墳の方向に入口を向ける。二つの建物は上面がかなり削平され、基底部のみ遺存、発見当初から一部の柱穴抜き取り痕跡が確認された。

竪穴住居４－２に伴うカマド痕跡の遺存状況よりみて、少し小ぶりの竪穴住居４－１を埋め戻し、竪穴住居４－２へと建て替えたようだ。カマド痕跡は建物の北辺中央にあり、赤変した床面の広がりのみによる。カマドの上部構造は後の水田化に伴い四散したと考える。

二つの建物はいずれも四隅に柱穴を伴う。柱間は竪穴住居４－１が1.8×1.8m、４－２が1.9×1.8m

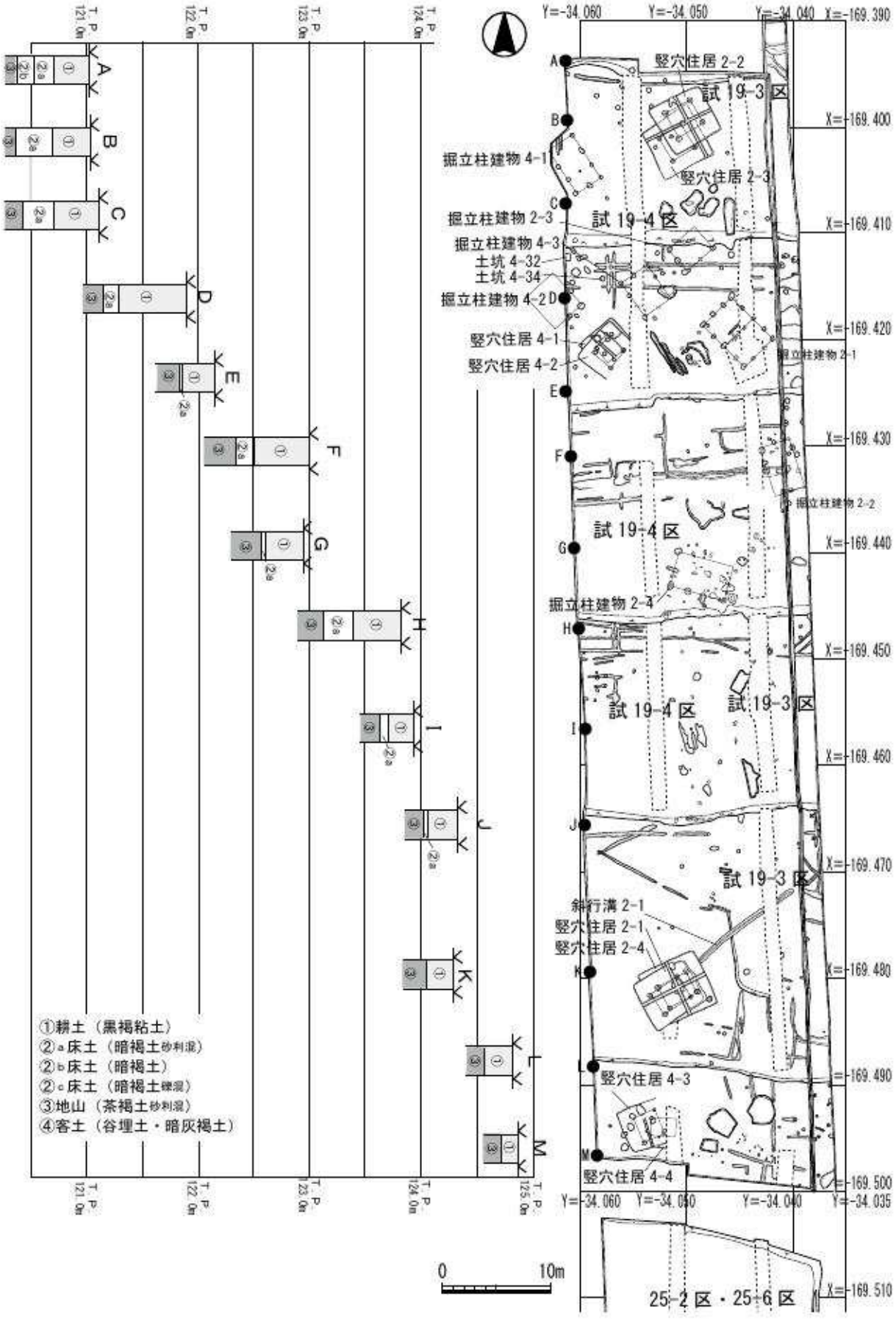


図14　24－2・25－4・25－5区全体図

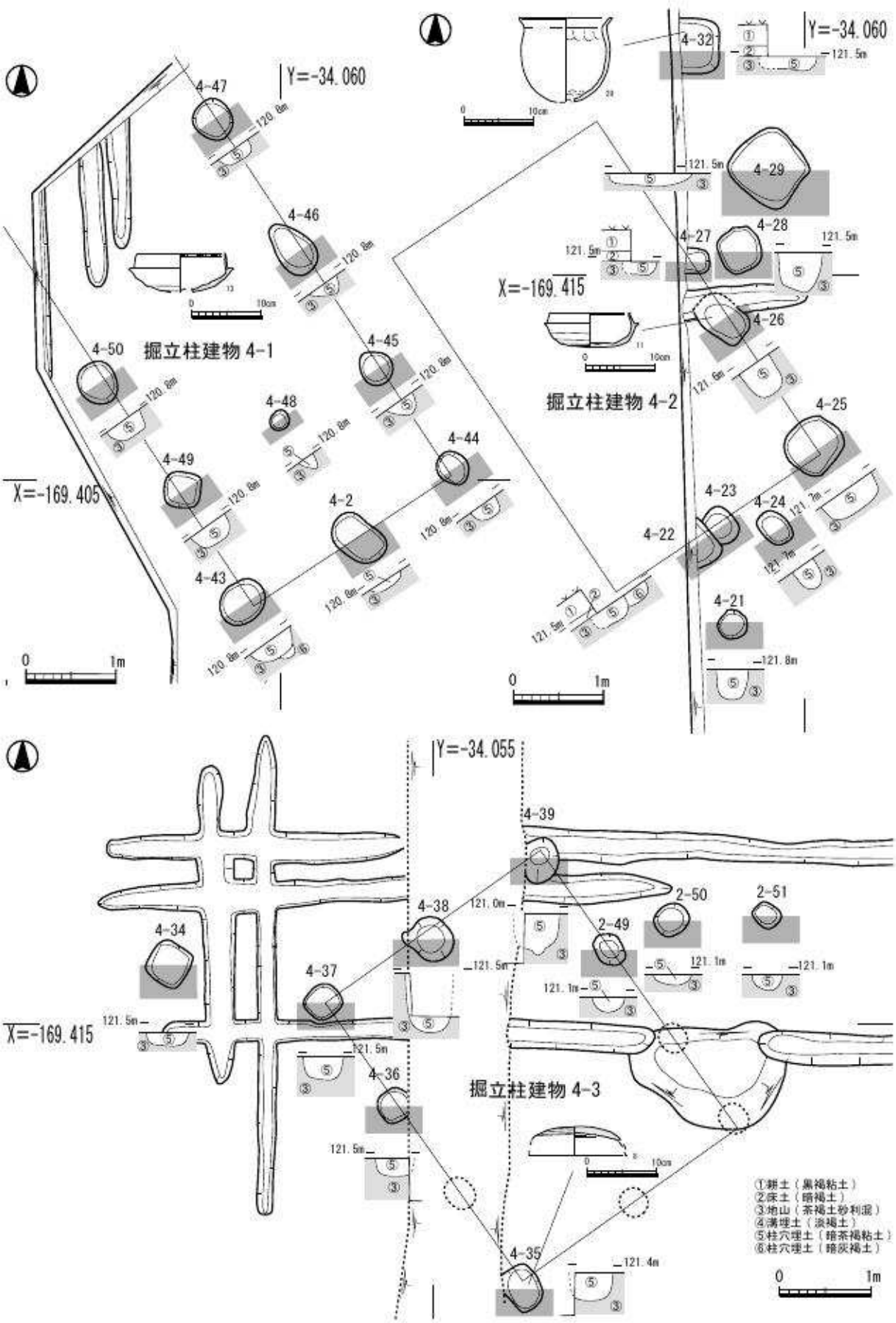
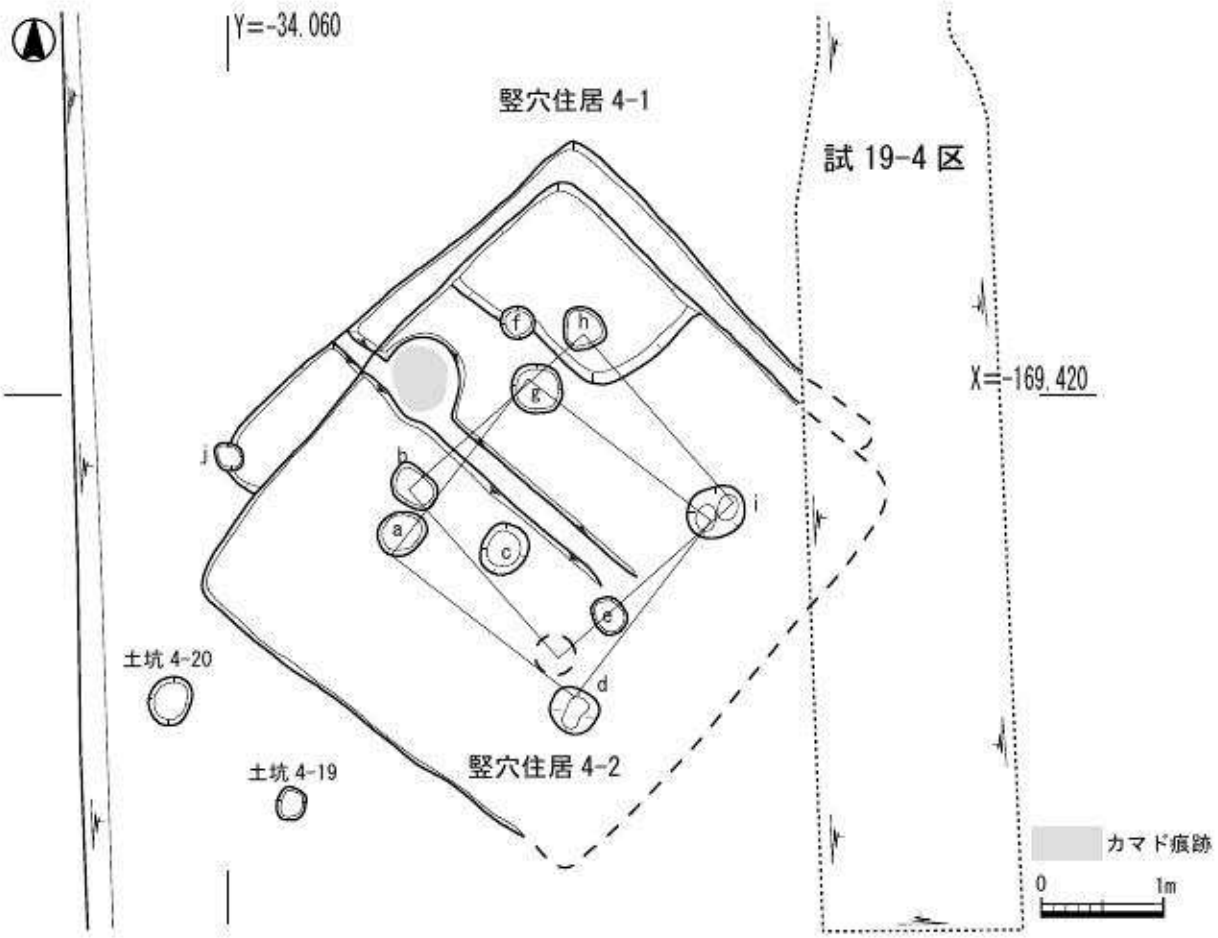


図15　24－２・25－４区掘立柱建物



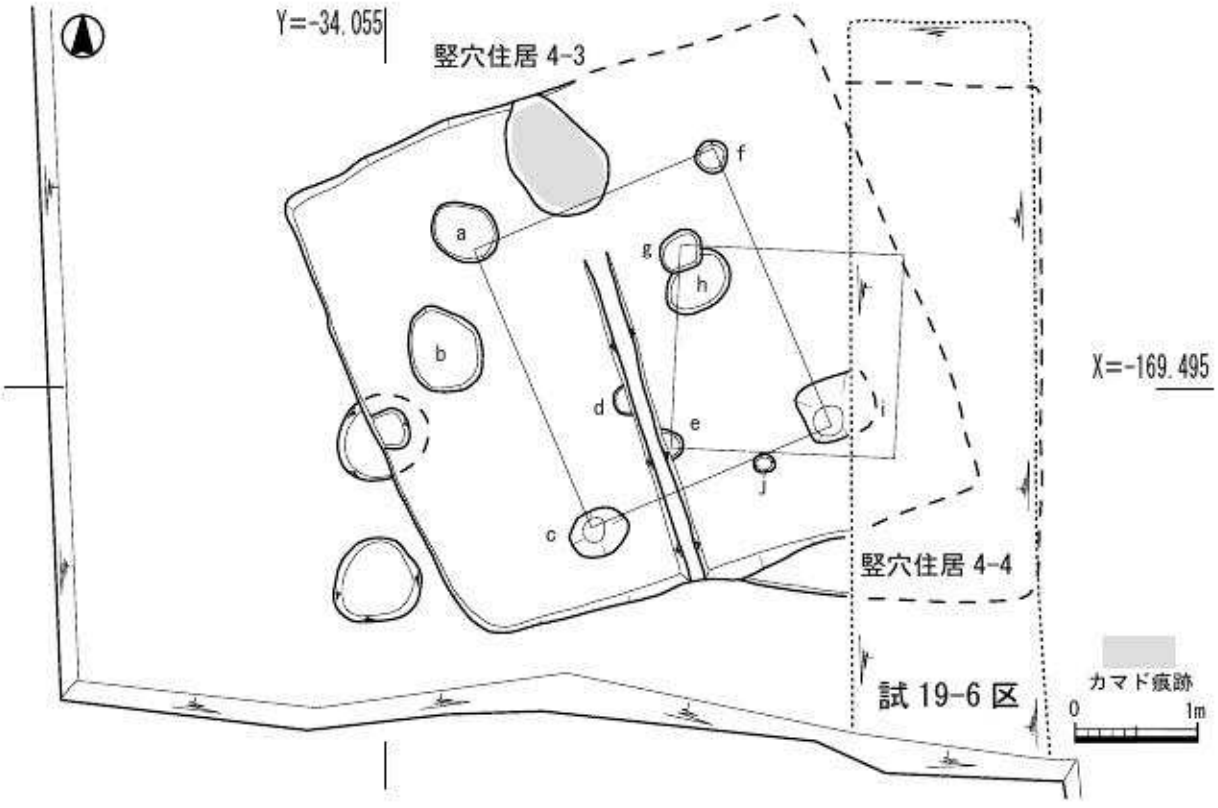
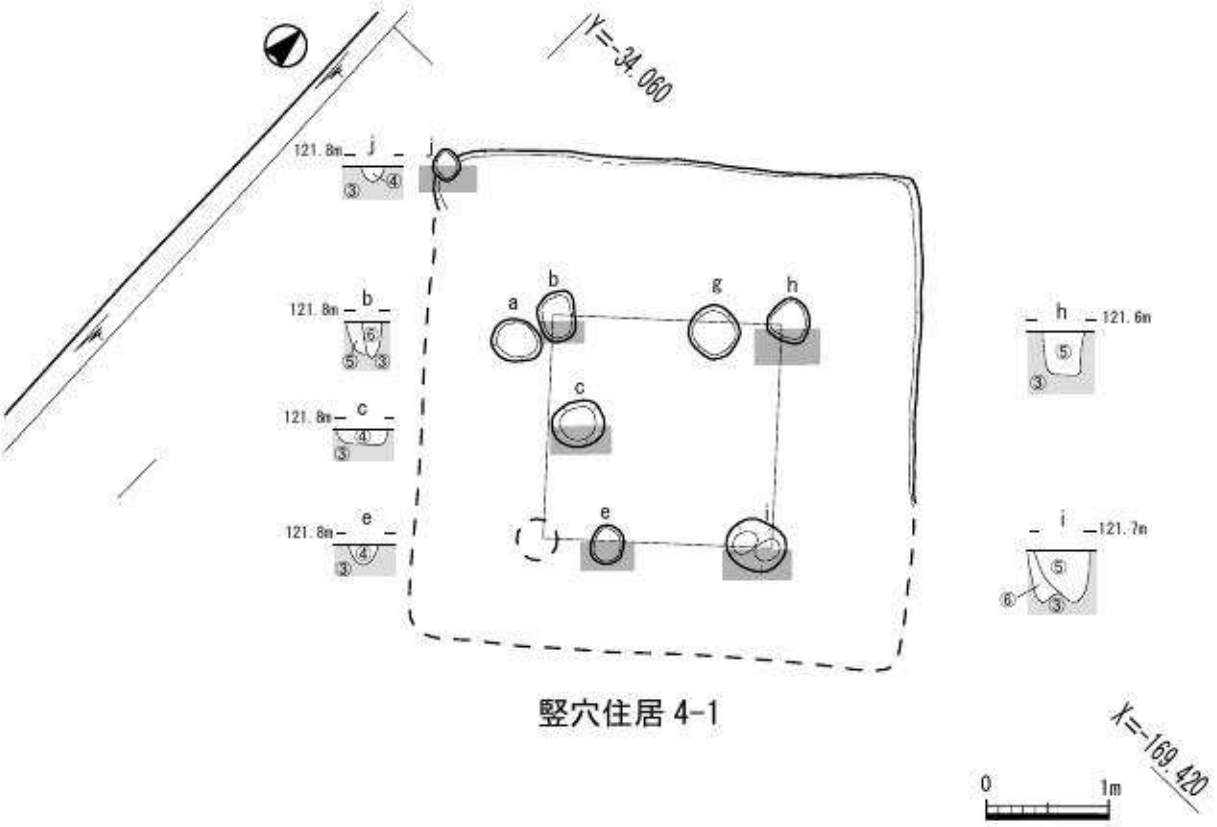


図16　竪穴住居４－１～４－４



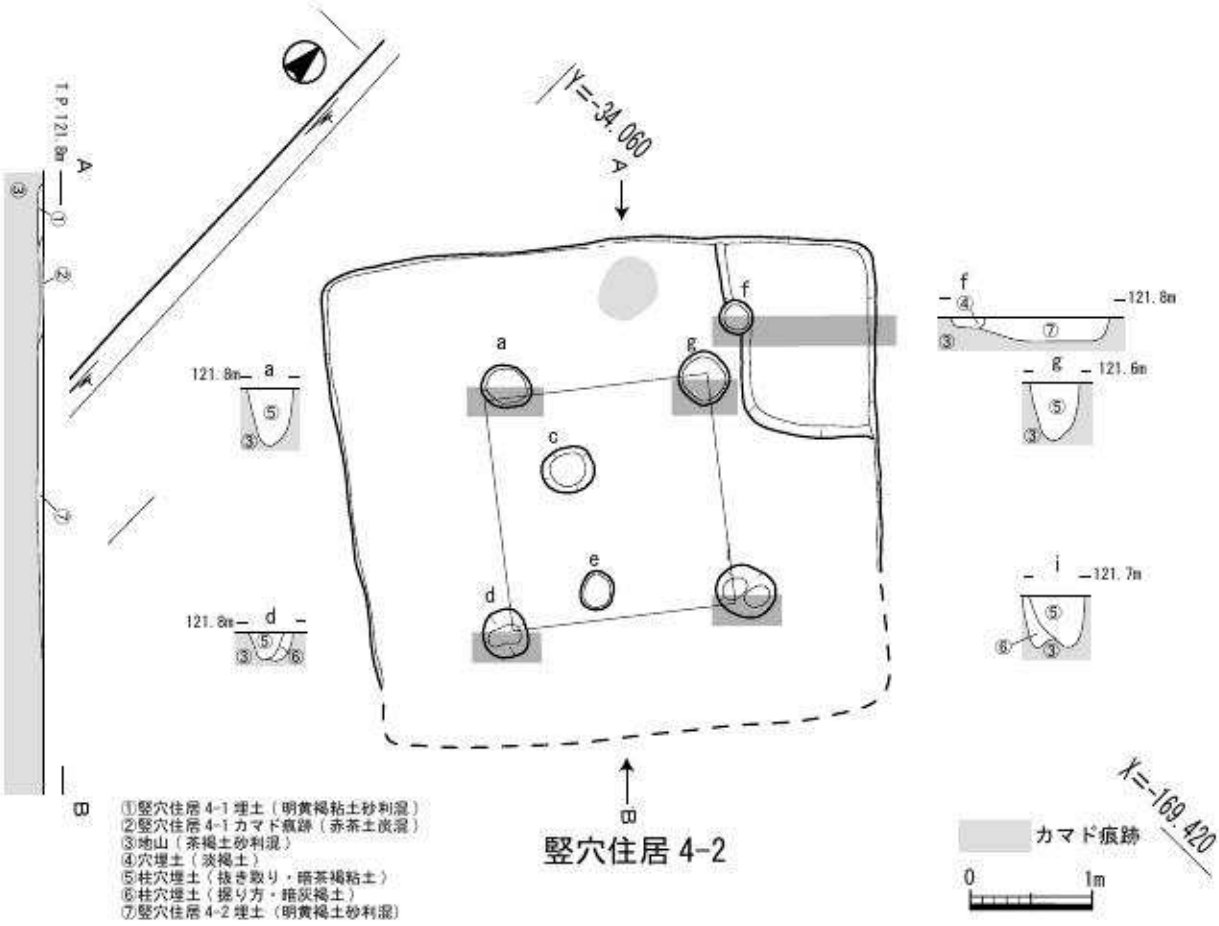


図17　竪穴住居４－１・竪穴住居４－２

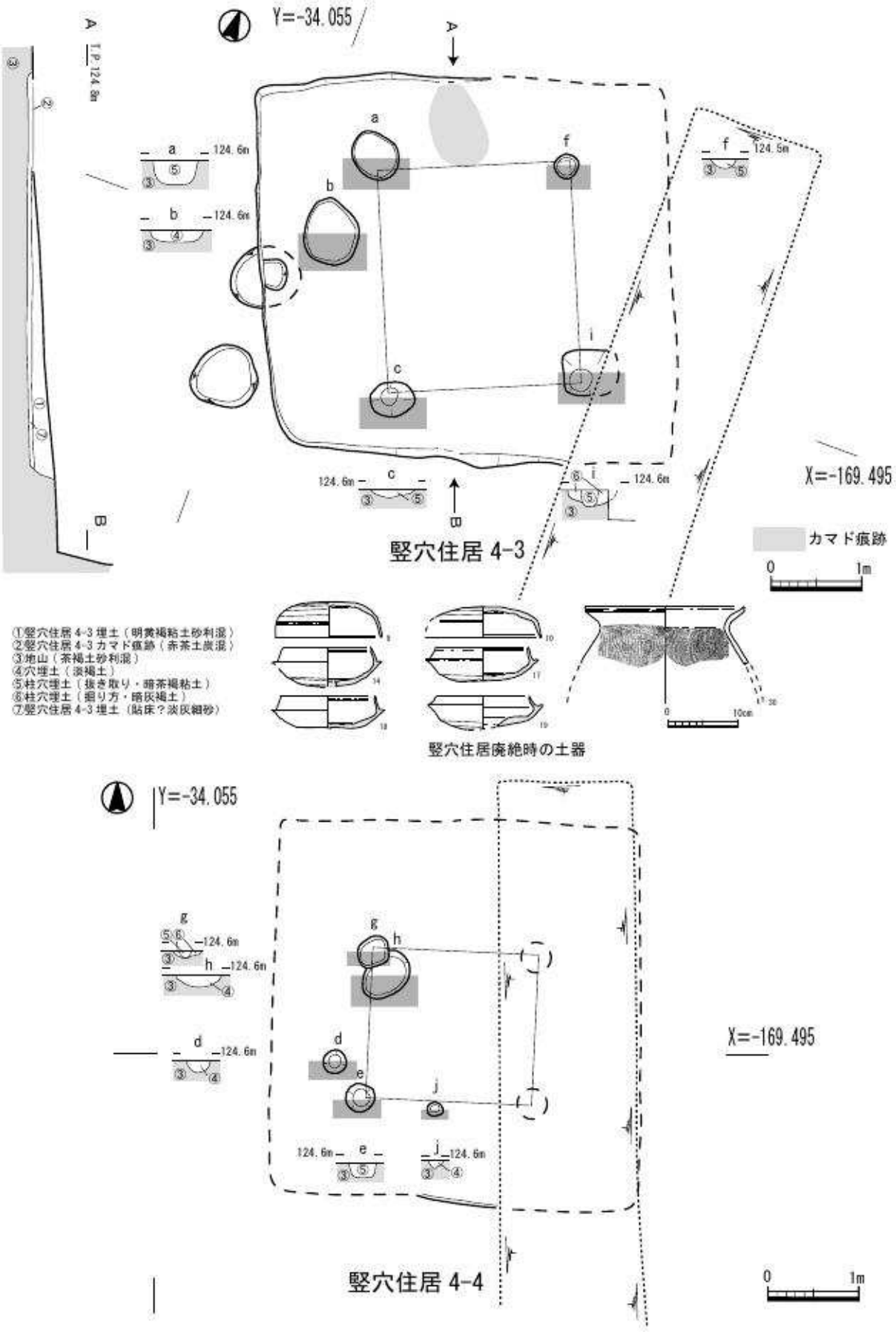


図18　竪穴住居４－３・竪穴住居４－４

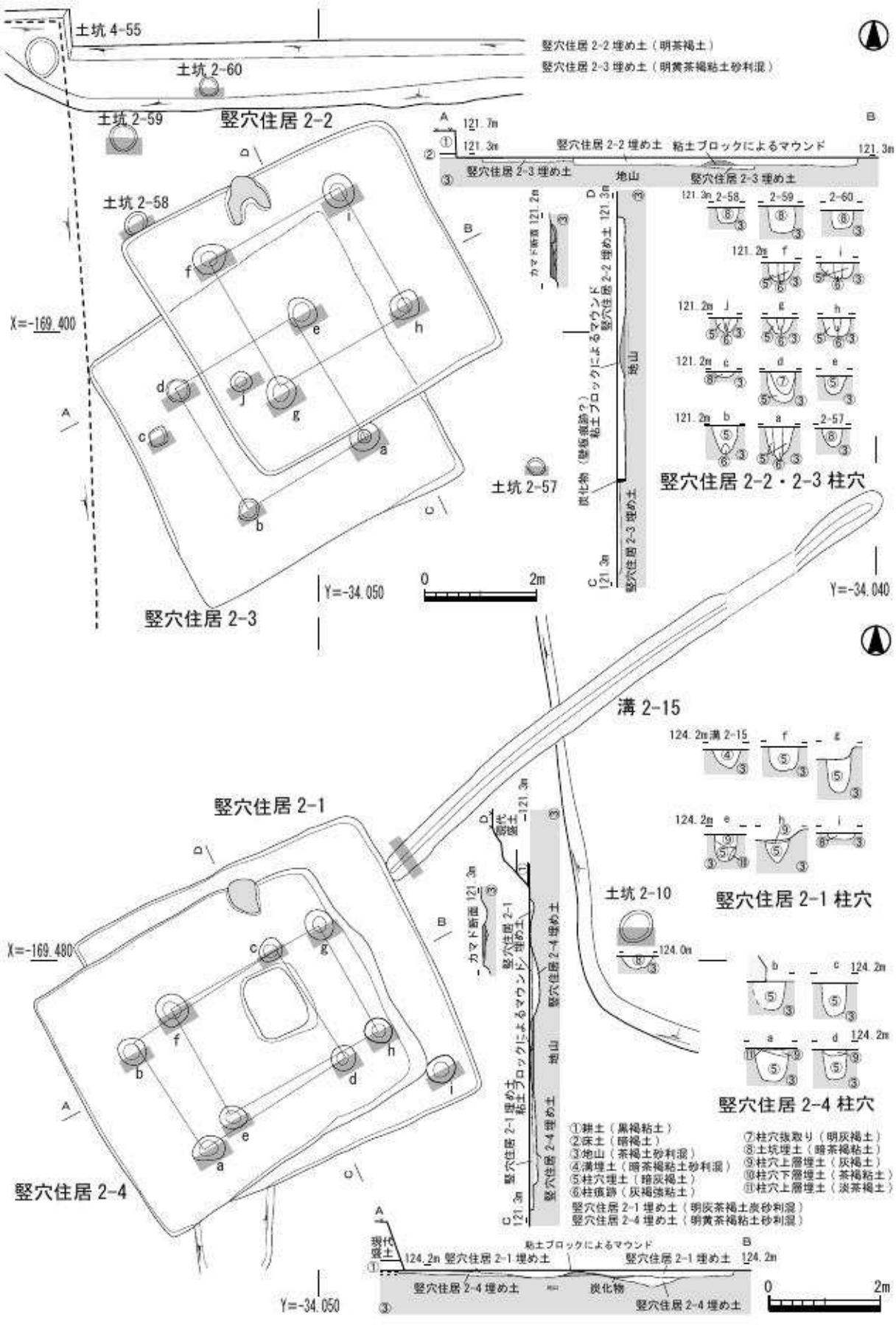


図19　24－２区竪穴住居

である。竪穴住居４－１の北東隅には長辺1.6m、短辺1.3m、深さ0.15mの方形の落ち込みがあった。埋め土には須恵器小片が含まれた。

４区の南端で長辺約4.7m、短辺4.4m、深さ約0.2mの隅丸方形の竪穴住居４－３が確認された。この建物の下層からもほぼ同規模・同形状と思われる竪穴住居４－４が重なって見つかった。竪穴住居４－４の軸線はほぼ南北をむいており、竪穴住居４－３は北側が西に約12度振れる。竪穴住居４－４は東側が削られており、規模は不明である(図16・18・図版20・21)。竪穴住居４－３に伴うカマド痕跡の遺存状況よりみて、竪穴住居４－４を埋め戻し、竪穴住居４－３へと建て替えたようだ。カマド痕跡は建物の北辺中央にあり、赤変した床面の広がりとその上面に焼けた粘土塊が散在していた。

二つの建物はいずれも四隅に柱穴を伴う。柱間は竪穴住居４－３が2.5×２m、４－４が1.8×1.7mである。竪穴住居４－３の廃絶時に遺棄されたと思われる６世紀後半（TK43段階）の須恵器蓋２点、杯４点、土師器甕が出土した(図24－９・10・14・17～19・30)。そのうち杯身の１点は柱穴cの抜き取りに落ち込んでいた(図24－18)。

竪穴住居４－１・４－２の北側で24年度調査の竪穴住居２－２・２－３が発見されている。竪穴住居２－３の北西隅は調査区外だったが、今回の25－４区の調査で、未調査部分を確認した。建物の所見について、変更事項や加筆事項はない。詳細は前年度刊行の『芹生谷遺跡』Ⅲにゆずる（図19)。

竪穴住居４－３・４－４の北側でも24年度調査の竪穴住居２－１・２－４が発見されている。竪穴住居２－４の北西隅は調査区外だったが、やはり今回の25－４区の調査で、未調査部分を確認した。建物の所見について、変更事項や加筆事項はない。これについても詳細は前年度刊行の『芹生谷遺跡』Ⅲにゆずる（図19)。

土坑は25－４区と25－５区の各地から発見されている。特に25－４区北側、掘立柱建物４－２の付近に多くみられる（図14)。土坑の軸線が掘立柱建物の軸線に共通することから、柱穴の一部の可能性もある。ただし、明瞭に柱痕跡や柱根の残るものはなかった。土坑４－21は径・深さともに約0.4 mで、埋め土は暗茶褐粘土である。土坑４－28は隅丸方形で一辺約0.5m、深さ0.6mで、埋め土は暗茶褐粘土である。土坑４－29も隅丸方形で一辺約0.9m、深さ0.2m、埋め土は暗茶褐粘土である。土坑４－32は隅丸方形で一辺約0.5m、深さ0.3m、西側が調査区外になる（図15)。埋め土は暗茶褐粘土で、土師器甕が出土した(図24－29)。

溝は掘立柱建物や土坑群と重なるように発見された。中世以降の耕作溝と考える。溝４－１は調査区の中央で発見された東西溝で、埋め土は上層の暗褐土による。白磁小皿の破片が含まれていた(図25－55)。

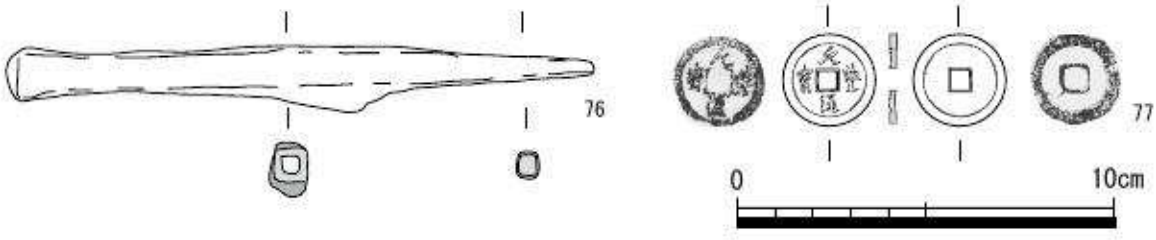


図20　金属製品

第４節　25－３区の調査

24－１区・25－３区は一連の調査区であるが、仮設道路の切り替えのため、東側の幅約12mのみを平成24年に調査し、今回は西側の幅８mを調査した。調査地は南北約70m、幅約20mを測る（図21・図版５）。この調査区は芹生谷遺跡の北端となる。平成19年試掘調査の試19－１区・試19－２区を含みこむ。南に里道があり、条里水田の坪境とされる。調査区はほぼ一反四方の条里水田のほぼ中央を南北に貫く形状である。

現地調査は他の調査区同様、水田耕土を機械掘削で除去したのち、人力掘削で遺物包含層を一層ずつ掘削、遺構面を確かめながら実施した。約0.2m程度の旧水田耕土を除去すると、水田床土が残る部分、地山となる部分がある。遺構面の標高（T．P．）は北端が117.8m前後、南端が119.6m前後、その間に三段の水田面がひな壇造成されていた。約２mの比高差の傾斜地に三段の水田を造成する際、各水田の北側を削り、削った土を南側に盛り上げて平坦面としたようだ。削られた地山部分に遺構はほとんど残されていなかった。逆に、客土された部分は１mちかく遺物包含層が形成されたところもあった。北端は急激に落ち込み、大きな谷になっているようだ。概して、中世の遺物が目立つもののその量は少ない。

発見された遺構はすべて地山に切り込まれた形で、掘立柱建物・土坑・溝などがある（図22・図版14）。

調査区の北側で24年度調査の掘立柱建物１－１が発見されている。北西隅は調査区外だったが、今回の25－３区の調査で、妻柱を確認した。これにより、建物の規模が１×２間で長辺・短辺ともに３mであることが確定した。その他の建物の所見について、変更事項や加筆事項はない。柱穴からの出土遺物はないが、軸線などより古墳時代後期の建物と考える。詳細は前年度刊行の『芹生谷遺跡』Ⅲにゆずる。

調査区の中央で24年度調査の掘立柱建物１－２が発見されている。西端は調査区外だったが、今回の25－３区の調査で、西側の柱列を確認した。建物の規模が４×２間で長辺7.5m・短辺4.3mであることが確定した。建物の西側に柵列などはなく、所見について変更事項や加筆事項はない。上面には中世の土器片が多く、南北朝時代頃の建物だろう。詳細は前年度刊行の『芹生谷遺跡』Ⅲにゆずる。

土坑は25－３区の各地で散在的に発見された。土坑３－４は径0.7m、深さ約0.1 mで、埋め土は暗茶褐粘土、遺物は出土していない。

土坑３－５も円形で径約0.8m、深さ0.3mで、埋め土は下層が暗茶褐粘土、上層が炭混じりの黒灰粘土である。遺物は出土しなかった。

溝は掘立柱建物や土坑群と重なるように発見された。中世以降の牛馬耕による犂溝と考える。調査区北側で斜行溝群が、中央で東西溝群が発見されている。

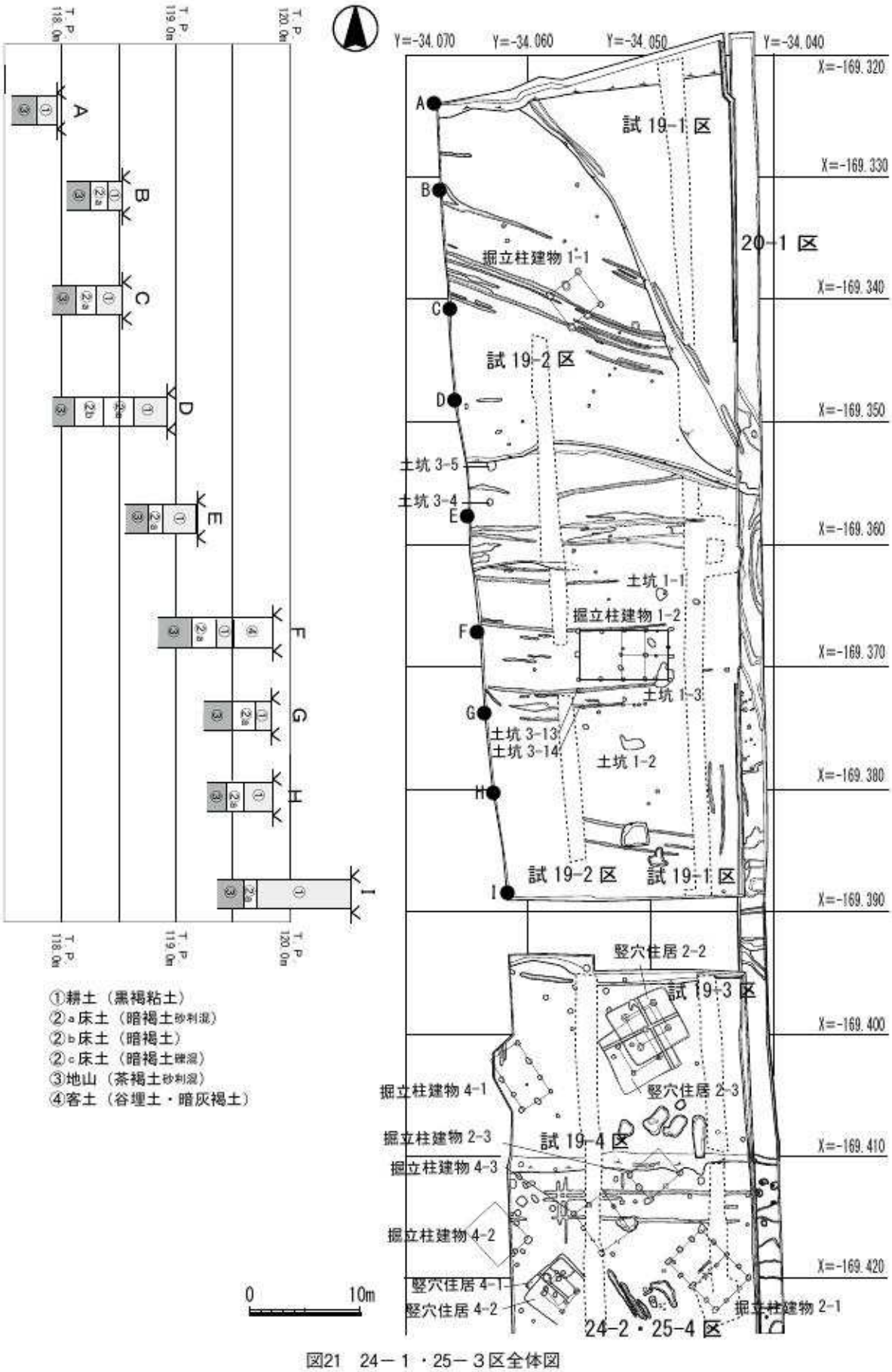


図21　24－1・25－3区全体図

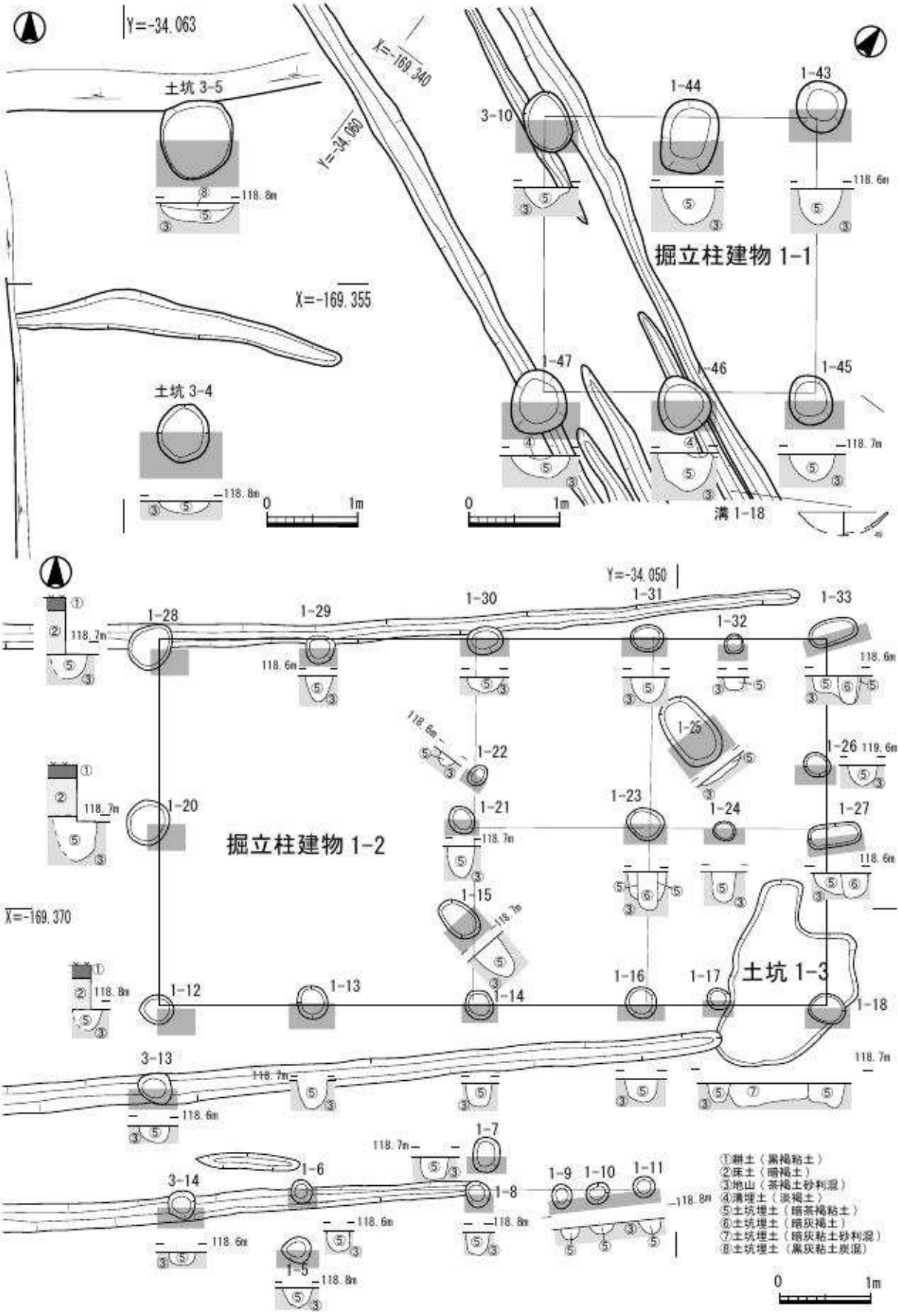


図22　24－１・25－３区掘立柱建物

第５節　出土遺物

出土遺物にはサヌカイト製剥片、土師器・須恵器・瓦器・陶磁器などがある（図13・20・23～25・図版22～26）。遺構に伴う遺物は概して少ない。

サヌカイト製剥片は各調査区の遺物包含層などから散在的に発見されている。最大のものは最大長９cm、最大幅6.9cm厚さ3.2cmを測る（４）。自然面は残さず、四辺を規則的に打ち欠き、形を整える。小型石器の素材だろうか。黒褐色であまり風化しない。弥生時代まで降る可能性がある。その他の大半は一部に自然面を残す小型剥片で、石器作成中に生じたものと考える。一部は連続的な打ち欠きが見られ、鋭利な一辺を刃部に利用したものもある（１～３）。

古墳時代後期～飛鳥時代の土器には須恵器・土師器がある。須恵器には蓋杯・ハソウ・甕などがあり、土師器には椀・甕・高杯などがある。古墳時代後期の遺物は、概して、須恵器甕の破片が少なく、相対的な遺物量が少ない。発見された竪穴住居は建て替え痕跡があるものの、遺物出土量からみて、長期的な居住は疑わしい。遺物包含層から発見された須恵器・土師器の大半はTK43段階に限られる。また、飛鳥時代の土器は溝２－１・溝２－２からの出土に限られる。

古墳時代後期の杯蓋は口径8.8～10.1cm、高さ2.5cm前後を測る。焼けひずみによる口径のばらつきが認められる。口縁部内面に沈線による段をつけるもの（５・７・９・10）、丸く仕上げるものがある（６）。外面は丁寧にヘラ削りし、天井部と口縁部の間に段をつける。杯身は口径11.2～15.1cm、高さ５cm前後を測る。口縁部内面に沈線による段をつけるもの（14～18）、丸く仕上げるものがある（19）。

飛鳥時代の杯蓋は杯H蓋が口径7.5cmと8.8cm、高さは約2.5cmである。外面天井部のヘラ削りは簡略気味で、口縁部との境は明瞭でなく、口縁端部はまるく仕上げる（20・21）。溝２－１出土の杯Ｂ蓋は磨滅が激しく、調整は明瞭でない。口径・器高は不明で、宝珠つまみが欠落した痕跡がある（28）。

杯身は杯Gのみで、口径6.3～7.7cm、高さは2.5cm前後を測る（22～25）。小片から復元した個体は口径が明瞭でない（23）。立ち上がりは短く、きつく内傾し、先端は丸く仕上げる。端部内面に段はない。外面は粗くヘラ削りする。TK209新段階の様相を示す（図版25）。

ハソウは球形の体部にすぼまった頸部をもつ小片である（27）。甕は体部の破片のみ出土している。

土師器碗は溝２－２出土で、口径8.5cm、器高1.7cmを測る（26）。口縁端部は厚く、やや丸く仕上げる。内外面共に暗紋はなく、明赤褐色で在地の産と考える。土師器甕は大型と小型があり、大型は竪穴住居４－３出土（30）、小型は土坑４－32出土である（29）。大型は口径約14cm、焼成と色調は土師器に共通するものの、外面に格子タタキ、内面に青海波紋がみられ、形状も須恵器甕に共通する。須恵器工人の手による可能性がある。口縁部が短く、強く屈曲させ、口縁端部を丸くつまみあげる。小型は口径約8.5cm、口縁部は短く、端部を丸く仕上げる。内面に指抑えの痕跡が明瞭に残る。

中世の土器には土師質土器・瓦器・炻器・磁器などがある。土師質土器は皿・羽釜、瓦質土器は椀・皿・羽釜・すり鉢、炻器は東播系すり鉢と常滑焼甕などがある。磁器はいずれも中国製で白磁と青磁があり、椀・小鉢などである（図版22・23）。中国製磁器は居住者の社会的身分を復元する上で重視できる。その他、金属製品として、長さ15.4cmの鉄釘（76）と径3.1cmの「元豊通宝」銅銭がある（77）。

土師質土器には皿（31～42）、羽釜（72・73）がある。皿は直径4.4～5.7cm、口縁端部のみ緩やかに立

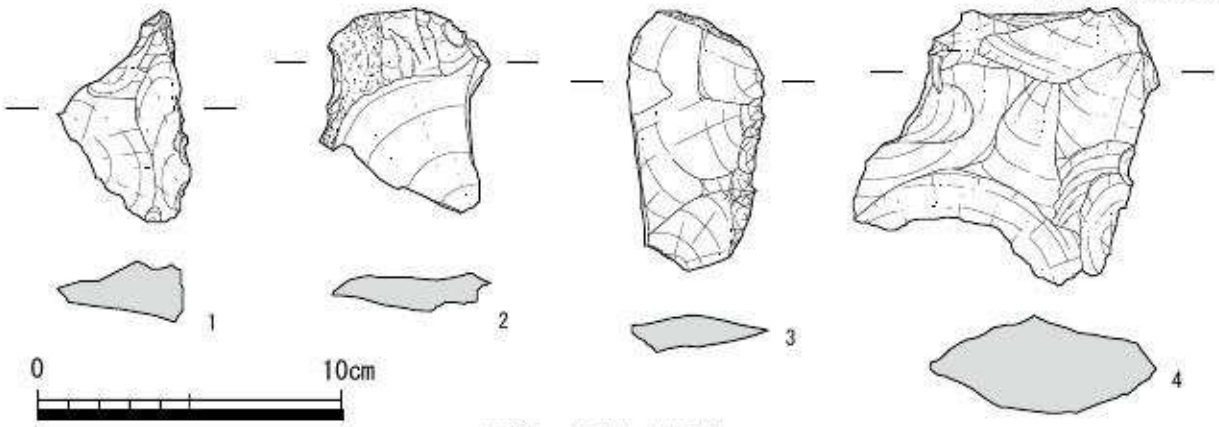


図23　サヌカイト剥片

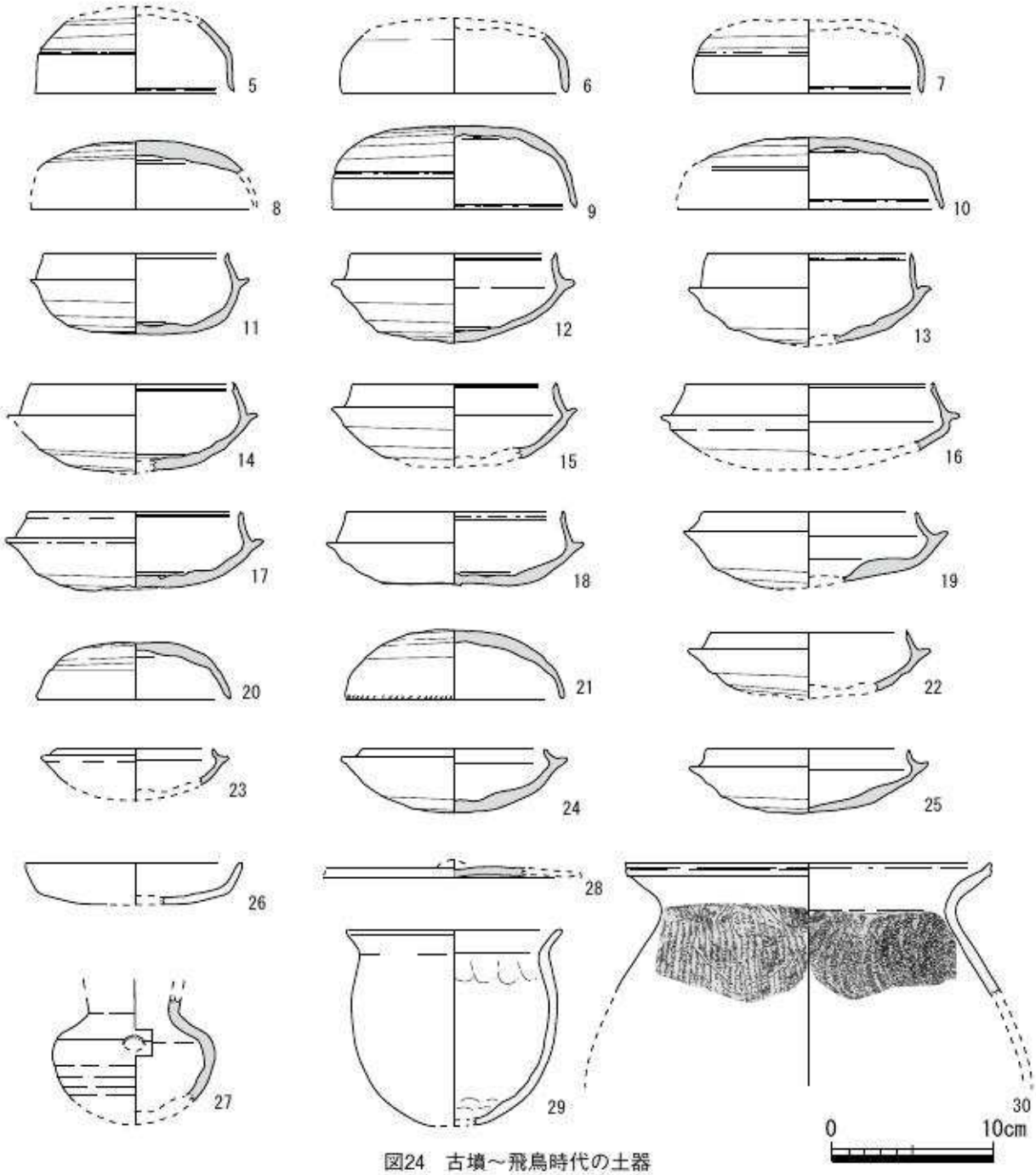


図24　古墳～飛鳥時代の土器

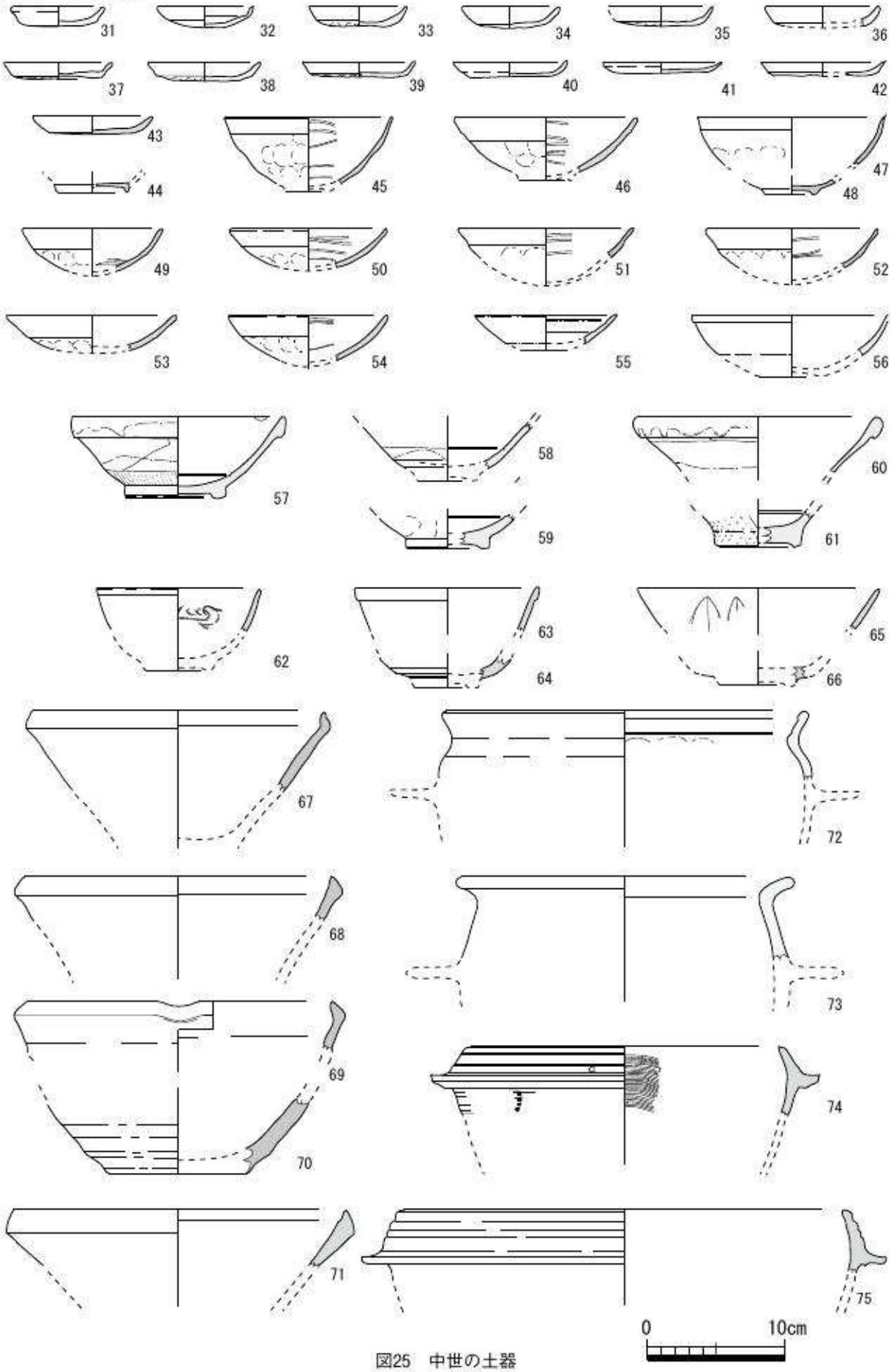

31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
0
10cm

図25　中世の土器

ち上げ、器高は１cmに未たない。すべて小型、赤褐色である。地元で焼かれたものだろう。羽釜は口縁部の小片で、肩部を内傾させ、口縁部を強く屈曲させ、端部を丸く仕上げる(72・73)。羽の位置は明瞭でない。暗赤褐色で胎土は粗く、砂礫を多数含む。口径は18cm程度と推定する。

瓦質土器には碗（44～54）・皿(43)・すり鉢(71)・羽釜(74・75)がある。瓦器椀は口径が10cm未満である。底部の残存するものは高台の形骸化が目立つ(44・48)。大半は底部高台のない末期のものと考える。内外面ともに暗紋の省略が著しく、外面には指押えの痕跡が残る。瓦質土器の皿は土師質土器皿の出土量に比べると少ない(43)。形態や大きさは土師質土器皿と共通し、口径5.5cm、器高1.0cmを測る。瓦質土器のすり鉢は黒褐色で口縁部の小片である(71)。口縁部を幅広にし、端部を丸く、上方につまみあげる。良く使い込まれ、擂目は明瞭でない。直径は不詳だが大型になるだろう。瓦質土器羽釜も口縁部の小片で、短い口縁部を内傾させ、端部に面をもち、角ばる(74・75)。内面にハケ目痕跡が明瞭に残るものは、口縁部に穿孔がある(74)。

東播系のすり鉢(67～70)は小片ばかりで、口縁部を肥大化させるものと（68・69)、薄手で丸く仕上げるものがある（67)。体部の小片は内外面をナデ仕上げし、粘土ひもの痕跡をよく残す（70)。

その他、常滑焼甕と思われる陶器の小片が多数発見されている。形態などは不明である。

中国製磁器に白磁(55～61)と青磁(62～66)がある。白磁小鉢は大小あり、大きい方は口径９cm、口縁端部を外に折り返して丸く仕上げる（56)。小さい方は口径6.5cmで、口縁端部を内側に折り返して端部をややとがらせる（55)。白磁碗は口縁部を折り返して玉縁とする。また、厚い底部を削り出して高台としている(57～61)。内面の見込み部分に沈線を入れる。胎土は灰白色で、釉薬は乳白色である。

１区中央で発見された白磁碗は直径15.2cm、高さ5.1cmを測る(57)。乳白色の釉薬(うわぐすり)が二重にかけられ、口縁端部が玉縁状に丸く仕上げる。中国福建省の閩南沿海窯(びんなんえんかいかま)で、12世紀末頃に焼かれたものである。高台の端部(畳み付け)が丁寧に磨きこまれ、漆器の盆などにのせて食器とされていたことがうかがえる。遺構に伴うものではないが、口縁端部に小さな欠けがみられるもののほぼ完形である。

青磁は小片ばかりで、口径などは明瞭でない(62～66)。暗緑褐色の福建省同安窯系の椀と、緑青色の浙江省龍泉窯産の椀がある。外面に凌ぎ蓮弁を刻む13世紀中頃から後半の椀もある(65)。

近世・近代の陶磁器はおもに溝２－１の上層から出土した。遺物包含層にも少なからず含まれているが、磨滅が激しい小片が多い。溝２－１から発見された陶磁器は波佐見焼・伊万里焼・瀬戸焼の磁器と、京焼系陶器などがある。器種は椀・皿・鉢・灯明皿などである(図13・図版26)。

波佐見焼碗は外面にコンニャク印判で梅樹・菊花などを装飾する17世紀後半の椀(82)、見込みが蛇の目になる丸形椀がある(85)。呉須の発色が悪い量産段階である。釉はぎの後、アルミナを塗布する19世紀以降に流行するものもある(80・81)。

瀬戸焼椀には、ペンシルドローイングによる施紋の19世紀代の広東碗(87)や端反椀などがある。また、明治期の銅板印刷による鉢(78)、大正から昭和前期と思われる吹き墨による施紋の椀もあり(86)、近世から現代にかけての陶磁器が連綿と出土している。

京焼系陶器の灯明皿は内面に透明釉をかける。外面にはヘラ削りの痕跡が明瞭で、灯芯の焦げ目が残る(83・84)。

挿図番号	図版番号	実測番号	調査区	出土地区	出土遺構	器　種
1	22	26	1	D6-11-1B-4h	暗褐土	サヌカイト剥片
2	22	27	1	D6-11-1B-4j	暗褐土	サヌカイト剥片
3	22	28	2	D6-11-1A-4b	地山直上	サヌカイト剥片
4	22	29	2	D6-11-1A-1c	暗褐土	サヌカイト剥片
5	22	17	4	D6-15-1O-6j	暗褐土	須恵器杯蓋
6	22	19	2	D6-11-1A-4f	暗褐土	須恵器杯蓋
7	22	18	3	D6-15-1N-6g	暗褐土	須恵器杯蓋
8	22	99	4	D6-15-10-6c	柱穴4-35	須恵器杯蓋
9	24	92	4	D6-11-1A-6a	竪穴住居4-3ベルト	須恵器杯蓋
10	24	93	4	D6-11-1A-6a	竪穴住居4-3ベルト	須恵器杯蓋
11	24	90	4	D6-15-10-6c	柱穴4-26	須恵器杯身
12	22	25	4	D6-15-10-6b	暗褐土	須恵器杯身
13	22	21	4	D6-15-1O-6a	掘立柱建物4-1上面	須恵器杯身
14	24	96	4	D6-11-1A-6a	竪穴住居4-3ベルト	須恵器杯身
15	22	22	4	D6-15-1O-6j	暗褐土	須恵器杯身
16	22	24	4	D6-15-10-6b	暗褐土	須恵器杯身
17	24	94	4	D6-11-1A-6a	竪穴住居4-3上層東側	須恵器杯身
18	24	95	4	D6-11-1A-6a	竪穴住居4-3柱穴C	須恵器杯身
19	24	97	4	D6-11-1A-6a	竪穴住居4-3ベルト	須恵器杯身
20	25	11	2	D6-11-1A-4f	溝2-2淡灰粗砂	須恵器杯蓋
21	25	12	2	D6-11-1A-4f	溝2-2淡灰粗砂	須恵器杯蓋
22	22	23	2	D6-11-1A-4e	暗褐土	須恵器杯身
23	25	10	2	D6-11-1A-4f	溝2-2淡灰粗砂	須恵器杯身
24	25	13	2	D6-11-1A-4f	溝2-2淡灰粗砂	須恵器杯身
25	25	14	2	D6-11-1A-4f	溝2-2淡灰粗砂	須恵器杯身
26	25	16	2	D6-11-1A-4f	溝2-2淡灰粗砂	土師器杯
27	25	15	2	D6-11-1A-4f	溝2-2淡灰粗砂	須恵器ハソウ
28	22	20	2	D6-11-1A-4h	溝2-1	須恵器杯蓋
29	—	91	4	D6-15-10-6b	土坑4-32	土師器甕
30	24	98	4	D6-11-1A-6a	竪穴住居4-3上層西側	土師器甕
31	22	38	4	D6-15-10-6d	暗褐土	土師質土器皿
32	22	30	3	D6-15-1N-6f	暗褐土	土師質土器皿
33	22	32	3	D6-15-1N-6g	暗褐土	土師質土器皿
34	22	35	3	D6-15-1N-6g	暗褐土	土師質土器皿
35	22	37	7	D6-11-1B-6d	暗褐土	土師質土器皿
36	22	34	2	D6-11-1A-4b	暗褐土	土師質土器皿
37	22	31	2	D6-11-1A-1c	暗褐土	土師質土器皿
38	22	36	2	D6-11-1A-1c	暗褐土	土師質土器皿
39	22	33	4	D6-15-10-6i	暗褐土	土師質土器皿
40	22	2	1	D6-11-1B-4j	地山直上	土師質土器皿
41	22	4	1	D6-11-1B-4j	地山直上	土師質土器皿
42	22	3	1	D6-11-1B-4j	地山直上	土師質土器皿
43	22	39	6	D6-11-1B-6a	暗褐土	土師質土器皿
44	22	49	3	D6-15-1N-6g	暗褐土	瓦器碗
45	22	48	2	D6-11-1A-4c	地山直上	瓦器碗
46	22	42	2	D6-11-1A-1c	暗褐土	瓦器碗
47	22	40	2	D6-11-1A-4g	暗褐土	瓦器碗
48	22	100	7	D6-11-1B-6b	暗褐土	瓦器碗
49	22	43	6	D6-11-1A-6e	東西溝2-20	瓦器碗
50	22	44	2	D6-11-1A-1c	暗褐土	瓦器碗
51	22	47	2	D6-11-1A-4a	暗褐土	瓦器碗
52	22	46	1	D6-11-1C-4a	暗褐土	瓦器碗
53	—	41	2	D6-11-1A-4g	暗褐土	瓦器碗
54	22	45	2	D6-11-1A-1c	暗褐土	瓦器碗
55	23	87	4	D6-15-10-6d	東西溝4-1	白磁小皿？
56	23	66	2	D6-11-1A-1c	暗褐土	白磁碗？
57	23	1	1	D6-11-1B-4j	暗褐土	閩南漳沿岸窯系白磁碗
58	23	103	3	D6-15-1N-6b	暗褐土	閩南漳沿岸窯系白磁碗
59	23	88	4	D6-15-10-6d	暗褐土	閩南漳沿岸窯系白磁碗
60	23	65	1	D6-11-1B-4f	暗褐土	閩南漳沿岸窯系白磁碗
61	23	89	2	D6-11-1A-4c	地山直上	閩南漳沿岸窯系白磁碗
62	23	64	2	D6-11-1A-4a	暗褐土	龍泉窯系青磁碗
63	23	62	1	D6-11-1B-4j	暗褐土	厦門窯系青磁碗
64	23	101	3	D6-15-1N-6f	暗褐土	龍泉窯系青磁碗
65	23	63	4	D6-15-10-6b	暗褐土	龍泉窯系青磁碗
66	23	102	2	D6-11-1A-1c	暗褐土	龍泉窯系青磁碗
67	23	53	1	D6-11-1B-4f	暗褐土	東播系須恵器すり鉢
68	23	52	2	D6-11-1A-4f	暗褐土	東播系須恵器すり鉢
69	23	51	2	D6-11-1A-4a	暗褐土	東播系須恵器すり鉢
70	23	54	4	D6-15-10-6b	暗褐土	東播系須恵器すり鉢
71	23	55	4	D6-15-10-6b	暗褐土	東播系須恵器すり鉢
72	23	56	6	D6-11-1B-6a	暗褐土	土師質土器甕
73	23	57	2	D6-11-1A-4g	暗褐土	土師質土器羽釜
74	23	58	2	D6-11-1A-4e	南北溝2-1	瓦質土器羽釜
75	23	59	2	D6-11-1A-4f	暗褐土	瓦質土器羽釜
76	23	60	7	D6-11-1B-6g	暗褐土	鉄釘
77	23	61	2	D6-11-1A-4i	暗褐土	「元豊通寶」銅銭
78	26	9	2	D6-11-1A-4h	南北溝2-1	瀬戸焼皿
79	26	8	2	D6-11-1A-4h	南北溝2-1	波佐見焼碗
80	26	106	2	D6-11-1A-4d	南北溝2-1	波佐見焼碗
81	26	7	2	D6-11-1A-4h	南北溝2-1	波佐見焼碗
82	26	6	2	D6-11-1A-4h	南北溝2-1	波佐見焼碗
83	26	104	2	D6-11-1A-4g	南北溝2-1	京焼系陶器灯明皿
84	26	105	2	D6-11-1A-4h	南北溝2-1	京焼系陶器灯明皿
85	26	5	2	D6-11-1A-4h	南北溝2-1	波佐見焼碗
86	26	108	2	D6-11-1A-4f	南北溝2-1	瀬戸焼吹墨紋碗
87	26	107	2	D6-11-1A-4h	南北溝2-1	波佐見焼碗
—	23a	50	2	D6-11-1A-4f	暗褐土	東播系須恵器すり鉢

図26　実測遺物対照表

第Ⅲ章　まとめ

第１節　今回調査の成果

今回の調査では芹生谷遺跡の中央で南北約400mにわたり、5084㎡の調査を行った。その結果、以下の成果があった。

もっとも、古いものは縄紋～弥生時代と思われるサヌカイト剥片で、打製石器の素材である。以前の調査でもサヌカイト剥片や打製石鏃などが発見されており、遺跡周辺での人々の活動が推測できる(１)。

古墳時代前～中期の遺構・遺物は発見されなかった。古墳時代後期（６世紀後半）の竪穴住居（竪穴建物）・掘立柱建物が発見された。調査区全域から該当期の須恵器・土師器片が発見されており、もともと集落は広域に存在したと考える。水田開発などの削平で遺構が失われ、遺物が散在したのだろう。

調査区から発見された須恵器はTK43段階が圧倒的に多い。集落の存続期間は比較的短かったようだ。発見された建物は竪穴住居と掘立柱建物がある。竪穴住居は前年度調査分をあわせると合計８棟で、４棟がほぼ同じ位置・規模で、建て替えられていた。竪穴住居の埋め土などにはTK43段階の須恵器が伴った。

竪穴住居と掘立柱建物は軸線が共通し、金山古墳の軸線とも同じくする。つまり、芹生谷遺跡の集落は金山古墳造営段階のもので、集落の人達は古墳造営に関わった可能性がある。金山古墳は竪穴住居群の南約200mに位置する。河内や大和では、竪穴住居の終焉段階にあたり、伝統的建物が建設された背景には、その機能、あるいは住人の階層差かもしれない。金山古墳の小円丘主体部やその前庭からはTK209段階の須恵器が出土している(２)。金山古墳は主体部の家形石棺が奈良県藤の木古墳と同質・相同で、６世紀後半のTK43段階に造営・完成し、７世紀初頭のTK209段階まで追葬や祭祀の継承があったと考える。

長さ52m以上、幅１ｍ以上の溝が２本みつかった。溝２－２は地形に沿って約２ｍの比高差をもち、流水堆積による灰白粗砂で一気に埋まっていた。TK209段階の土器のみがまとまって発見された。同時期の須恵器を出土した大溝が千早赤阪村川野辺遺跡でも発見されており、７世紀初頭の推古期に大規模な灌漑水路が整備された可能性がある(３)。ただし、この溝は深く急峻で、付近の水田に水を入・排水したというより、さらに下流域に水を通過させるためのものと考える(４)。

溝２－２と一部重複して、真北にのびる溝２－１がみつかった。これは条里に沿った灌漑水路である。溝２－１からは中世から近・現代までの土器や陶磁器が数多く出土した。溝の上層には近年まで使われていたコンクリートU字ブロックの水路があり、現在も同じ位置がコンクリートの水路となっている。水田耕作のための水路は古墳時代後期にはじまり、条里水田に沿って南北に切り替えられ、現在まで続けられていると考える。

前年度調査区で南北朝期の掘立柱建物が一棟発見されている。今回の調査地からは広範囲に瓦器・土師質土器・中国製磁器などが発見されており、条里区割りに沿って、中世の住居が散在的にあったと思われる。

25－１区中央から発見された完形の白磁碗は遺構に伴うものではないが、碗高台の端部(畳付け)が丁

寧に磨きこまれ、漆器の盆などにのせて食器とされていたようだ。ただし、口縁端部に小さな欠けがあり、墓に副葬する時の儀礼かもしれない。白磁碗は形態などの特徴から中国福建省の閩南沿海窯で、12世紀末頃に焼かれたものとされる。源平合戦で平氏が滅亡するまでは、京都や博多の商人を通じて中国南海部の茶碗や壺などが関西に数多くもたらされた。今回発見の碗はその最終段階のものである。13世紀になると、源氏は鎌倉に政治拠点をおいて、独自のルートで中国商人と交易を始めた。この交易では中国南海産の白磁はもたらされず、北宋の官窯だった浙江省龍泉窯で焼かれた青磁碗などがもたらされるようになる(5)。芹生谷遺跡のこれまでの調査では、青磁と白磁の両方が多数発見されており、平安・鎌倉期の繁栄がうかがえる。

第２節　金山古墳の被葬者像

a　推古期の水田開発

24年度調査報告の『芹生谷遺跡』Ⅲで、芹生谷遺跡発見の建物群は、金山古墳造営段階の一時的な居住地である可能性を考え、検討した。今回の調査でもそれに追随する成果が得られた。

今回の調査ではさらに金山古墳追葬段階に埋もれる水路が発見された。『日本書紀』仁徳十四年条は「また、大溝(おおうなて)を感玖(こむく)に掘る。すなわち石河(いしかわ)の水を引きて上鈴鹿・下鈴鹿・上豊浦・下豊浦、四処の郊原をうるおし、四万頃(しろ)の田を得たり。かれ、そのところの百姓、ゆたかににぎわいて、凶作のうれひなし。」と記す。そして、『住吉大社神代記』にも「また、難波高津宮にあめのしたしろしめしし天皇にさとして､大神ののりたまわく「大嶋守をもって紺口溝(こむくのうなて)を掘らしめよ」と。同じく水を流して上鈴鹿・下鈴鹿・上豊浦・下豊浦四処の郊原につけて、四万頃の田を開墾る。既にしてつくり、田こえうるおう。かれ、その地の百姓、作り食らうににぎわいのよろこびありて、凶年のうれひなし。石川・針魚河の水を大神の御田に引きそそぐ。縁（ことのもと）はこれなり。」という記事がある。二つの記事はほぼ同じ内容であり、感玖大溝と紺口溝が同一のもので、芹生谷遺跡の近くにある感古神社（かんこじんじゃ）や寛弘寺(かんこうじ)の名とも関連し、河南台地の灌漑伝承を示す史料とされている。

さらに、『住吉大社神代記』には紺口溝の開発主体を「大嶋守」とする。現在の芹生谷遺跡周辺の水路は現在も大島水路と呼ばれており、古い伝えが連綿と呼びならわされている可能性がある(図27左)。

二つの史料は河南台地の開発が仁徳天皇の時代であると伝承するものの、今回の調査によって、７世紀初頭の推古期に埋没する水路がみつかった。南河内を大規模に灌漑した狭山池はその北堤の下層から発見された木樋群の年輪年代測定により、測定値616年（推古24年）に造営されたことが明確となっている(6)。『日本書紀』推古15年（607年）と推古21年（613年）に池溝開発記事があり、関連するのだろう。さらに、古市大溝・丹比大溝などと呼ばれている南河内の大規模な水路遺構も７世紀初頭のＴＫ209段階やＴＫ217段階の須恵器が出土していることから､造営は推古期の可能性が指摘されている(7)。

今回発見された溝２－２と、上流の千早赤阪村川野辺遺跡から発見された溝も同じ推古期の土器が出土しており、以上の成果をあわせ、推古期に南河内で広範な水田開発があったようだ。

ただし、大溝出土遺物は掘削時期を示すものではなく、埋没の時期、あるいは埋没時の混入を示す資料の可能性もある。『日本書紀』に依拠するならば、推古天皇の末年に長雨や天候不順が続いて、飢饉

がおとずれたことを記している。推古天皇自身も天候不順と飢饉を憂いて、陵墓の薄葬を遺言した、という。これらが史実かどうかはわからないが、推古期に溝が埋没している現象は、この期の大規模な開発が必ずしも成功しなかったことを示すものかもしれない。

また、狭山池北堤下層では、古墳時代前・中期の水田遺構が検出されている(８)。池溝の開発はさらにさかのぼり、推古期の開発とはその改修や拡張を示すものかもしれない。これまで、古代から近代に至る南河内の灌漑事業は、水源となる池を拡張や増設したり、水路を延伸・精細化することによって、耕地を増やすと概念づけられている。つまり、ため池(水源)の周辺から開発が起こって、時代が降るにつれ、より水源から遠いところまで灌漑が進んでいくという図式である(図27右上)。

そうであれば、河南台地の場合も水源に近い千早赤阪村水分付近に開発が始まり、河南町・富田林市と、河南台地の北側に向って水路が延伸されて、灌漑が進むことが推測される。ところが、今回発見された溝２－２は、周辺に水田化の痕跡はなく、深く、急峻で、水を通過させるだけのような構造だった。そうすると、水源から長駆、水を引いて、水田化しやすい湿地部分から開発が進行していった可能性があり、河南台地の場合は北側の台地辺縁や谷部から灌漑されていったと考えるべきかもしれない(図27右下)。台地上に位置する芹生谷遺跡周辺の水田化は条里制施行時の荘園開発期に降る可能性もある。その意味においても、発見された芹生谷遺跡の住居は一般の農村集落と峻別されるべきだろう。

b　文献史料からみた河南台地開発の主体者

今回発見された溝２－２は金山古墳の方向から直線状に流れてくる。古墳の東側には現在も水路があって、調査区周辺の水田を潤している。金山古墳が芹生谷遺跡の東の台地上に造られた理由は、水源を下流から望む高所だったと推測できる。つまり、古墳の被葬者は水利管理や水守りをする豪族の有力者であり、台地の開発主体者でもあったと考える。

先に示した『日本書紀』や『住吉大社神代記』による灌漑事業が、王権の号令による国家的事業であれば、この地は屯倉的性格が強くなる。その後の池溝改修も国家の管理であれば、「雑徭」に引き継がれる(９)。しかし、河南台地に屯倉の伝承はなく、喪葬儀礼(金山古墳造営など)に関わる徴用(調役)と一連的に行われたとみるならば、金山古墳の被葬者集団が、私的に河南台地の灌漑整備を推進したと推定できるのである。金山古墳を６世紀後半以降の近畿の大型古墳に位置づけるならば、河内大塚山古墳に次ぐ規模を誇る格段の大きさである。河南台地の灌漑事業や大型古墳造営をした被葬者集団は有数の豪族と見積もるべきだろう。

金山古墳の被葬者像については、新羅系渡来人であることを森浩一氏が推測して以来、議論はあまり進展していなかった(10)。この推測にしても、わが国では珍しい双円墳が、新羅の王陵と関連付けられたもので、６世紀後半の倭国と新羅の関係を史料からひも解く限り、説得力があるわけではない。

その後、河南町平石で平石古墳群の実態が発掘調査であきらかになると、その被葬者の出自が新羅系渡来人説・大伴氏説・蘇我傍系氏族説・蘇我本宗家説などと活発に議論されるようになった。

これに関連して、上林史郎氏は金山古墳の被葬者を蘇我傍系氏族の河辺氏一族であると表明した。そして、平石古墳群の被葬者については、平石谷の西側に「大伴村」の地名が残ることを評価し、大伴氏一族とする(11)。平石古墳群の被葬者を大伴氏と考える説には塚口義信氏の論考もある(12)。

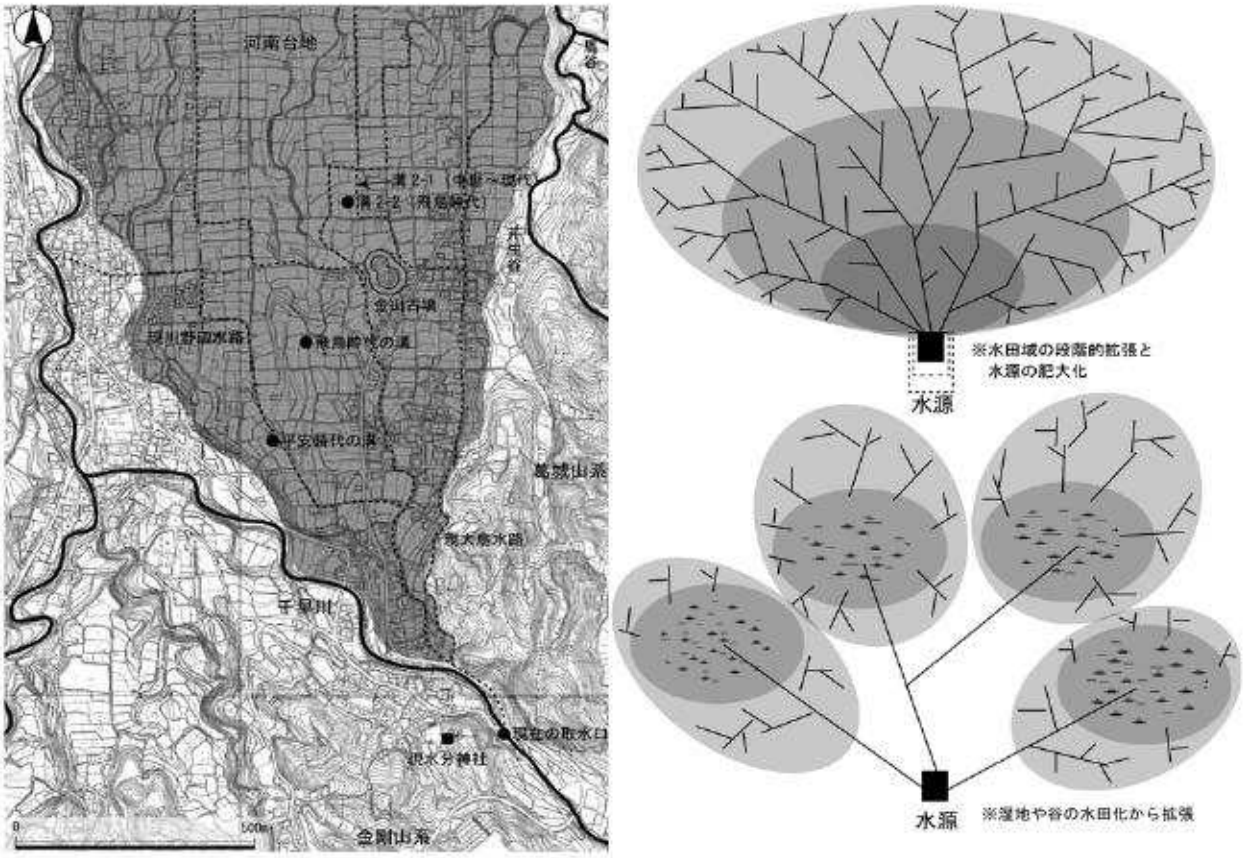


図27　河南台地の現行水路と灌漑模式図

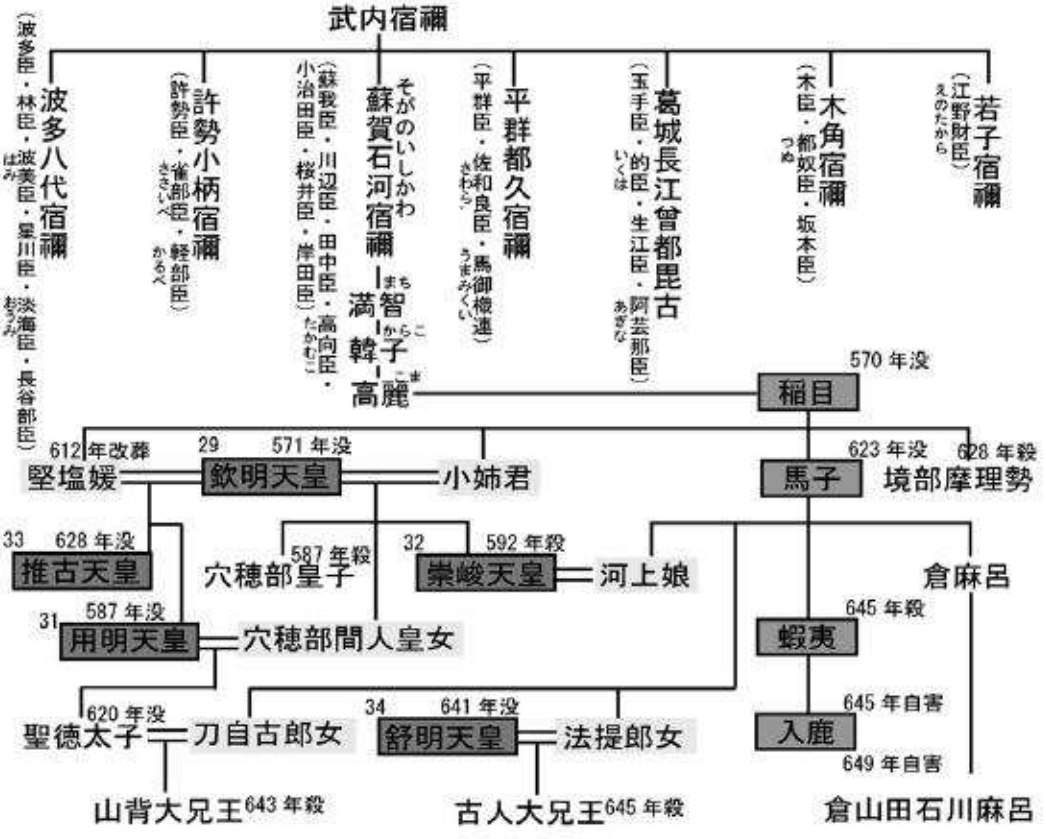


図28　武内宿禰系譜と蘇我氏関連系譜

以上に対し、白石太一郎氏は金山古墳の被葬者こそ大伴氏で、平石古墳群の被葬者集団は蘇我傍系氏族の倉家ではないかと推定する(13)。白石氏は金山古墳に円筒埴輪がないことなどから、南丘石室の造営年代は北丘石室にくらべ著しく遡ることは困難と推定し、７世紀初頭（TK209古段階）に位置づける。近畿で前方後円墳が採用されなくなる直後である。そして、金山古墳は墳丘が大規模で方墳を採用しないことなどから蘇我氏や物部氏に次ぐ雄族、大伴氏以外に考え難い、と説いた。

白石氏は『日本書紀』敏達天皇12年条の「石川大伴村」の記述を拡大的に解釈し、大伴氏の拠点のひとつが石川の広範に及ぶと推定した。確かに、現在地名が残る「南大伴」などは石川と梅川の合流地点にあたる氾濫原で、集落遺跡が発見される可能性は極めて低く、敏達期の「石川大伴村」がその地にあったことは考古学的に実証しがたい。『観心寺縁起資材帳』には「大友荘」の記載があり、別地に捉えるべきかもしれない。ただし、金山古墳のある一帯は『観心寺縁起資材帳』にある「紺口荘」と推定され、大伴氏の拠点が、芹生谷遺跡周辺まで及ぶ可能性は低いのではないだろうか。

上林氏が金山古墳の被葬者を蘇我傍系の河辺氏と考える理由は、古墳の南側に残る地名が川野辺で、河辺氏に通じるからだろう。結論的にわたしもこの考えを支持したい。史料をひも解くと、『続日本紀』文武天皇三年（706年）条には河内国石川郡の人、河辺朝臣乙麻呂が白鳩（瑞祥）を献上する記事がある。さらに、称徳天皇宝亀元年(770年)の記事にも河内国の人に川辺朝臣宅麻呂などの名がある。白鳩の発見地は千早赤坂村川野辺にほど近い河内長野市鳩原と考えられる。したがって、川野辺に河辺氏がいたことは動かしがたい(14)。

ところで、河辺氏の拠点については文献史学から様々に検討されている。蘇我河辺氏の本拠地を千早赤阪村河辺とする説には佐伯有清氏・黛弘道氏、加藤謙吉氏があり、独自に根拠を示している。そもそも河南台地の広範囲に蘇我氏本宗家の所領があったという説に中村浩氏があり、これは平安時代の『春日大社文書』を細かく分析した成果である(15)。

以上に対し、河辺氏の本拠地は和歌山県河辺郡だとする説、奈良県橿原市川辺の周辺だとする説などもあり、決して定まっているわけではない。

蘇我傍系氏族とは、『日本書紀』推古二十年条（612）の堅塩媛改葬記事に「大臣八腹臣等を率いてすなわち境部摩理勢をもって氏姓のもとをしのびごともうさしむ・・・」に記されている。大臣とは蘇我馬子で、八腹臣とは蘇我傍系氏族が八系列あったことを示すものである。これは『古事記』孝元天皇条に記された武内宿禰の子供が波多氏・巨勢氏・平群氏・紀氏・葛城氏・蘇我氏などの祖先であると伝える「武内宿禰系譜」のうち、蘇賀(蘇我)石川宿禰が蘇我臣・河辺臣・田中臣・高向臣・小墾田臣・桜井臣・岸田臣の祖であるというものである(図28)。

津田左右吉氏はこの祖先伝承が、蘇我台頭による推古期に成立したと考えた(16)。岸俊男氏もこれに賛同する。さらに、「武内宿禰系譜」が孝元天皇に結び付けられて、『古事記』の記述がほぼ出来上がる時期は７世紀末と考えた(17)。

平安時代の『新撰姓氏録』も「武内宿禰系譜」による祖先伝承を記載する。河辺氏の場合、「武内宿禰の四世孫、宗我(蘇我)宿禰の後なり」と記される。

以上に対し、日野昭氏は『日本書紀』安閑二年条（535年頃）の紀国河辺屯倉設置記事を評価し、河辺氏の本拠地を和歌山県河辺郡と推定する。ただし、河辺氏が蘇我氏からの分岐する時期は安閑期に遡

らず、大化直前の時期とする(18)。これに対し、加藤謙吉氏は河辺氏が大和国十市郡川辺郷か、河内国石川郡川野辺と推定する(19)。

津田氏以来、「武内宿禰系譜」の成立を新しく位置づけて、その創作性を強調する意見は根強い。志田諄一氏による蘇我稲目以前の祖先の実在性を否定する見解などである。志田氏は蘇我石川宿禰が、蘇我本宗家滅亡以後に力をつけた蘇我倉山田石川麻呂による構想とする(20)。

黛弘道氏は蘇我氏の系譜について、傍系氏族を細かく分析されて出自の謎について方向性を示されている。それによると、傍系氏族は蘇我稲目の出現以前に分岐した氏族と、以降に分岐した氏族があるという。『日本書紀』によれば欽明三一年（570年）に没した稲目の活躍時期は６世紀中頃から後半である。そして、稲目以前に分岐した河辺氏・高向氏はいずれも南河内の石川流域に本拠をもつ集団であり、蘇我氏の本拠も河内の石川郡であったと説く。稲目以降に分岐する氏族はいずれも大和に本拠がある(21)。確かに、稲目が拠点としていた大和の軽周辺に、傍系氏族に関わる地名が集中する。偶然とはいえないだろう。

以上、文献史料から蘇我氏の出自や傍系氏族の検討が活発に行われていることを俯瞰したものの、多岐に及ぶ検討がありながら諸説に分かれ、金山古墳の被葬者を限定するには至らない状況にある。

c　発掘成果からみた蘇我傍系氏族

河内の蘇我傍系氏族の拠点については、近年の発掘成果により考古学的に検討することも可能となって来た。

まず、高向氏の本拠とされる集落遺跡が河内長野市高向の高向遺跡にある。1980年代に大阪外環状道路が遺跡を縦断することとなり、大阪府文化財協会によって発掘調査された。また、それに取り付く市道や周辺の宅地開発による発掘調査を河内長野市が実施している。そして、遺跡の中央に位置する丹保池の護岸整備などでも大阪府教育委員会が調査を実施している(22)。以上の成果から、高向遺跡の集落は丹保池からその南東の式内社高向神社にかけてが中心となり、古墳時代後期にはじまり、飛鳥・奈良時代に大規模化していくことが確かめられた。集落が飛躍的に発展する時期は飛鳥時代後期の天武期以降である。集落の開始時期は遺構から明瞭にすることはできていないものの、６世紀後半の土器が散見され、欽明期に遡る可能性が高い。高向遺跡が高向氏の本拠であるならば、欽明期に出現し、飛鳥・奈良時代を通じて発展する。稲目の父から分岐した傍系氏族が、稲目と同時代に発展していくとすることは可能なようだ。

つぎに、境部氏の本拠とされる集落遺跡が八尾市小坂合の小阪合遺跡周辺とも推定されている。式内社坂合神社は遺跡の北側にある。この遺跡も広範囲に及ぶものの、1980年代の土地区画整備事業にともなう発掘調査によって、おおよその遺跡の広がりが明らかにされた。さらに、遺跡北端の府営住宅建て替えに伴う大規模調査では自然河川から和銅銭を中心に69枚の皇朝銭が発見されて話題となった(23)。

発掘成果を概観すると、遺跡は弥生時代から古墳時代後期まで連綿と活動が続くことがわかっている。ところが、飛鳥・奈良時代に限って活動が希薄となり、ふたたび平安時代以降に土地利用が多様化していくようだ。この地域は本来物部氏の拠点とされ、その意味において、遺跡の動向は物部氏の発展と滅亡に対応するようにみえる。ただし、古墳時代の渡来系土器なども数多く出土することから境部臣が倭

漢氏系の境合部に端を発するのであれば、本拠の候補を全く否定できるわけでもない。『日本書紀』による物部氏の滅亡(587年)と、境部摩理勢の誅殺(628年)による境部氏の衰退時期が近接しており、現在の調査成果だけではその対応関係を即断できない状況にある。しかしながら、欽明期前後に集落が出現し、飛鳥時代に発展していく様相はうかがえない。

桜井氏の本拠地の候補に、富田林市桜井町周辺という意見がある。周辺には粟ヶ池遺跡・桜井遺跡・中野北遺跡がある。遺跡は広範囲に及ぶものの、古代集落の実態を解明する調査はほとんど行われていない。これまでの富田林市教育委員会による小規模調査の積み重ねによって、６世紀後半から７世紀にかけての遺構と土器が散在的に出土することがわかっている。近年、桜井町の西に接する粟ヶ池の東堤から６世紀後半の小規模な方墳も発見された(24)。

集落の実態はまだよくわからないが、桜井町の１km南西にある新堂廃寺は７世紀前半に創建された四天王寺式の古代寺院ということが発掘成果などから明らかにされた(25)。伽藍には飛鳥寺式や山田寺式の瓦が採用されるなど、７世紀初頭の造営で蘇我系寺院と推測することもできる。寺院を桜井氏と結び付ける積極的な論拠に欠くものの、欽明期に勢力をもった一族が７世紀以降に台頭するという可能性はある。

また、近年注目すべき発掘成果として、河南町山城の山城新池整備に伴う発掘調査で古墳時代後期から飛鳥・奈良・平安時代にかけての大規模な建物群が発見されたことである(26)。遺跡周辺では白鳳期の軒瓦などが発見されていたことから古代寺院があると考えられ、山城廃寺と呼ばれていたが、その南面に大規模な集落の存在が判明したのである。ここを拠点とする氏族は『新撰姓氏録』にも記されている渡来系の山背忌寸氏と推定される。「河内国石川郡山代郷従六位上山代忌寸真作」銘の墓誌も知られる。また、平城京左京三条二坊の長屋王邸から「山代御薗」・「山代忌寸」・「和銅七年」などを記す木簡がいくつも発見されている。木簡より、石川郡山城に長屋王の御領地（御薗）があったとされ、さらには「山背御田十町　可佃人功」の木簡より、御領地が十町歩以上に及んだ実態がわかる。河南台地の北端に山代忌寸氏の拠点があり、その一部が奈良時代には皇領となっていたようだ。

以上に加えて、芹生谷遺跡を含む千早赤阪村川野辺周辺の状況が明らかとなってきた。周辺は欽明期以前から集落が栄えた様相はない。金山古墳は欽明期に造営され、推古期にも追葬は続いた。これらの有力者を支えた人々は古墳周辺にいたのではなく、そこから長駆の水路を通し、灌漑をおこなっていたことから、下流域だったようだ。推古期になると、芹生谷遺跡の西北に石塚古墳群が形成されることから、下流といってもさほど遠いところではないだろう。欽明期に集団の定着があり、推古期にかけて発展していく様相がうかがえる。

ところで、蘇我傍系氏族の河辺氏は『日本書紀』欽明二三年条（562)、河辺臣瓊缶（にえ）を副将軍として新羅討伐の記事がある。『日本書紀』は河辺臣が捕虜になるも生還することを記すが正確なことはわからない。同様に、『日本書紀』推古三一年条（623)、河辺臣禰受（ねず）を副将軍として再び新羅討伐の記事がある。その後も舒明天皇即位前(628)の群臣会議や、孝徳五年(654)の遣唐大使に河辺氏の名があり、天武天皇十年十二月条(681)にも河辺臣子首が新羅使節を接待するなどの記事があり、河辺氏は飛鳥時代を通じて繁栄していたことがわかる。

芹生谷遺跡・川野辺遺跡やその周辺古墳の様相をみるかぎり、その発展は６世紀後半の欽明期に遡る

ことが認められるとしても、飛鳥時代を通じて発展していった様相にはない。この地を蘇我傍系氏族河辺氏の本拠とし、金山古墳の被葬者像に対応させるならば、今後の調査で飛鳥時代の本拠地が発見されると考えるか、７世紀以降は大和に拠点を移したと考える必要がある。現在のところ、６世紀後半のみ栄えるような有力豪族は推定しがたく、７世紀以降の実態究明が望まれる。

(註・引用文献)

（１）　大阪府教育委員会(2011～2013)『芹生谷遺跡』Ⅰ～Ⅲ

（２）　赤井毅彦(1994)『史跡金山古墳調査概要』河南町教育委員会

（３）　千早赤阪村教育委員会吉光貴裕氏のご教示による。今回調査成果の芹生谷遺跡現地説明会で展示。

（４）　藤井寺市教育委員会山田幸弘氏のご教示による。

（５）　堺市教育委員会森村健一氏のご教示による。森村健一(2006)「12・13世紀における関南沿海窯系白磁碗から龍泉窯系青磁碗へ」『吉岡康暢先生古希記念論集　陶磁器の社会史』

（６）　狭山池調査事務所(1998)『狭山池　埋蔵文化財編』　西川寿勝・河野一隆編(2003)『考古学と暦年代』ミネルヴァ書房

（７）　近つ飛鳥博物館(2013)『考古学からみた推古朝』

（８）　狭山池調査事務所(1998)『狭山池　埋蔵文化財編』　大阪狭山市(2014)『大阪狭山市史』第一巻

（９）　直木孝次郎(1975)「雑徭の成立について」『日本書紀研究』８　塙書房

(10)　森浩一　(1978)「古墳文化と古代国家の誕生」『大阪府史』１　大阪府

(11)　上林史郎(2009)「平石古墳群の被葬者像」『加納古墳群・平石古墳群』

(12)　塚口義信(1999)「横口石槨墳の被葬者像」『季刊考古学』68　雄山閣

(13)　白石太一郎(2009)「大阪府河南町金山古墳の再検討」『館報』13　大阪府立近つ飛鳥博物館　白石太一郎(2010)「ふたつの飛鳥の終末期古墳」『ふたつの飛鳥の終末期古墳』　大阪府立近つ飛鳥博物館

(14)　西川寿勝(2012)「鳩原の由来」『奥田井遺跡Ⅱ・太井遺跡Ⅰ発掘調査概要』大阪府教育委員会

(15)　中村浩(2010)「「河内龍泉寺坪付帳案文」について」『大阪大谷大学文化財研究』10 大阪大谷大学

(16)　津田左右吉(1948)『日本古典の研究』岩波書店

(17)　岸俊男(1966)「たまきはる内の朝臣」『日本古代政治史研究』塙書房

(18)　日野昭(1971)『日本古代氏族伝承の研究』永田文昌堂

(19)　加藤謙吉(1983)『蘇我氏と大和王権』雄山閣　加藤謙吉(2002)『大和の豪族と渡来人』吉川弘文堂

(20)　志田諄一(1972)『古代氏族の性格と伝承』雄山閣

(21)　黛弘道　(1995)『物部・蘇我氏と古代王権』吉川弘文館

(22)　(財) 大阪府文化財協会　(1989)『高向遺跡』　大阪府教育委員会　(2000・2001)『高向遺跡発掘調査概報』Ⅰ・Ⅱ　河内長野市遺跡調査会　(1996)『高向遺跡』

(23)　(財) 八尾市文化財調査研究会　(1987・1988・1990)『小阪合遺跡』　(財) 大阪府文化財センター(2000・2004)『小阪合遺跡』(その１)・(その２)

(24)　大阪府教育委員会　(2005)『中野北遺跡』

(25)　大阪府教育委員会　(2000)『新堂廃寺』　富田林市教育委員会　(2003)『新堂廃寺跡　オガンジ池瓦窯跡　お亀石古墳』

(26)　大阪府教育委員会　(2010)『山城廃寺』

報 告 書 抄 録

ふりがな	せるたにいせき
書名	芹生谷遺跡 Ⅳ
副書名	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2014-1
編著者名	西川寿勝
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前二丁目 TEL　06－6941－0351（代表）
発行年月日	平成26年12月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積(㎡)	調査原因
せるたにいせき 芹生谷遺跡	おおさかふみなみかわちぐん 大阪府南河内郡 かなんりょうせるたになか 河南町芹生谷、中	27219	35	34° 29′ 00″	135° 25′ 54″	平成25年７月１日 ～ 平成26年２月14日	5084㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
芹生谷遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代後期 飛鳥時代 中世	竪穴住居・掘立柱建物・土坑 溝 掘立柱建物・土坑・条里水田	サヌカイト剥片 土師器・須恵器 須恵器 中国製磁器・土師質土器・瓦質土器・銅銭	竪穴住居よりTK43段階の須恵器が出土。これは史跡金山古墳の造営段階にあたる。 水田水路と思われる溝よりTK209段階の須恵器が出土。これは史跡金山古墳の追葬段階にあたる。 中国製磁器には白磁碗・青磁碗などがある。

要約	史跡金山古墳の近隣でその造営期に営まれた竪穴住居・掘立柱建物などを確認した。 史跡金山古墳の北側でその追葬段階に営まれた南北溝を確認した。 現代まで続く条里地割による水田と水路、南北朝時代の居住域などを確認した。

大阪府埋蔵文化財調査報告2014－1

芹 生 谷 遺 跡 Ⅳ

発　行　大阪府教育委員会
〒540－8571　大阪市中央区大手前２丁目
TEL 06－6941－0351（代表）

発行日　平成26年12月26日

印　刷　有限会社　ウェイク
〒537－0001　大阪市東成区深江北２丁目11番36号

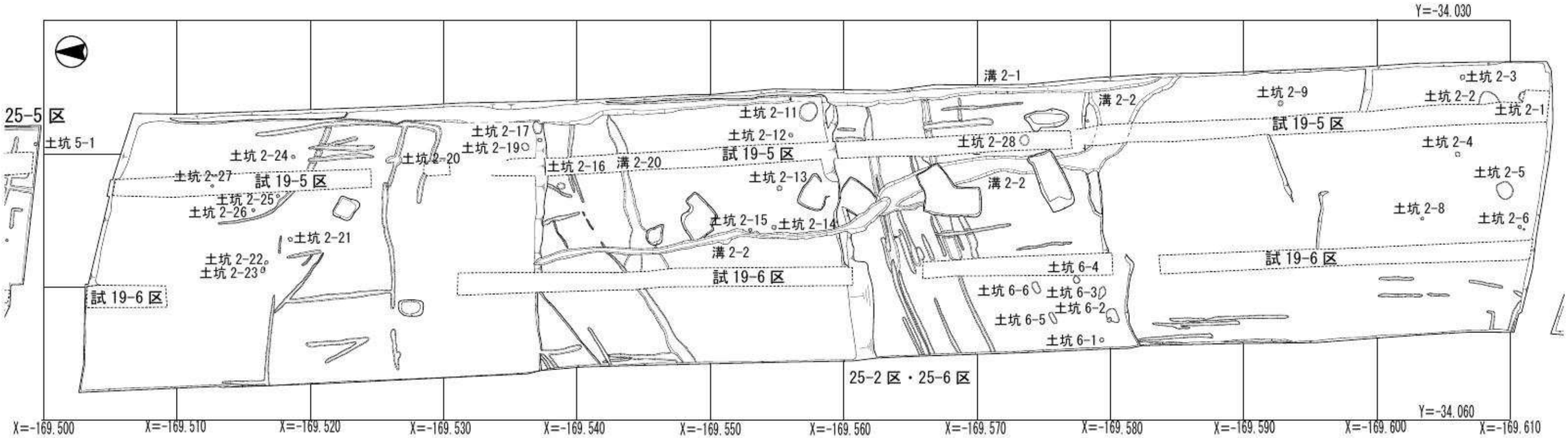

Y=-34.030
25-5 区
土坑 5-1
土坑 2-24
土坑 2-27
試 19-5 区
土坑 2-25
土坑 2-26
土坑 2-21
土坑 2-22
土坑 2-23
試 19-6 区
土坑 2-20
土坑 2-17
土坑 2-19
土坑 2-16
溝 2-20
土坑 2-11
土坑 2-12
試 19-5 区
土坑 2-13
土坑 2-15
土坑 2-14
溝 2-2
試 19-6 区
溝 2-1
溝 2-2
土坑 2-28
溝 2-2
土坑 6-4
土坑 6-6
土坑 6-3
土坑 6-2
土坑 6-5
土坑 6-1
25-2 区・25-6 区
土坑 2-9
土坑 2-3
土坑 2-2
土坑 2-1
試 19-5 区
土坑 2-4
土坑 2-5
土坑 2-8
土坑 2-6
試 19-6 区
Y=-34.060
X=-169.500
X=-169.510
X=-169.520
X=-169.530
X=-169.540
X=-169.550
X=-169.560
X=-169.570
X=-169.580
X=-169.590
X=-169.600
X=-169.610
X=-169.600
X=-169.610
X=-169.620
X=-169.630
X=-169.640
X=-169.650
X=-169.660
X=-169.670
X=-169.680
X=-169.690
X=-169.700
Y=-34.030
X=-169.710
土坑 2-3
土坑 2-2
土坑 2-1
試 19-5 区
土坑 2-4
土坑 2-5
土坑 2-6
土坑 2-8
試 19-6 区
試 19-7 区
22-A 区
土坑 1-2
土坑 1-1
土坑 7-1
試 19-8 区
溝 7-4
22-B 区
土坑 7-3
土坑 7-4
土坑 7-2
試 19-9 区
溝 1-2
溝 1-1
溝 1-3
試 19-10 区
土坑 7-5
土坑 7-6
25-1 区・25-7 区
25-2 区・25-6 区
Y=-34.040
Y=-34.050
Y=-34.055
0
10m

図５　調査区南半全体図

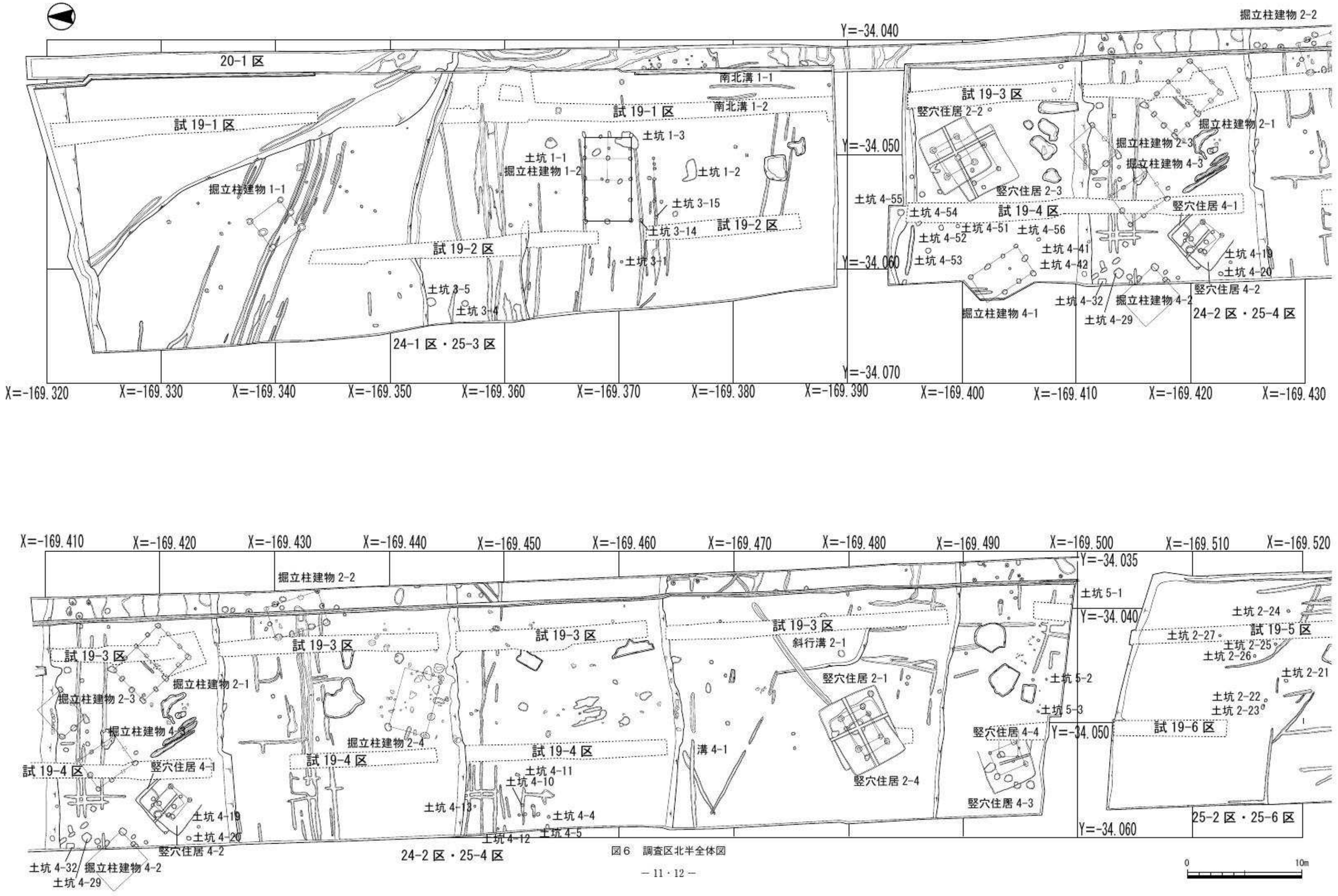

X=-169.320
X=-169.330
X=-169.340
X=-169.350
X=-169.360
X=-169.370
X=-169.380
X=-169.390
X=-169.400
X=-169.410
X=-169.420
X=-169.430
X=-169.440
X=-169.450
X=-169.460
X=-169.470
X=-169.480
X=-169.490
X=-169.500
X=-169.510
X=-169.520
Y=-34.040
Y=-34.050
Y=-34.060
Y=-34.070
Y=-34.035
20-1 区
試 19-1 区
試 19-2 区
試 19-3 区
試 19-4 区
試 19-5 区
試 19-6 区
24-1 区・25-3 区
24-2 区・25-4 区
25-2 区・25-6 区
南北溝 1-1
南北溝 1-2
斜行溝 2-1
溝 4-1
掘立柱建物 1-1
掘立柱建物 1-2
掘立柱建物 2-1
掘立柱建物 2-2
掘立柱建物 2-3
掘立柱建物 2-4
掘立柱建物 4-1
掘立柱建物 4-2
掘立柱建物 4-3
竪穴住居 2-1
竪穴住居 2-2
竪穴住居 2-3
竪穴住居 2-4
竪穴住居 4-1
竪穴住居 4-2
竪穴住居 4-3
竪穴住居 4-4
土坑 1-1
土坑 1-2
土坑 1-3
土坑 2-21
土坑 2-22
土坑 2-23
土坑 2-24
土坑 2-25
土坑 2-26
土坑 2-27
土坑 3-1
土坑 3-4
土坑 3-5
土坑 3-14
土坑 3-15
土坑 4-4
土坑 4-5
土坑 4-10
土坑 4-11
土坑 4-12
土坑 4-13
土坑 4-19
土坑 4-20
土坑 4-29
土坑 4-32
土坑 4-41
土坑 4-42
土坑 4-51
土坑 4-52
土坑 4-53
土坑 4-54
土坑 4-55
土坑 4-56
土坑 5-1
土坑 5-2
土坑 5-3
0
10m

図６　調査区北半全体図

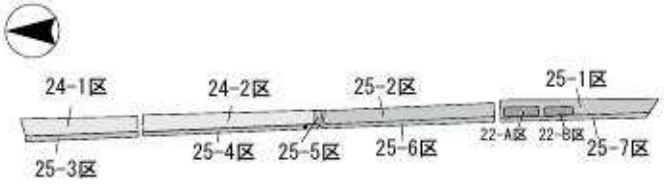
図　　版

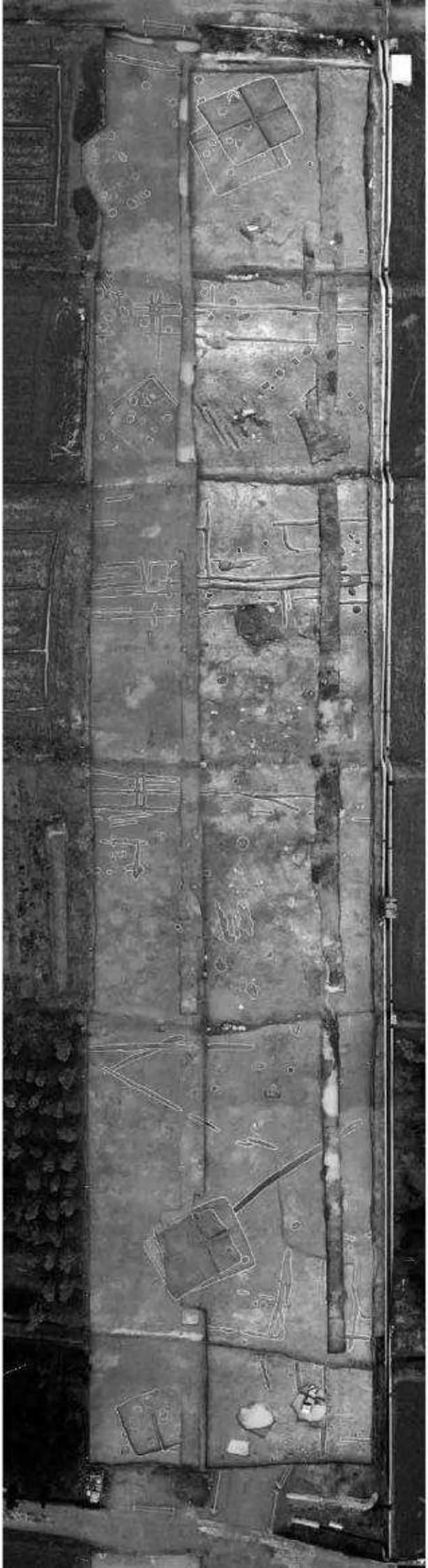
金山古墳と調査区周辺

図版1　全景1

↑25-3区（左）・24-1区（右）合成

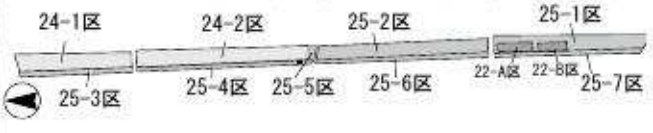
25-4区（左）・24-2区（右）合成→





図版2　全景2

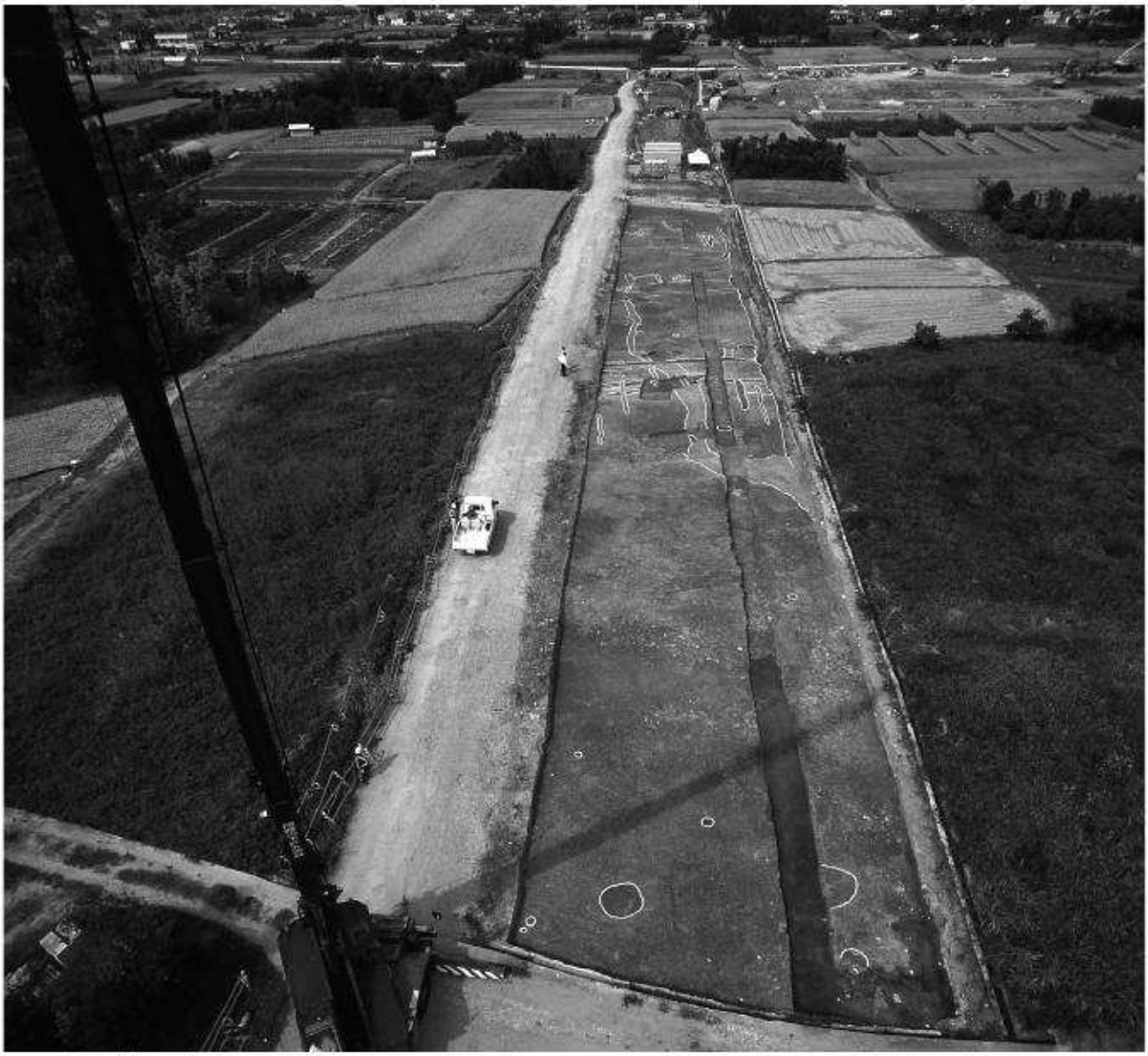
↑25-7区（左）・25-1区（右）合成
←25-6区（左）・25-2区（右）合成



1区全景（北から）

1区全景（北から）

図版4　25—2区全景



2区全景（南から）

2区全景（北から）

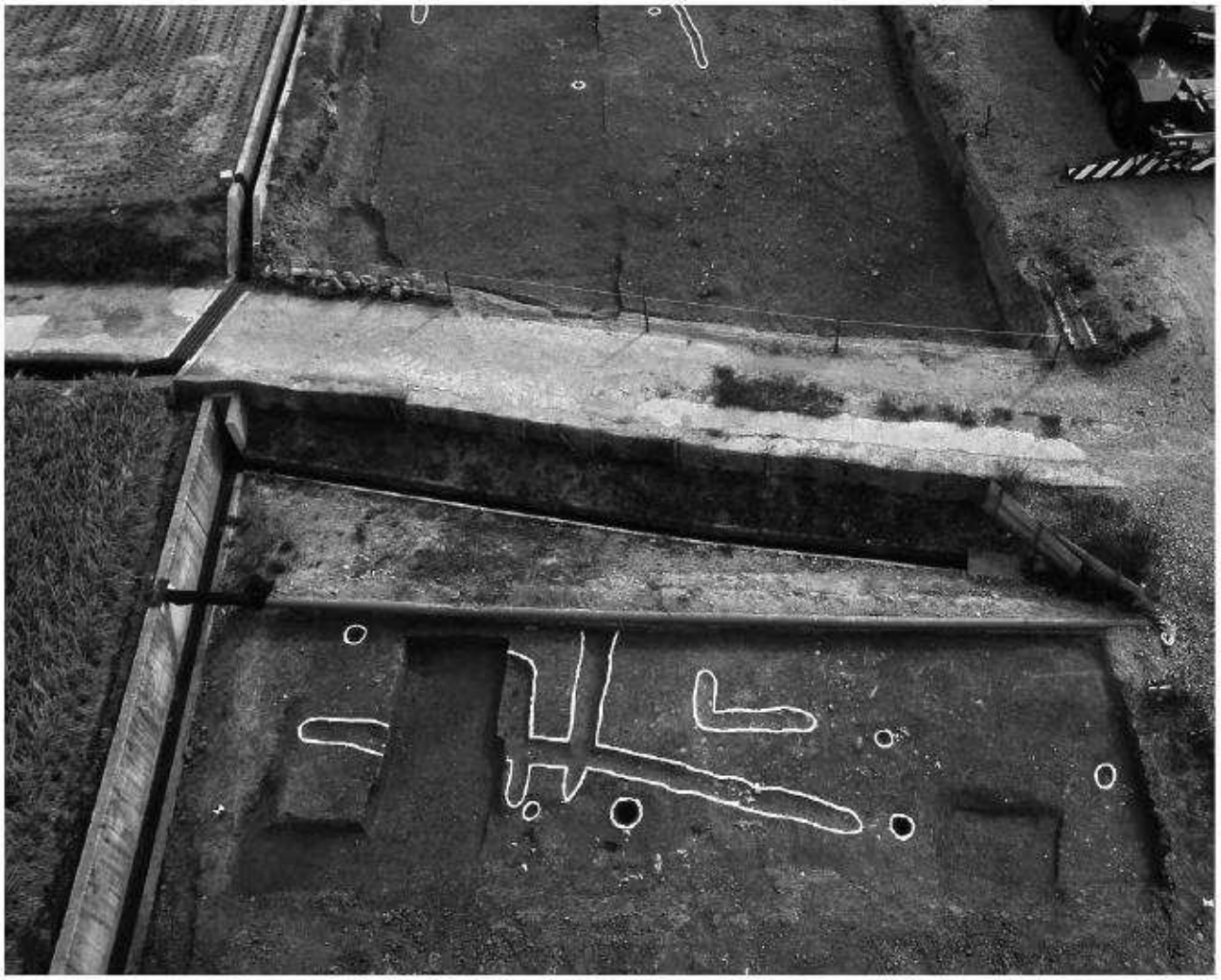
3区全景（南から）

3区全景（北から）

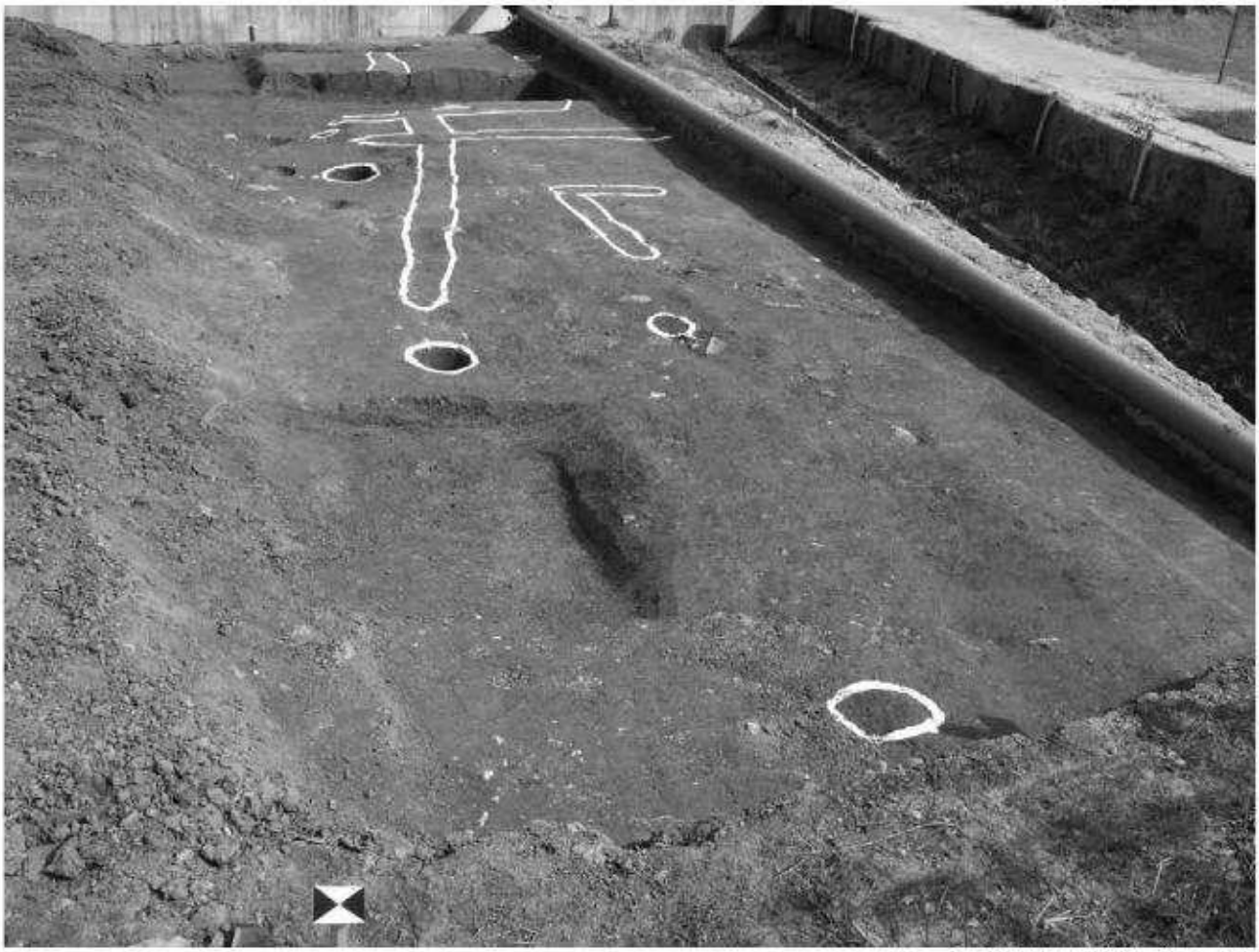
図版6　25—4区全景

4区全景（北から）

4区全景（南から）



5区全景（北から・奥は2区）



5区遺構検出状況（西から）

図版8　25—6区全景

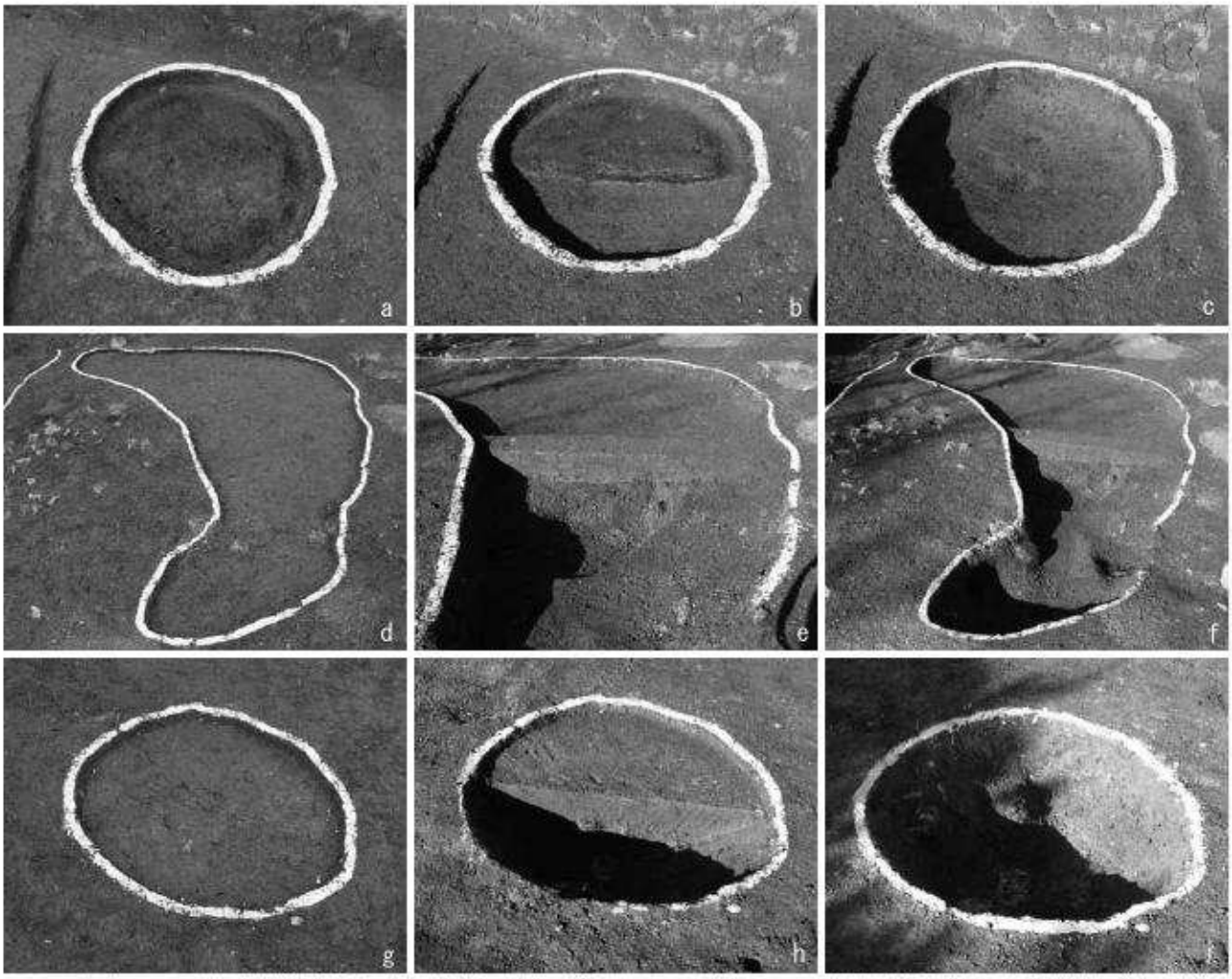
6区全景（北から）

6区全景（南から）

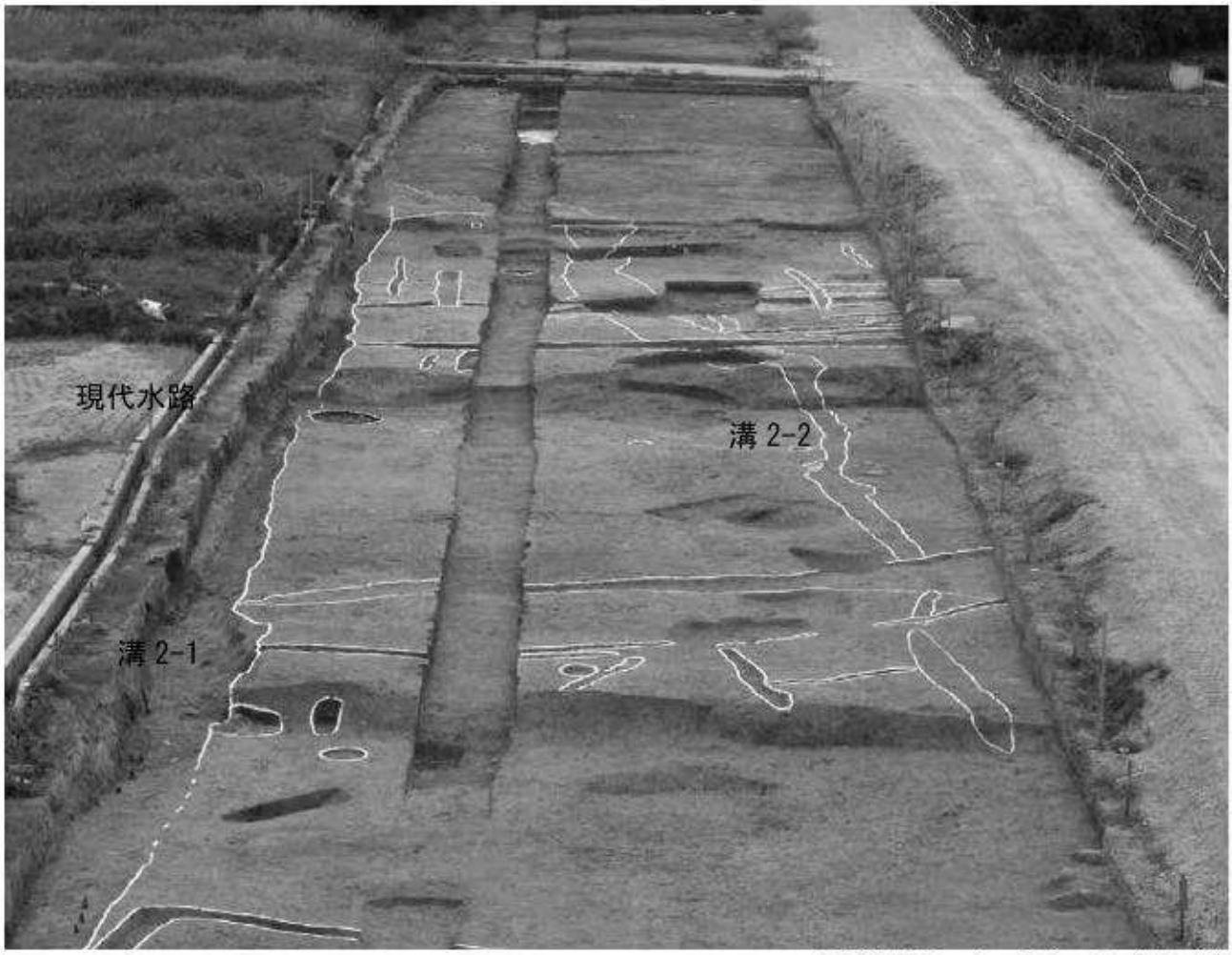
7区全景（北から・左奥は金山古墳）

7区全景（南から）

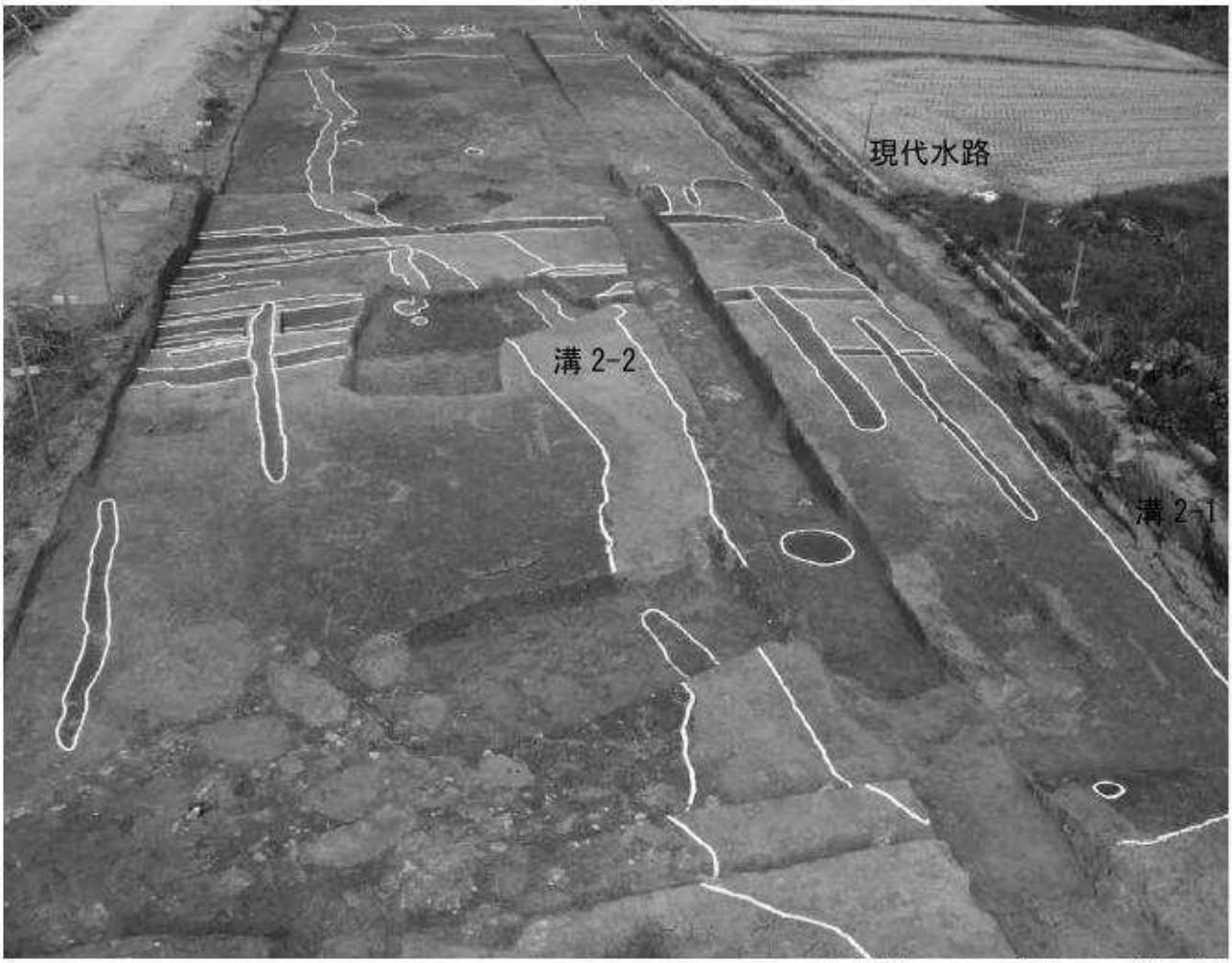
1区遺構調査状況（北から）



a～c土坑7－1検出状況・断面・完掘状況（南から）　d～f土坑7－3検出状況・断面・完掘状況（南から）
g～i土坑7－5検出状況・断面・完掘状況（南から）



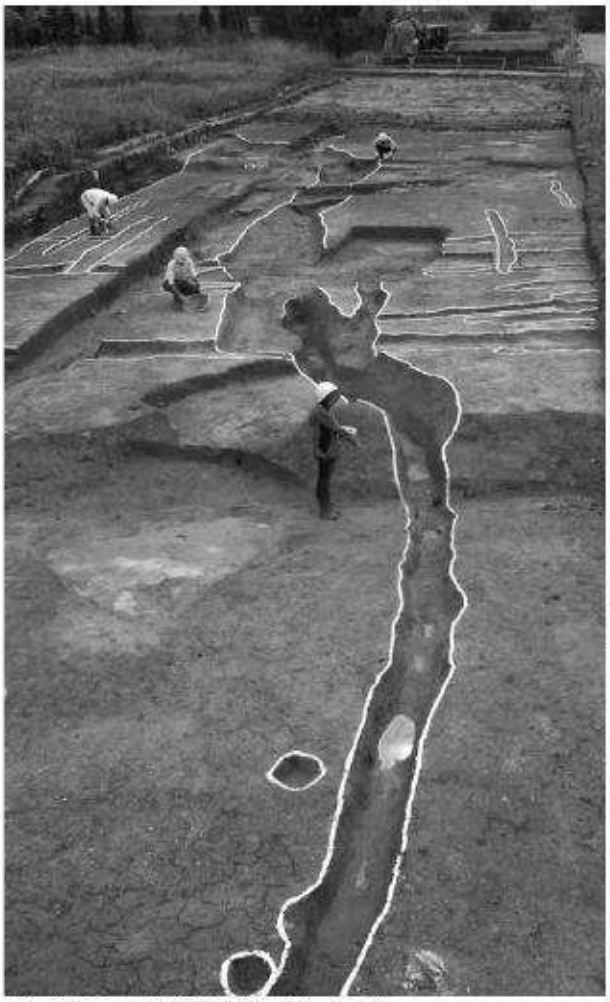
2区遺構2－1・溝2－2（北から）



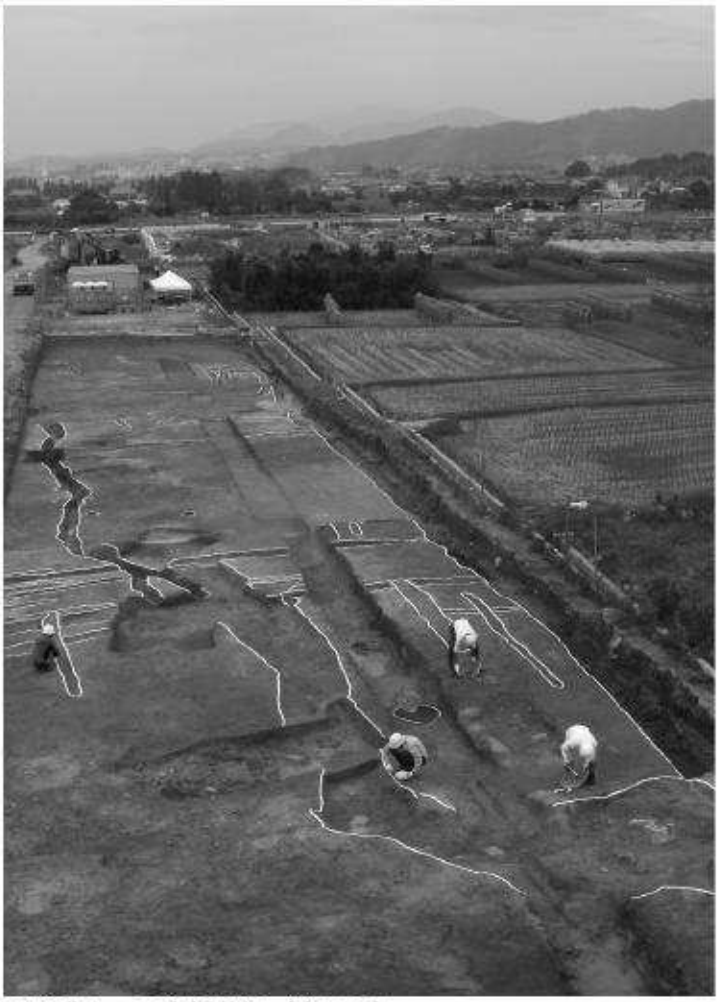
2区遺構2－1・溝2－2（南から）

図版12

25—2区溝2—2

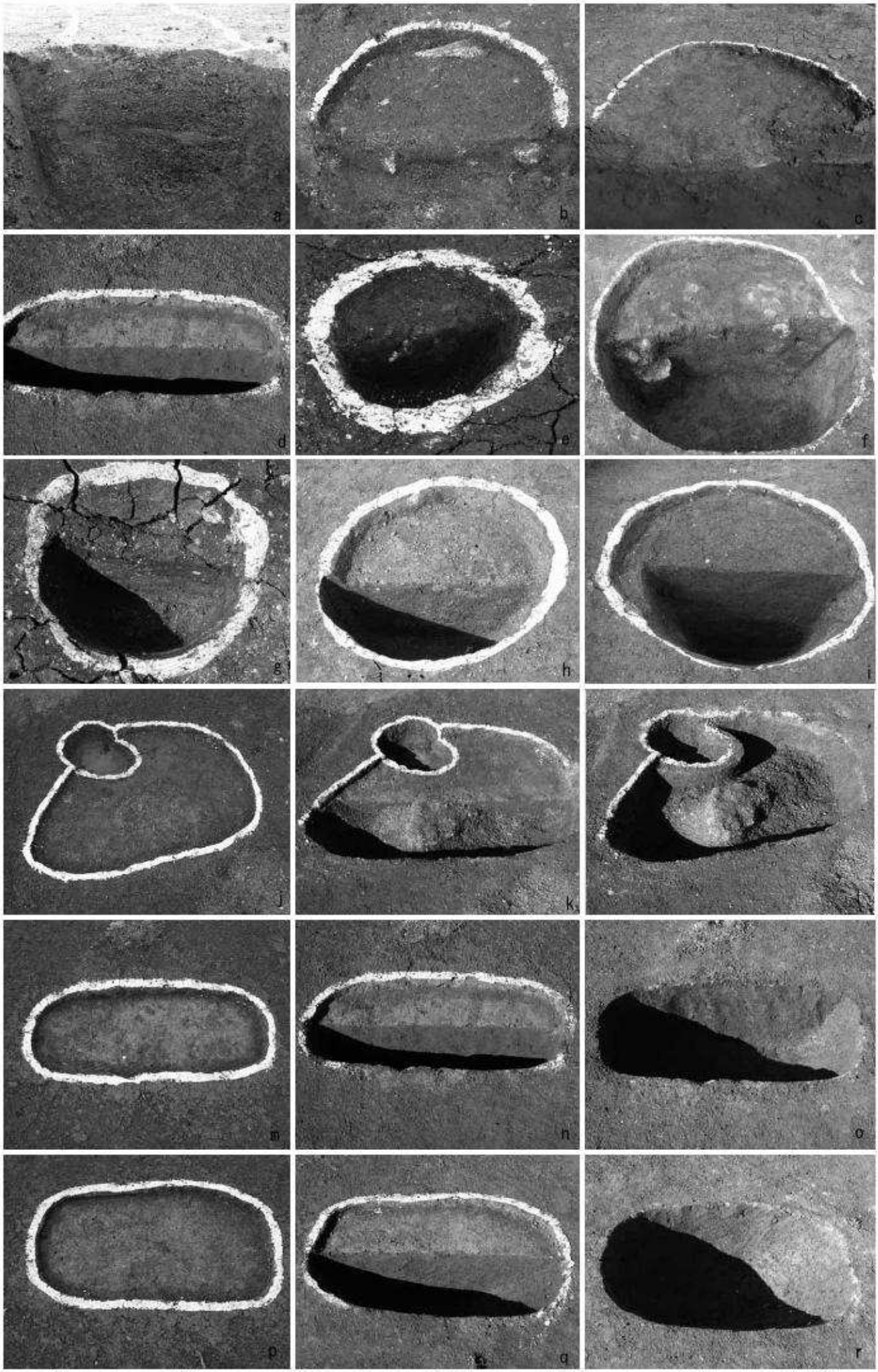


2区溝2－2完掘状況（北から）



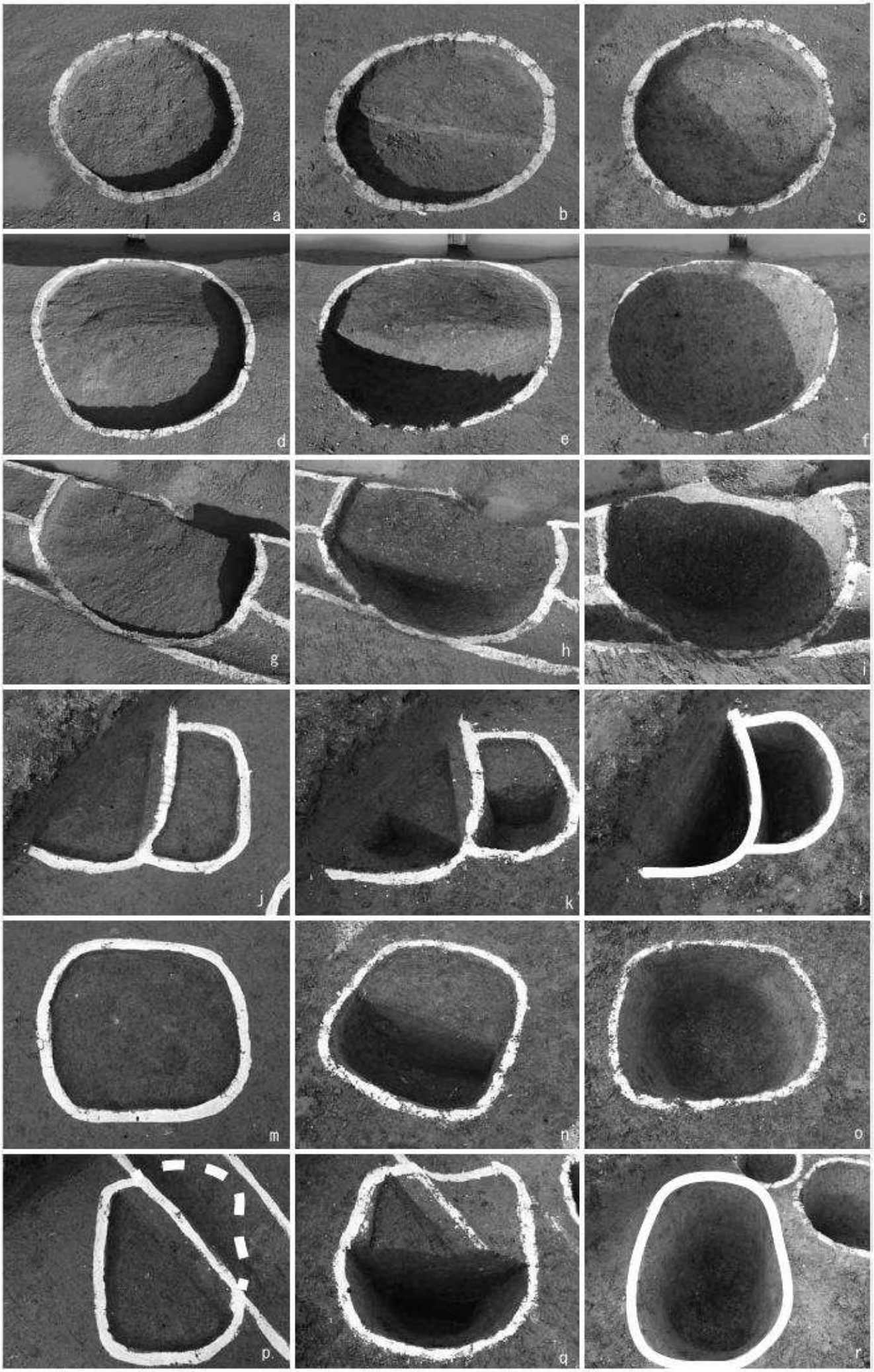
2区溝2－2完掘状況（南から）

2区溝2－2完掘状況（南から）



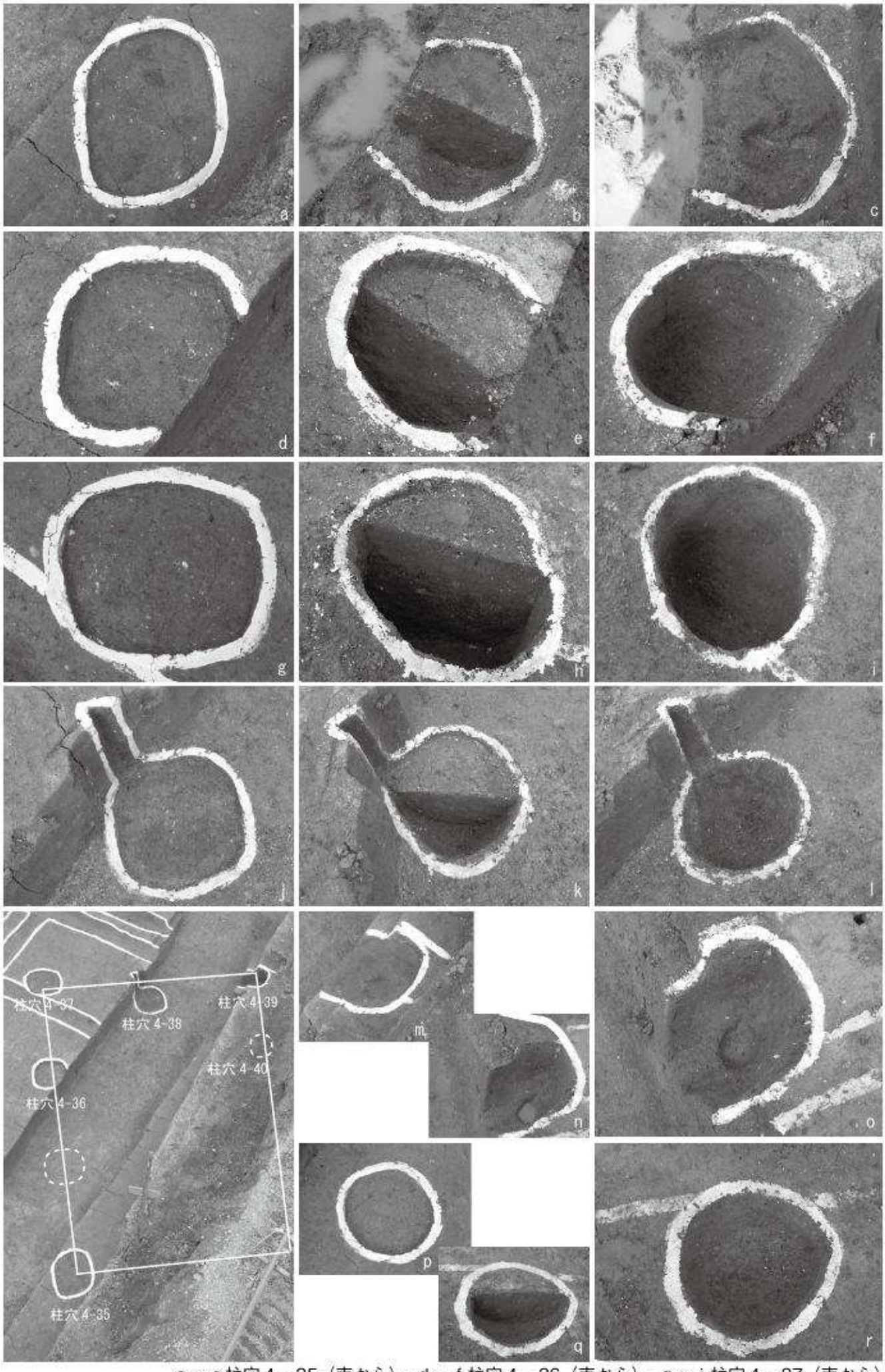
a溝２－２・b土坑２－１・c土坑２－３・d土坑２－５・e土坑２－10・f土坑２－11・g土坑２－13・h土坑２－19・i土坑２－18・j～l穴６－２・m～o穴６－５・p～r穴６－６（すべて南から）

図版14　25—3区・25—4区遺構



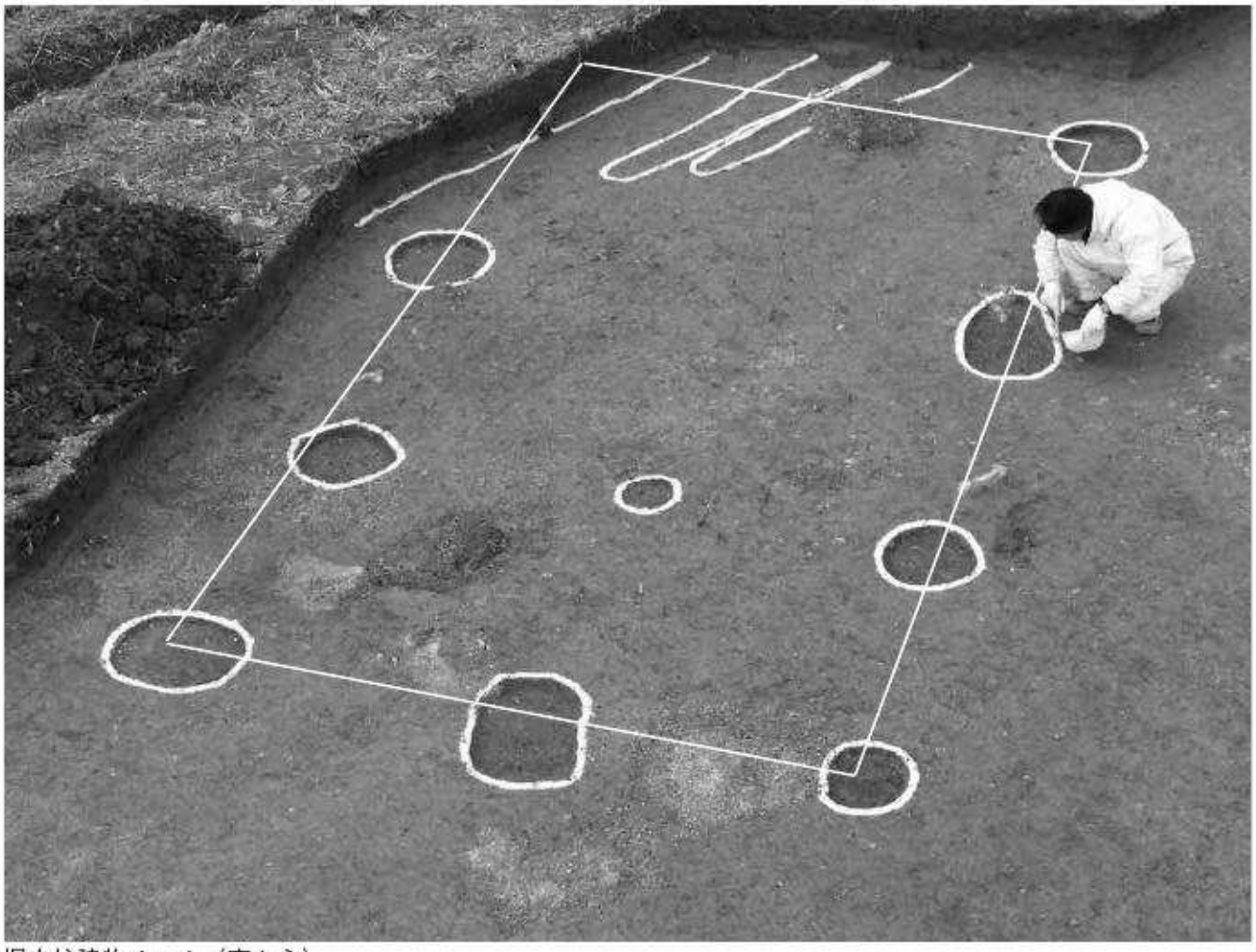
a～c穴2－5（南から）・d～f穴2－11（南から）・g～i穴2－28（南から）
j～l穴6－2（南から）・m～o穴6－5（南から）・p～r穴6－6(南から)

図版15　25—4区掘立柱建物4—3柱穴



a～c柱穴4－35（南から）・d～f柱穴4－36（南から）・g～i柱穴4－37（南から）
j～l柱穴4－38（南から）・m～o柱穴4－39（南から）・p～r柱穴4－40（南から）

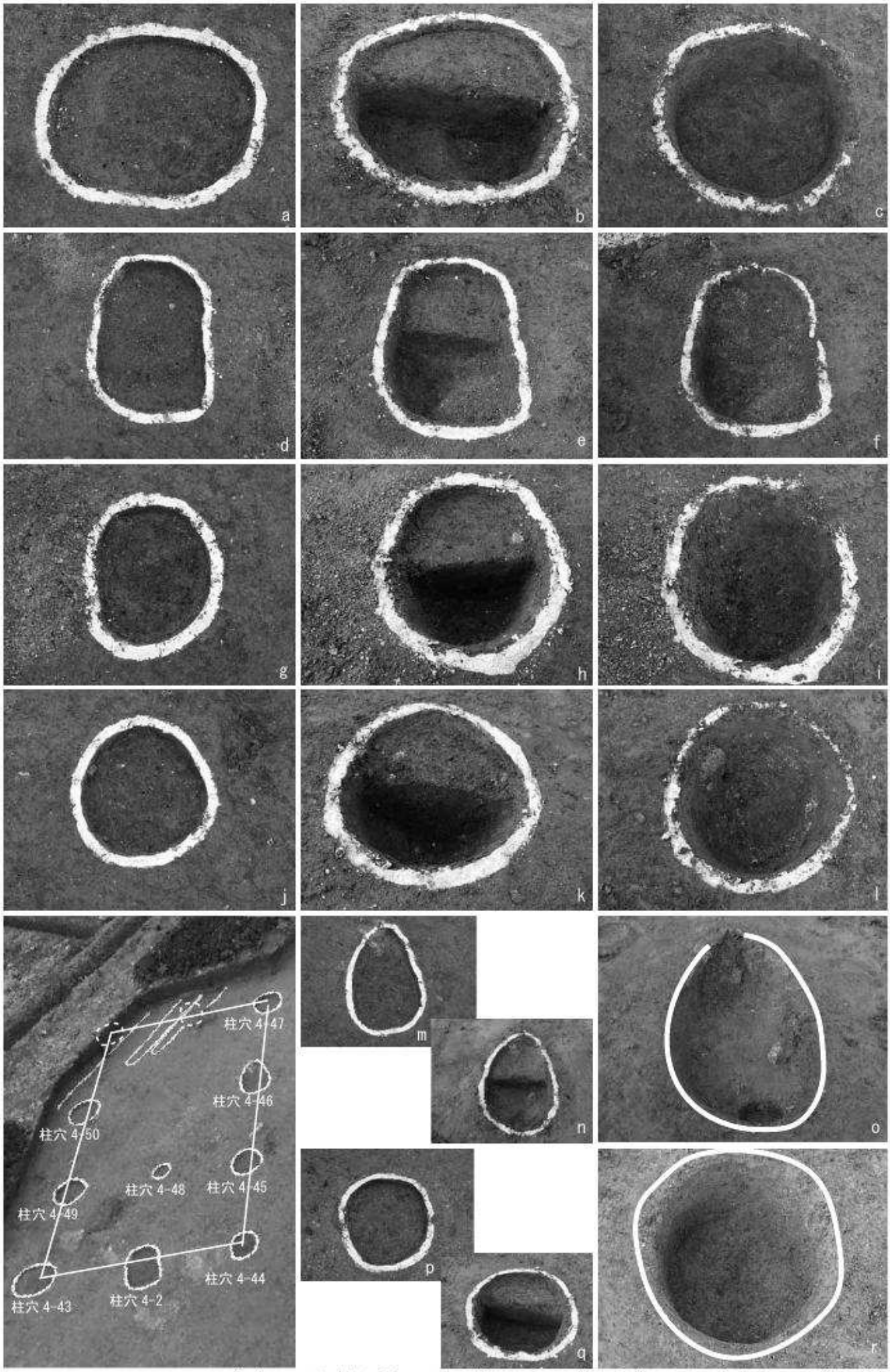
図版16　25—4区掘立柱建物4—1～4—3



掘立柱建物４－１（南から）

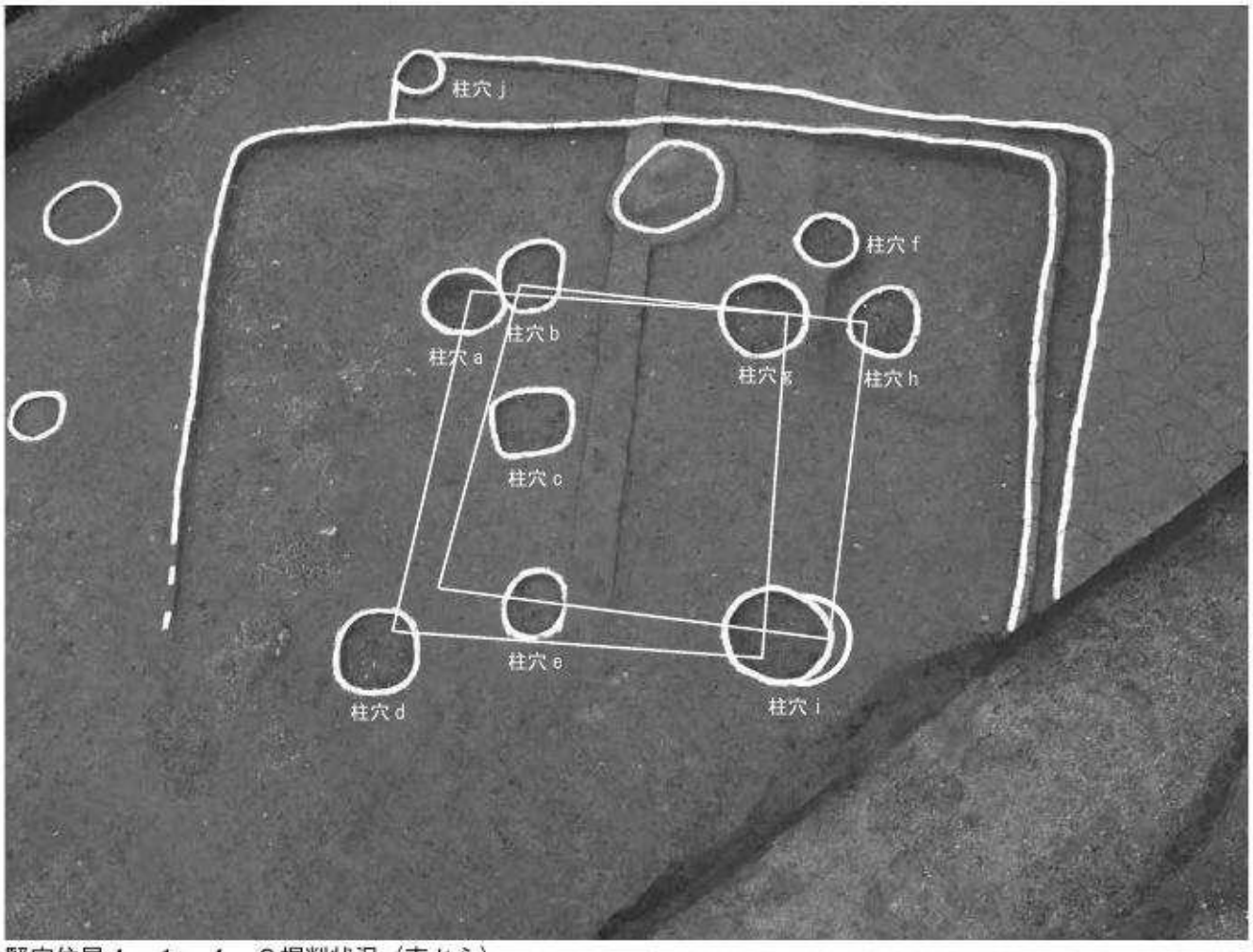
掘立柱建物４－２・掘立柱建物４－３・竪穴住居４－１・４－２（東から）

図版17　25—4区掘立柱建物4—1柱穴



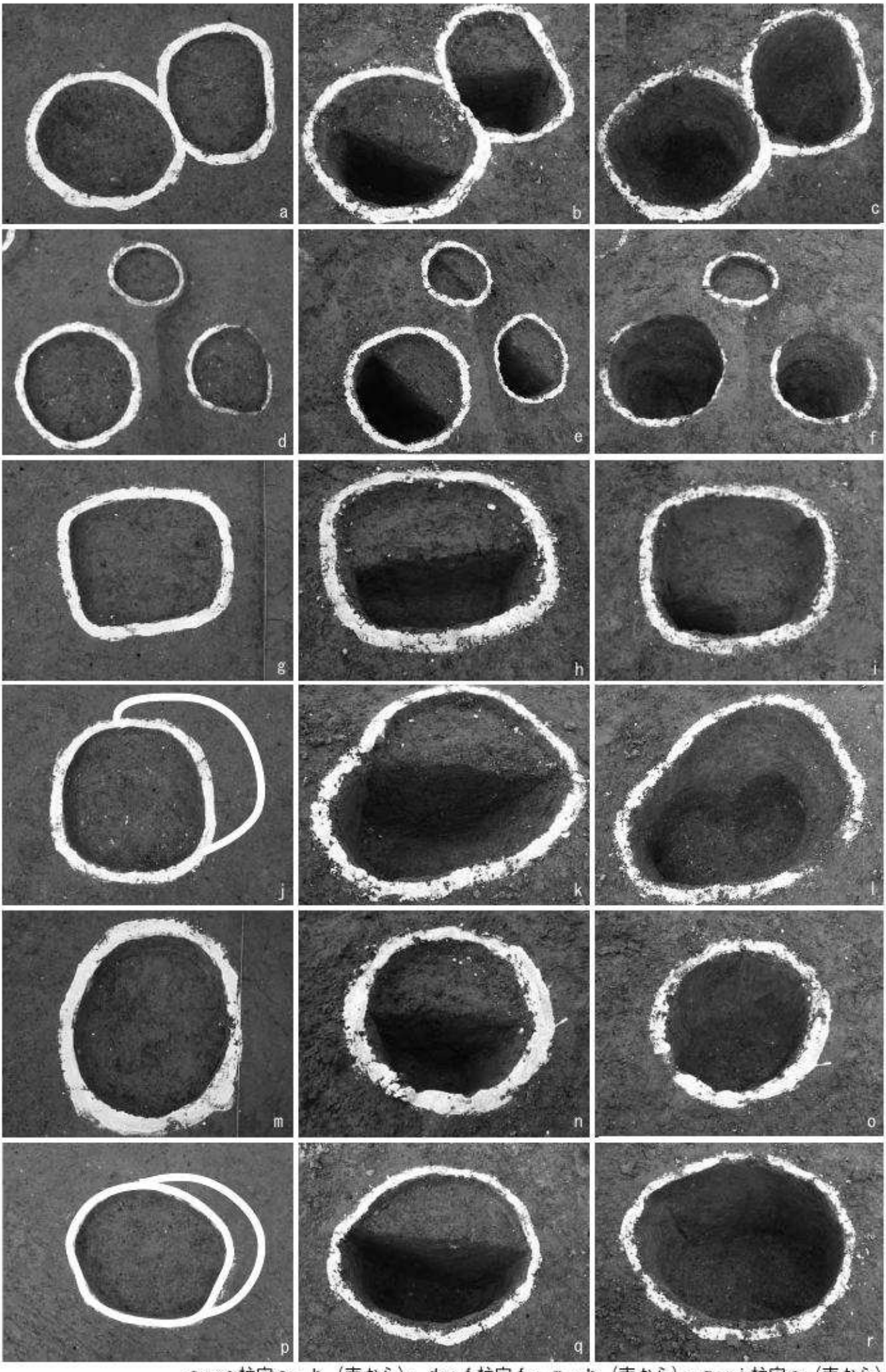
a～c柱穴4－43（南から）・d～f柱穴4－2（南から）・g～i柱穴4－44（南から）
j～l柱穴4－45（南から）・m～o柱穴4－46（南から）・p～r柱穴4－47（南から）

竪穴住居4-1・4-2検出状況（南から）

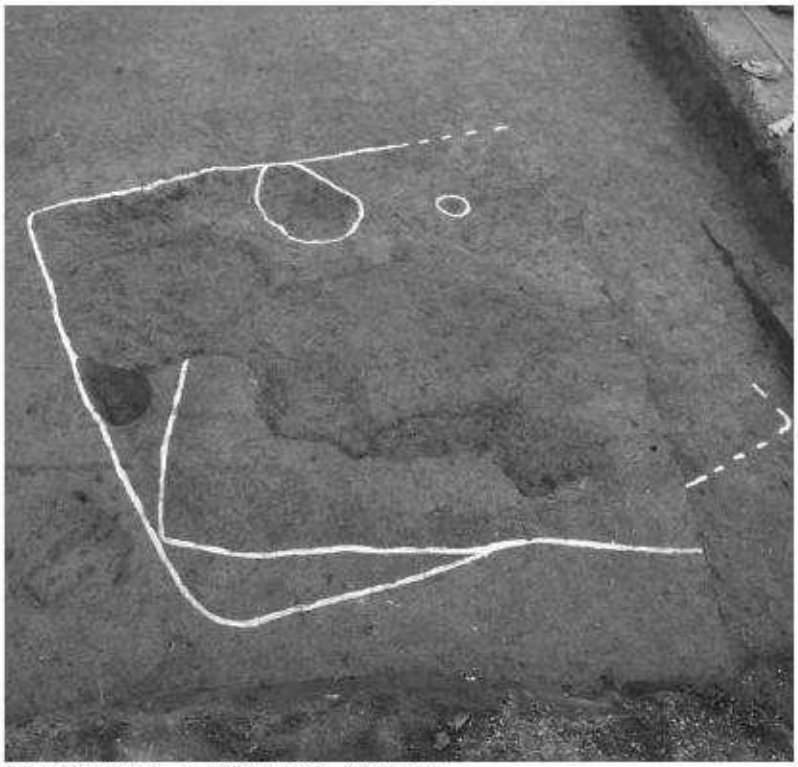


竪穴住居４－１・４－２掘削状況（南から）

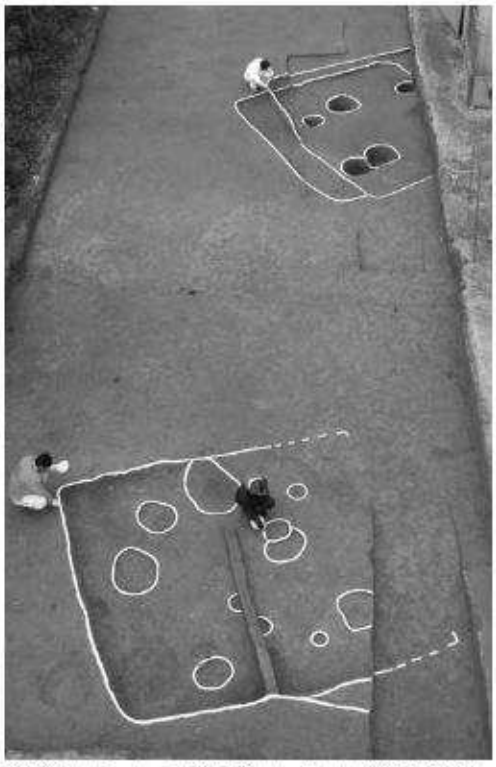
図版19　25—4区竪穴住居4—1・4—2柱穴



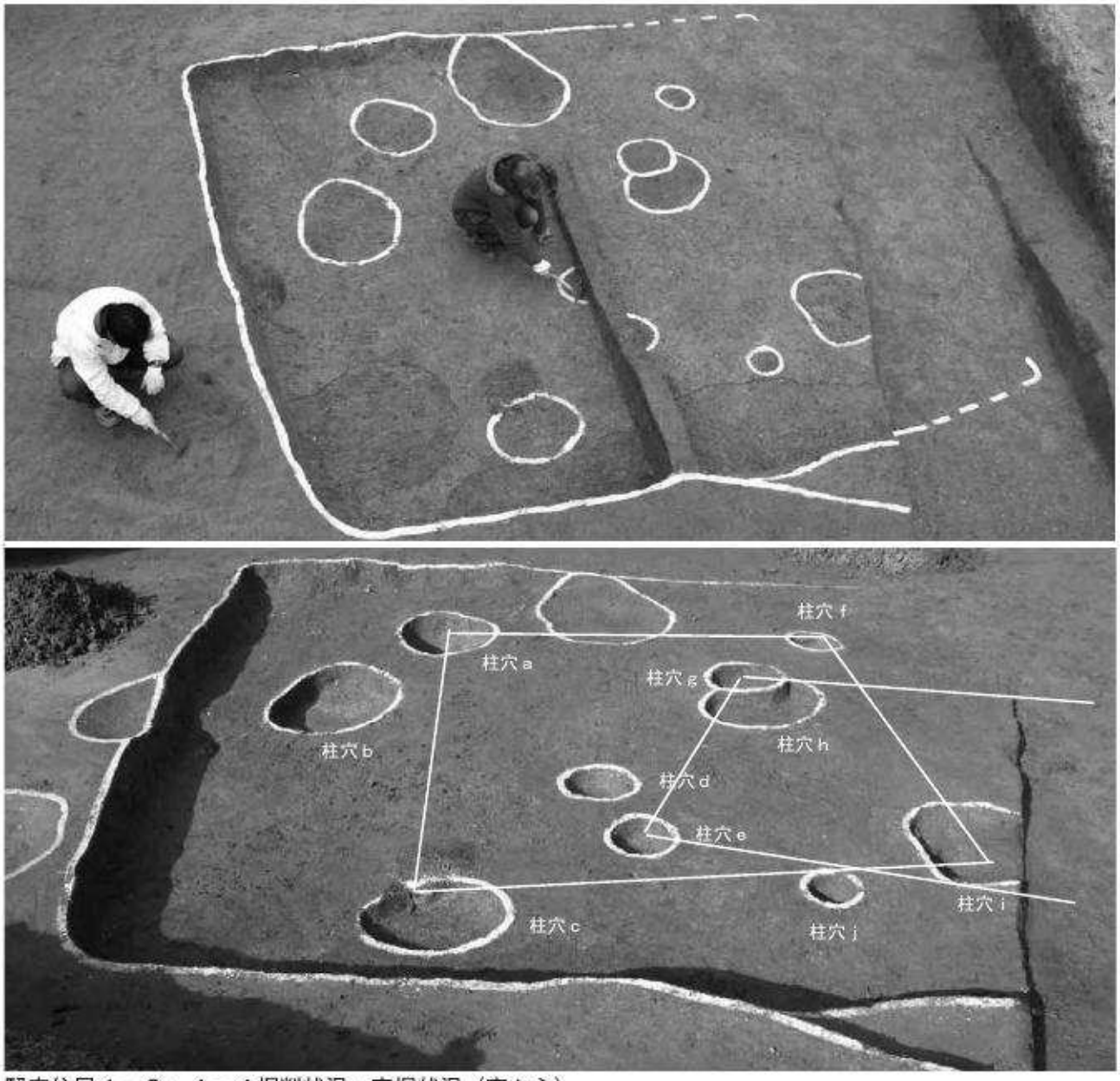
a～c柱穴a・b（南から）・d～f柱穴f・g・h（南から）・g～i柱穴c（南から）
j～l柱穴d（南から）・m～o柱穴e（南から）・p～r柱穴i（南から）



竪穴住居4-3・4-4検出状況（南から）

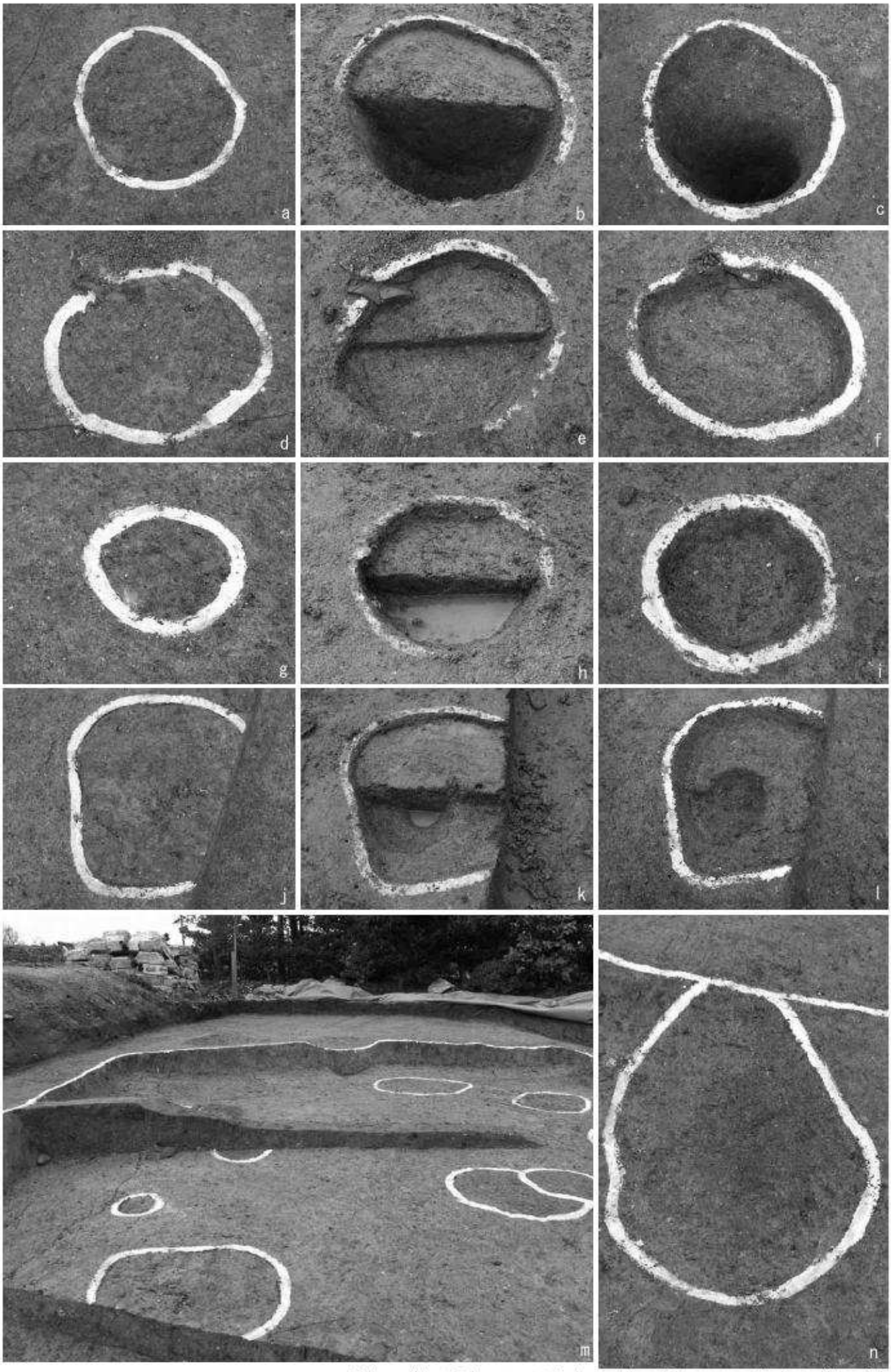


竪穴住居4－3・4－4と竪穴住居2－1・2－4（前年度調査）



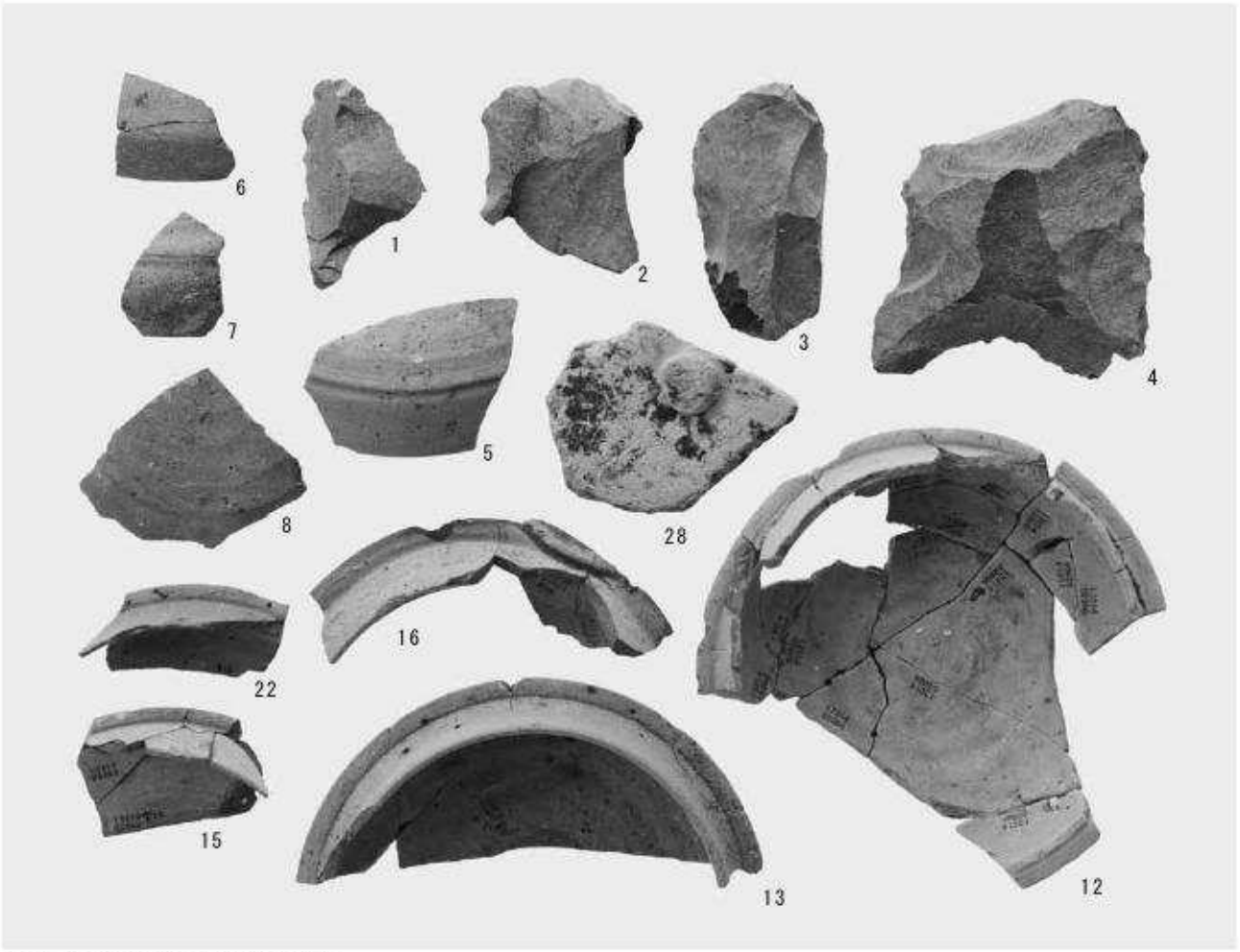
竪穴住居４－３・４－４掘削状況・完掘状況（南から）

図版21　25—4区竪穴住居4—3・4—4柱穴

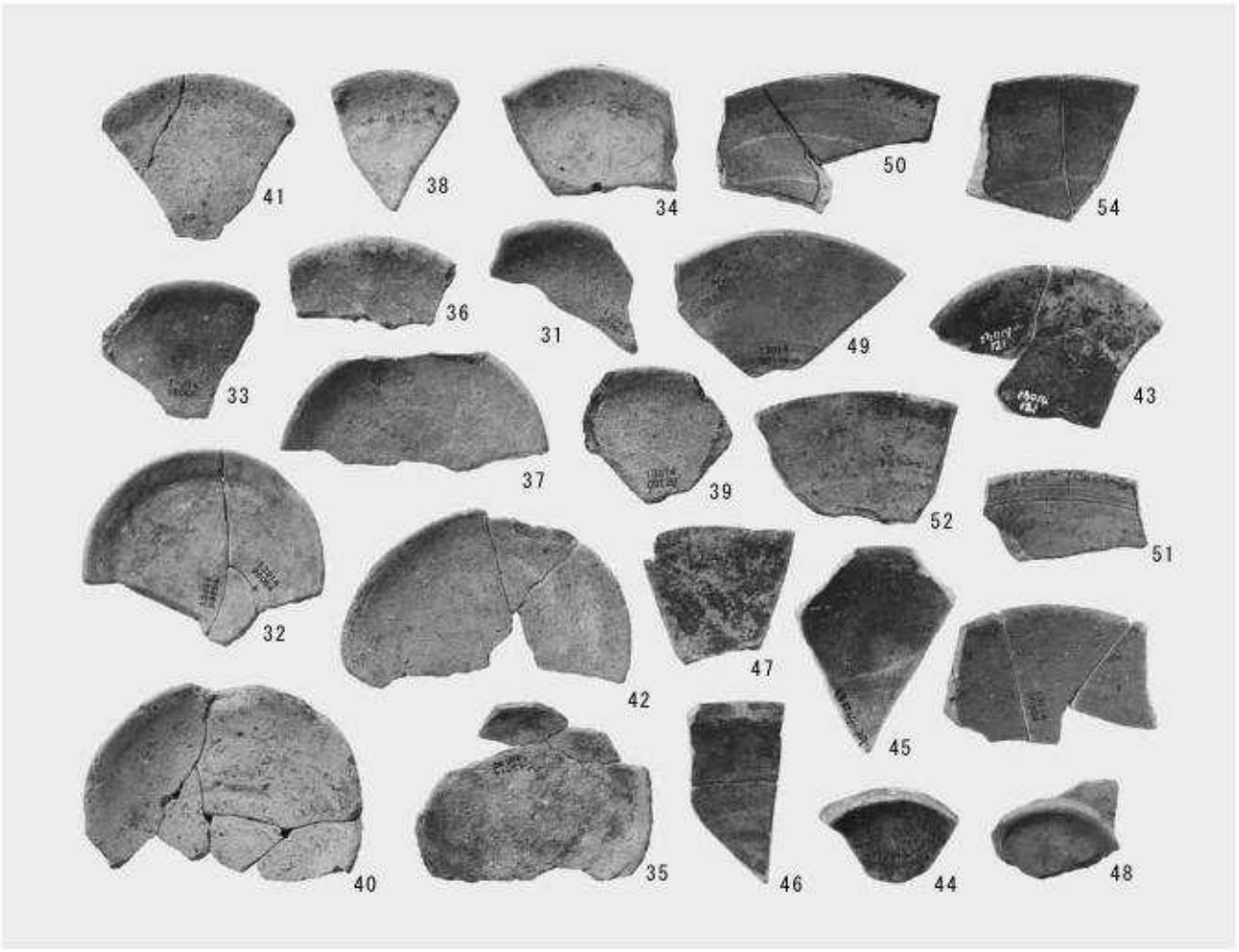


a～c柱穴a（南から）・d～f柱穴c（南から）・g～i柱穴f（南から）
j～l柱穴i（南から）・m土層断面（東から）・nカマド痕跡（南から）

図版22　石器・古墳～飛鳥時代の土器・中世の遺物1

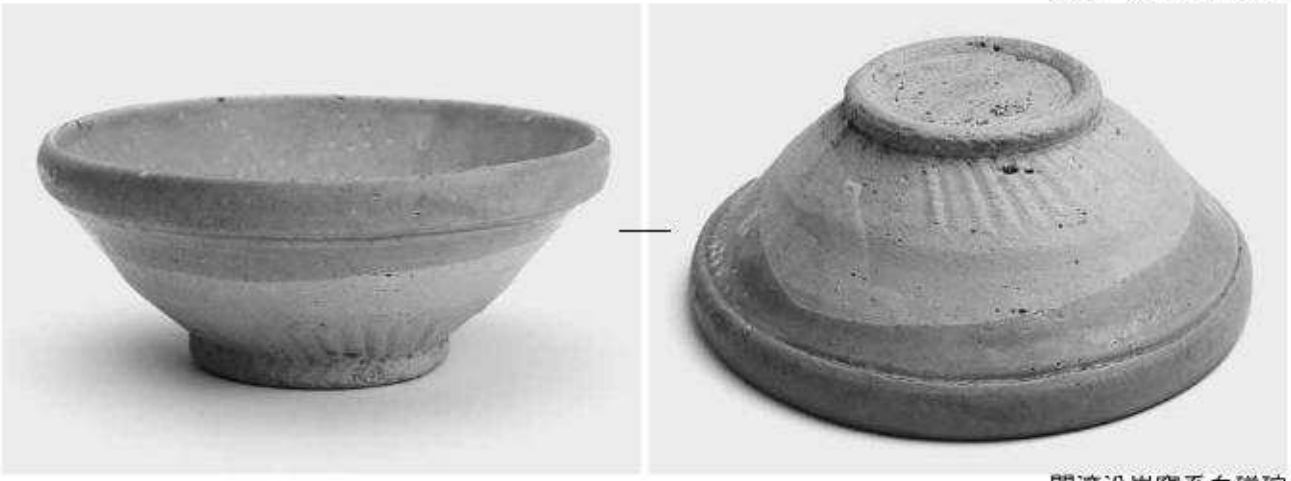


サヌカイト剥片・須恵器蓋杯

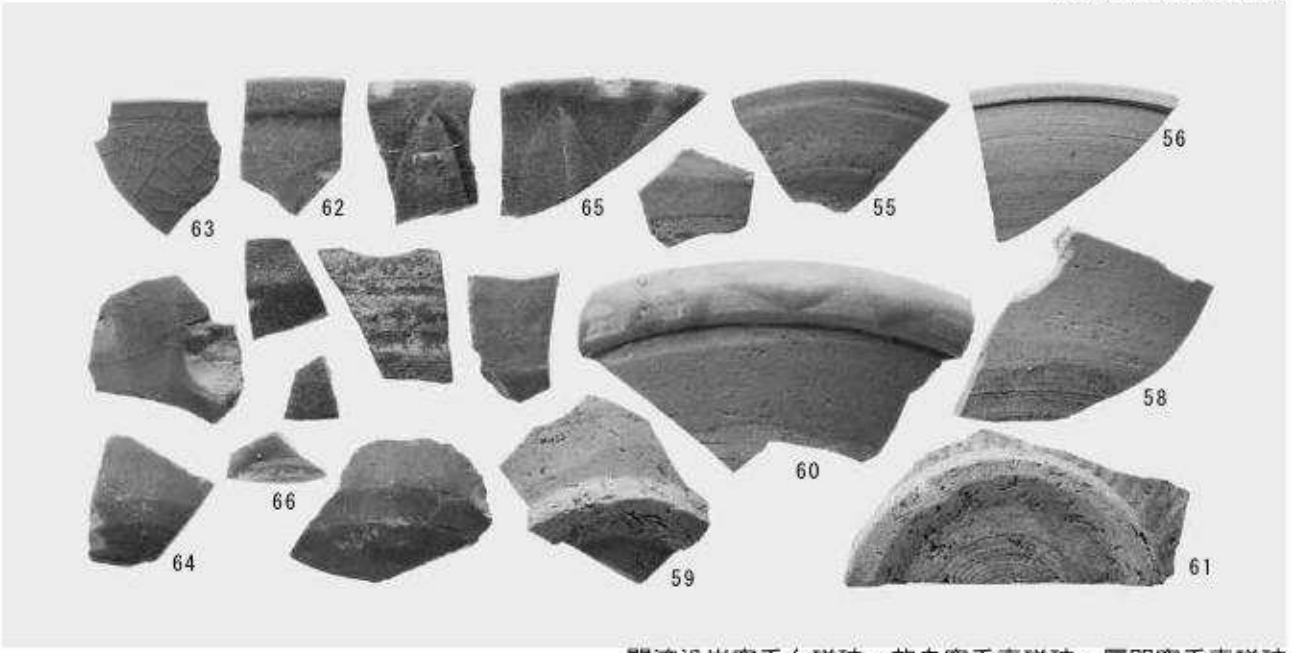


土師質土器皿・瓦器碗

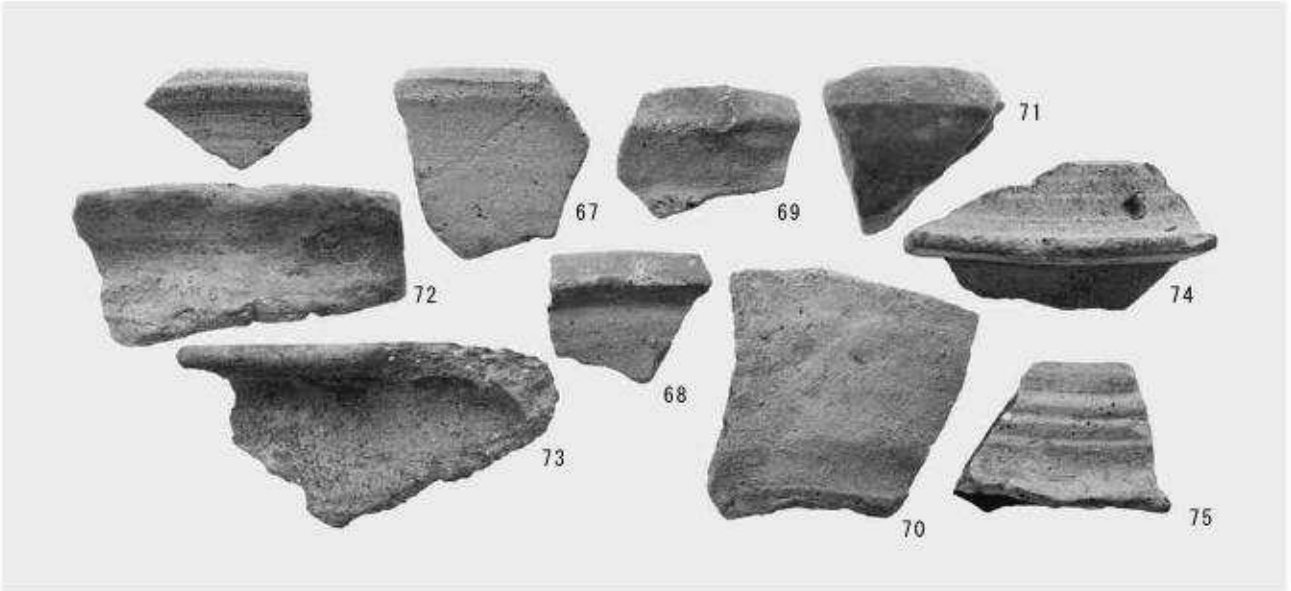
鉄釘・元豊通宝銅銭



閩湾沿岸窯系白磁碗



閩湾沿岸窯系白磁碗・龍泉窯系青磁碗・厦門窯系青磁碗

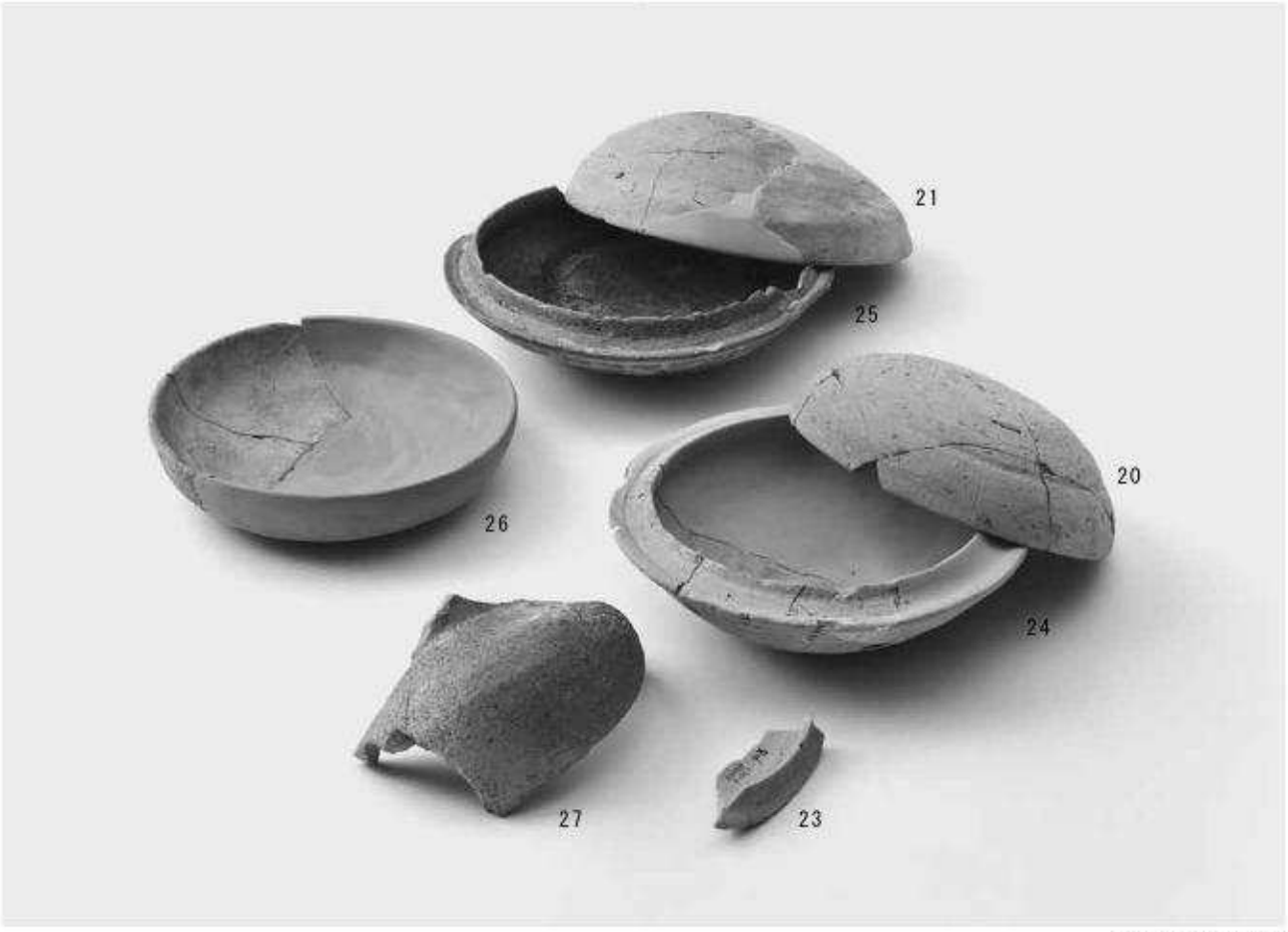


瓦質土器すり鉢・東播系炻器すり鉢・土師質土器甕・瓦質土器羽釜

図版24　竪穴住居出土土器

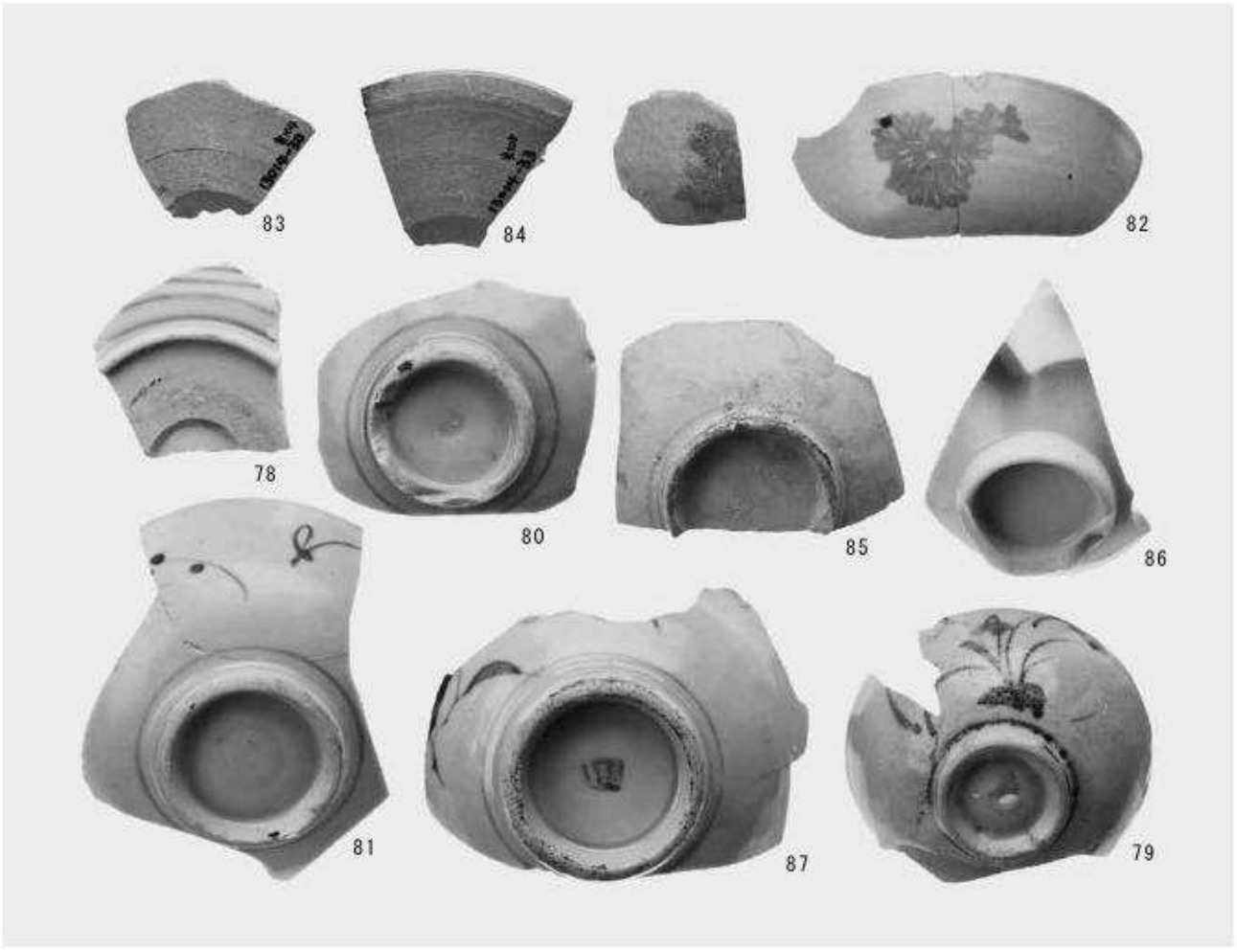
竪穴住居4-3出土土器

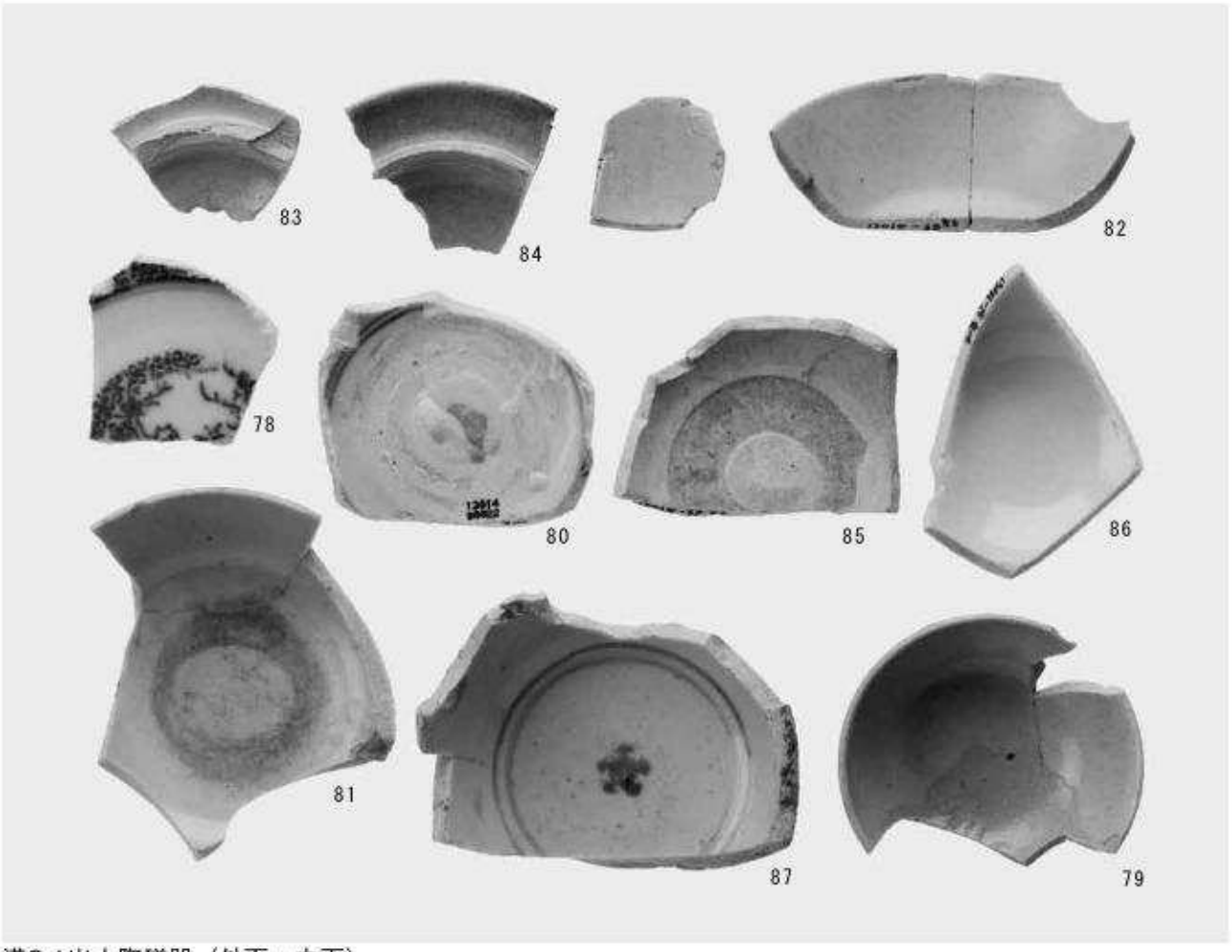
図版25　溝2－2出土土器



溝2-2出土土器

図版26　溝2—1出土陶磁器





溝2-1出土陶磁器（外面・内面）